

## 阪神大震災に思うこと

北 区 伊 田 幸 子



この度の阪神大震災で神戸市は大変な被害を被った。それは言葉に言いつくせないものであり、この廃墟を目の前にして、埋もれた人々の悲しみを思うとき、記録に残しておかねばならないと思っても写真を撮る勇気などはない。

地震直後、恐怖と混乱の日々の中で神戸市民が一番渴望したのは何であろうか。停電と余震、火災の続くなかで、唯一ラジオが情報源であった。私はこのような非常時で混乱している時にこそ、神戸市長の力強いメッセージが欲しいと思った。市長の第一声が流れて来れば心が少しでも落ち着くのではないかと思った。毎日ひたすら待った。しかし流れてはこなかった。

つぎにテレビを食い入るように見た。市長の顔は出てこなかった。〇〇大臣の顔などはどうでも良い、市長の顔が見たいと思った。テレビでもメッセージはなかった。大臣の横の端の方に、対応に奔走し疲労困憊の顔を見たのみである。

1月25日の神戸新聞の朝刊に、「悲しみを超えて」と題して『神戸よ』と呼び掛けた陳舜臣氏の「神戸市民の皆様、神戸は亡びない」とのメッセージに心底から慟哭した。このようなメッセージを第一声として神戸市長から欲しいと思うのである。非常時にこそ、力強い口マンのあるメッセージを、いち早く市民に送るべきではなかろうか。

(伊田眼科)



## 大震災を経験して

中央区 黄地 政 則



平成7年1月17日早朝、未だ夢のなか突然ガンガンという音と共に体が宙に浮く感じがして目が覚め、それと同時にガラスの割れる音がしたかと思うと激しい横揺れがして家が今にも倒れそうになり、もう駄目かと感じたとき揺れが止まりました。慌てて2階の子供たちを助けに暗闇のなかを駆け上がり、倒れたタンスの合間に無事にいた子供達を連れて表に出た途端、ゴーという音がして二度目の余震が来て目前で地割れがおきた。

車に飛び乗り、取りあえず広い所へ避難しようと国道へ向かいました。その道すがら倒壊した家々が広範囲にみられ、方々で家人を助けようとする人、呆然と立ちすくむ人、火事現場で娘らしき人が母親を必死に探す光景など、地獄を見るようでした。

数人の人と私もガレキをかき分け、やっと一人を救出し診察したのち灘の金沢病院へ行くよう指示し、その場を後にして取りあえず実家のある宝塚へ向かいました。途中、バイクショップでバイクを注文し翌日取りにいく事として、実家へ着くころには10時間位たっていましたか。その夜は興奮と恐怖で一睡も出来ず翌朝を迎えました。

18日早朝バイクを取りにいき、そのまま神戸へ向かいました。途中、見慣れた西宮、芦屋、神戸の町々の変わり果てた姿をみて、何故こんな事がよりによって此の阪神地区に起きなければいけないのか、情けない気持ちがこみ上げてきて涙が出そうでした。

約3時間かけて神戸の診療所へ着いたとき、ビルが無事に建っているのをみて安堵しました。エレベーターが動かないので階段を5階まで昇っていくと、階段のカベが崩れていたりガラスが散乱していたり、診療所のなかを見るのが怖くなりました。やっと入口の前に立った時愕然とし力が体から抜け落ち、中を整理する気にもなれずその場を後にして今後どうすべきか考え、取りあえず医者として何が出来るか、治療を必要とする人がいる以上何かしなければと考え避難所の医療をする事としました。その日からは大変な日々が続き、2月6日、やっと自分の診療所へ戻り、何とか薬だけの診療を開始しました。

こんな経験はしたくないが、体が無事であったおかげで震災というパニック状態での様々な思いや行動、社会情勢の変化が非常に興味深く感じられ、今後神戸がどのように変身を遂げるか楽しみにしております。開発、開発と表面ばかり追求せず、兵庫県民の為の政策を中心とした、カッコ良さなど要らないから、安全で住みやすい町を期待して止みません。

(黄地内科クリニック)

## 患者も医師も災害弱者だ

西 区 額 田 勲

### 一、医療者の心の傷

医療支援を求める第一報は瓦礫と焦土の街と化した長田から届いた。その長田区地域では、最大の基幹病院である西市民病院の病棟が押しつぶされ、死者を出したのをはじめ、ほとんどの病院がかなりの打撃をこうむり、既に区内の医療機能は壊滅的と報じられている。

民間のS病院は建物の損壊により、またT病院も類焼に見舞われたため、院長たちは入院患者と共に近隣の保育所、中学校に難を避けたらしいが、避難先で自院の患者ばかりではなく、数百名の被災者の診療を同時に果たさねばならずパニック状態と伝えられる。

ために、比較的損害が軽微であったA病院、K病院などに、多数の重軽傷者や死者が集中的に運び込まれ、例えば後者のK病院では百五十の許可病床数に対して、緊急避難的に二百人の入院患者という状況で混乱の極みとされる。ただし、これらの病院でもライフラインと称される電気、水道、ガスが途絶しているため、窓際の明かりで、あるいは懐中電灯で傷口を照らしながら小手術の縫合をするありさまらしい。とはいえ、緊急の大手術となれば大量の水がなくてはとうてい不可能という悲鳴が聞こえてきた。

後方の病院もライフラインは似たような状態なので、容易に大量の給水というわけにはいかない。が、急遽ガソリンスタンドで買い集めたポリタンクに、被害の軽かった地域に出向いて貯水の後、数時間の交通渋滞を覚悟して、なにはともあれ長田区へ向け出発。

まず百三十名の入院患者と向き合っているA病院で水をおろしたが、そこはまさしく野戦病院さながらの光景だった。停電の中で水、熱源なくして入院患者の給食を確保せねばならない。水洗便所の便器に溢れるような汚物を処理せねばならない。それでいて押し寄せる被災患者の救急に対応せねばならない。等々の要求を前に院長はじめ職員がそれぞれに怒声を発しながら駆けずりまわっている。彼らの顔が苦悶にゆがんでいるのは、殺気だった被災者の患者や家族の雰囲気煽られているからではなかろう。職員の多くは病院周辺に住んでおり、当然彼や彼女も肉親を失い、家屋を奪われた受難者として、必死に悲しみと苦痛に耐えながら、押し寄せてくる救急の患者、運び込まれる死者と対峙しているのだ。

大災害に際して被災者の心を襲う精神外傷ストレス症候群は深刻に過ぎる問題だ。父を、妻を、子を、そして家をと、人間につらなる全てを喪失した魂の痛手は経験者でなければなかなか理解しがたいことである。当初の不眠、幻覚、過度の生理的緊張にはじまって、重症の場合は数年におよぶ精神障害も珍しいことではなく、時には自殺を誘発するといわれる。

その症状の程度が医療従事者においてより深刻とされるのは、被災者でありながら癒しの立場に徹せねばならないからだ。今回の大災害では損壊、類焼を免れた場合でも、はかり知れない打撃が懸念される所以である。

### 二、患者と人間疎外

順序は逆となったが、被災した受難者のことにふれよう。

災害死の場合、その多くが「古い、木造、一階」の住まいということだが、対比的に病院、老人ホームなど施設に入居していた者がこの災害で死に遭遇したのは少数だ。

この事実はく在宅の医療>を官民あげて鳴り物入りで推進している現在の地域医療システムに対する皮肉な逆説である。

甚大な被害を受けた長田区の場合、災害以前、特別養護老人ホームがたった一箇所という現実があった。ゆえに、住民は行政の政策に忠実に在宅医療の比重を高めざるをえなかった。その在宅の加療生活のゆえに患者や家族は今回極めて厳しい現実直面することとなったのだ。

災害後、在宅患者については安否の確認から開始せねばならなかったが、普段から人間疎外の強まる地域で、ひっそりと没交渉に徹する老人たちの調査を一体だれが系統的に進めていったというのであろうか。二ヶ月以上もたって未だに死者がぼつりぼつりと報ぜられているが、その多くは身寄りのない老人という見方があり、平素からいかに彼らが情報過疎の中にあるかという証左である。

その老人たちの消息確認において、彼らが親戚宅、病院、他の施設などへ目まぐるしく移動した事実が、いくつかの証言から明らかになっている。確かにかろうじて生存した老人は、在宅から施設へ一時的に避難したが、そこでの生活は障害を抱えた彼や彼女にとって、生き残ったことを素直に喜べないほどのものであった。というのも、老人施設の類はどこも避難者であふれ、施設本来が果たしていたショートステイ、デイケア、入浴サービスなどの機能が完全に麻痺してしまうほどの混乱ぶりであった。

例えば、痴呆老人たちは家族に伴われて近隣の避難所にのがれた。ただし、一般に老人性痴呆は環境の変化によって悪化をみることが多いとされる。

災害直後、避難所の機能しない水洗便所には、新聞紙の上に大便が、その上に新聞紙と大便が、次々と堆く積み上げられ、その便臭たちこめる周囲で、彼らは手足を曲げて寝ころんだ。厳寒というのに暖房のない劣悪な環境、しかもおむつを強いられた窮屈な生活で、彼らの心身の能力が低下するのは当然である。

彼らに災害という認識があったか、なかったかはともかくとして、時をえらばぬ徘徊、所かまわず失禁など、その病癖は他の人々の安眠を妨げるとして、まもなく避難所内部の批判にさらされる。彼らの介護にはある程度の基礎知識が必要なので、にわかに登場したボランティアにとって痴呆老人の介護は荷が重すぎる。かといって、本来の高齢者のためのボランティア介護者は被災しており、その種のマンパワーは極端に不足していた。やがて彼らは家族と共に他の避難者の厳しい眼を回避しようとして、二、三日ごとに避難所を転々とするありさまである。

災害後、区役所に併設された避難所で見かけた痴呆老人の介護家族を、炊き出しボランティアに出かけた別の機会に小学校で見かけたのは決して偶然ではなからう。

かかる厳しい人間疎外の実例にわれわれは果たしてうまく対応できたのだろうか。

### 三、弱者たちのネットワーク

ところで、今回長田区の場合、頂点から末端まで絶望的な行政機能麻痺の中で、民間病院の院長や職員たちの奮闘は今後のことに示唆的だ。いや、長田区ばかりではなく他の地域でも、かなりの医師たちが自転車で警察その他をかけめぐり、ポリタンクで水を運び、また懐中電灯をたよりに住民の生命を守るのに躍起になったという。

平時にあって、医師過剰、低医療費政策などで次第に自信を喪失しつつあった医師たちだが、今回は憤然と使命感に目覚めて立ち上がった者も少なくなかった。彼らは通常看護婦などマンパワーの不足に四苦八苦ししている存在だが、この大災害の中でさらに激減したスタッフの力を集中させ、情報網途絶、交通寸断、さらにライフライン壊滅の中で、地域医療の灯を守り抜こうとしたのである。

行政中心の地域医療システムの崩壊は、かろうじて個別の奮闘でなにがしか救われたというこ



とだ。

「行政、医師会のパイプが壊滅した中で、個人的な、地域のささやかな人脈にどれほど助けられ、勇気づけられたことでしょうか」とは、それらの一医師のしみじみとした述懐である。

人々の死活を分けた時期に、地域の自然発生的な互助組織の救助活動以外は一切救命に役立たなかった事実と合わせて、その言より学ぶべきことは多い。

災害以前、厳しい批判にさらされつつあった患者、医師の関係の歪みは、前述の施設不足に明らかなく、既存の地域医療システムの内容にもあったことが災害を通じて明らかにされたわけである。

いま行政を中心に「頑健な防災都市」復興論が盛んである。ハード面の強化により災害を未然に押さえ込もうという発想で、地域医療の分野でいえば今後耐震性やライフラインが強化された医療機関建設という意味内容と考えられる。

ただし、神戸のこともさることながら全国津々浦々の都市のことを想定すれば、震度7などに耐える防災都市化というのは財政的にとうてい不可能な到達目標であろう。

自然災害は明日、いや今夜にもおこりかねない。それに対しては第一に平時の地域医療そのものの充実、第二には不幸にして災害発生時は、残存機能を最大限活用することをおいてないというのが今回の最大の教訓である。

平時でも、非常時でも、職能集団がまじめに医療に没頭できる本質的な体制とは、実に医師たちの独自機能と住民たちの力のネットワークにあるということだ。

点から線へと地域医療が再建されていった過程に学ぶ時、頑健なハード中心の人工構造物という以前に、人のつながりを軸にした地域医療のシステム、つまり柔軟なソフト建設を今度こそ重視したいものである。

(みどり病院)

## 震災時印象に残ったこと

兵庫区 早稲田 則 雄

「えらく長く揺れる地震だナー」、須磨区友が丘の自宅の寝床の中で、私は揺れがおさまるのをじっと待っていた。地鳴りに続く揺れが断続的に繰り返され、障子を透して戸外が稲光のように明るく感じられた。停電のためラジオからはいつてくる情報から、かなりの被害が明らかになりつつあった。

急場しのぎ分の水と食糧を確保したあと、JR兵庫駅のすぐ北にある医院までの10キロメートルの道を長男と二人で自転車で出掛けた。須磨離宮公園を過ぎた頃から塀が倒れ、屋根瓦が落ち、壁のモルタルが剥がれている家々が目に入った。東進するにつれて状況は悪化し、ベシャンコに潰れた家屋が目立つようになり、さらに長田区に入ると、東西に走る幹線道路の両側のそここで倒壊した家屋がメラメラと燃え上がり、黒煙が天を焦がしていた。

目にしみる煙の中を突っ切って兵庫区の医院を目指した。現地では医院のすぐ隣の二階建文化住宅は一階が半ば押し潰され、建物全体が道路の中央部まで迫り出しているのにまず驚いた。近所の顔なじみの方々は呆然として破壊された周辺を見回し、あるいは道路に落下して砕け散った屋根瓦のかけらを拾い集めていた。鉄筋10階建マンションの2階部分にある医院に入ると、診察室の外壁はX印状に破壊されて床上にコンクリート塊が散乱し、鉄筋が剥き出しになって壁穴から戸外が観察できた。自宅を出発してから目にしたすべての事は、思いもよらない程ひどいものだった。

今回改めて思ったことの一つは、報道機関等を通して間接的に得られる情報と、自分の身体を現場に運んで肌で感じた内容とのギャップがいかに大きいかという事である。いくら創造力を逞しくしても生の体験には遥かに及ばない。と同様に、激震地で震度7を体感した人達の驚愕や恐怖も、身近な人を一瞬にして失った悲しみも、避難所での集団生活の耐え難さも、私の推量を許さぬものであろう。震災後当医院を受診された患者さんのうちで全半壊又は全半焼の方が5百名を越えた。医院周辺の木造住宅のほとんどが取り壊しの対象で、日々更地が広がっている。被災地の真っ只中で内科診療に従事している私にできる事は、日常の診療は勿論のことであるが、被災された方々の訴えに耳を傾け、慰め、励まししながら、その方達が一日も早く立ち直りますようにと祈るばかりである。

もう一つ印象に残ったのは、いつもは勝手気儘に生きている風に見える子供達が、震災直後は分担・協力して食糧の買出し等に参加したり、断水後、寒風の吹き抜ける公園の水もらいのための行列に交代で並んだことである。各地から応援に来神したボランティアの方々の活躍はマスコミで周知のとおりである。「人間は本当は人の為に尽くしたいのだ、人の為に尽くすことに喜びを見出すものなのだ」という事実を確認したことは、混迷の二十世紀末を乗り越えようとしている私達に示された一筋の光明である。

(早稲田内科)

## 阪神大震災に被災して

中央区 船 阪 和 彦



昭和56年、現在地に移築した中央市民病院は、地下1階、地上11階、1,000床を有する神戸市の中核病院として、また神戸大学付属病院と共に三次救急を受け持つために救命救急センターとして市民から期待されて稼動した。以来、一次から三次まで、また高度医療を具えた病院として機能してきた。その中で働く者にとって、それはどんな災害に当たっても通常通り機能し、市民の期待に応えられる戦艦大和のようなものと感じていた。事実、最近の高層ビルに見られる耐震構造を持ち、その基盤は海底にまで達し、人工島に浮かぶ夢のような病院と市民からも見られ、何が起こってもここへおいで下さいと胸を張って言える病院だと思っていた。

何とそれが鯨の一跳ねで一瞬のうちに機能が崩壊したのである。それでもまだお目出たいことに水深20センチメートル以上の黄褐色の泥海の中をそろりそろりと車を走らせ、建物の全容が何事もなかったように毅然として建っているのを見た瞬間、ほっと安心し、入院患者さんも安心していただけることと思ってしまう。ここまでは地獄のなかの天国であった。

普段は何の苦もなく昇降していたエレベーターがライフラインの停止とともに停止し、漆黒の闇の階段が天まで届くばかりに続いているのである。横揺れは高いところほど大きいのが当たり前、とにかく11階まで上がった。さすがに病室には大きな窓があり、明るく生き返ったような気がした。それも束の間で、詰所の大きいカウンターが倒れ、病室の中ではベッドの頭の壁が突き破られ、隣の病室の壁まで破られているのを見ると、揺れの大きさが一瞬想像出来ないものすごさであった。それでも11階の4詰所を廻って、患者さんに大きな怪我のないのを確かめほっとした。その後、エレベーターホールの東側廊下に水道栓を開いたような水が天井からもれているのを思い出し、そこに駆けつけると、いつの間にか天井が破れ、華厳の滝のようにドドーとすさまじい音で廊下に流れ、病室のほうに川のように走っていくのを見てぞっとした。他の職員とともに12階屋上に出て高置水槽が壊れて池のようになっているのを見て何処を止めるべきか考えていたが、よく判らないうちに職員の一人が裸になってプールの中に入り、やっと止めてくれた。ここまでが病院に到着してわずか1時間以内のことである。

病院の管理者の一人として病院到着までに何を指示すべきか、病院をどのように動かすべきか考えた。その1は外来を閉鎖すること。その2は救急外来をいつもより手厚くし、後方支援上級医師を直接張りつけること。その3、入院患者（973名）さんの水、食料を栄養科を通じて確保すること。その4、外部から運ばれてくるであろう救急患者さんの入院場所を確保するため、出来るだけ空床を確保すること。その5、職員の安否及び出勤可能職員数の把握。その6、病院各部署の被害状況と可能な医療レベルの把握であった。しかし、現実には、考えていることと行動は全く別問題で誰に聞いても何も判らず、結局、液状化現象で浸水した地下から救急外来、その他を自分

の足で廻ることだった。普段は病院の隅々まで判っているつもりが、いかにさぼっていたか実感させられるのが落ちであった。

その時、管理者の一人である田村副院長が出動している職員の各部署の代表者を集めて全体会議を開きましょうとささやかれ、自分の中でもモヤモヤしていたことへの回答でもあり、12時から会議を開くことにした。12時になると会議室に入りきれない程の職員が集まってくれた。ここで初めて病院各部署の現況を知らされ、また、それを総合して病院全体の方向を指示することが出来た。勿論、この時の指示は院内中心、入院患者中心のものであり、外部に対しては、全診療科24時間体制で救急に当たるというものであり、避難所へ駆けつけることは考えなかった。それは神戸市には二次輪番群制の全市的救急体制があり、特に、その中で三次は全部当院が受け持つという使命が長らく習慣として身体に染みついていたため、三次を中心に待ちの姿勢しかとれなかった。

しかし、一次か部分的には二次までという医療機能の低下が現実であり、重症の入院患者さんは各科部長の判断で、ある人はヘリコプターで、ある人は救急車でと転送され事なきを得た。結果としてこちらの考えているように短時間にかなり無理をして病棟を空けて、相当の患者の転送を受けた。この多くは短期で退院し、2月上旬には入院患者が630名ほどと底を打った。院内で、特に外科系の医師は手持ち無沙汰を嘆くかのような発言が聞かれるようになった。

ここでやっと地震発生の初日から救護所に出務したいと若い医師が言っていたことが、病院として現実に可能になってきた。当初より出勤不可能のDr.のうち何名かは自宅近くの避難所で地元医師会のメンバーと共に救護活動に奔走していたが、病院全体で院外出務に取り組む事がやっと可能になってきた。

過去の震災と比べても今回は全国規模で多くの自治体、大学、個人のDr.が早くから被災地に入り込んで医療ボランティア活動を活発にして頂いて、市民を守るための市民病院としては非常に感謝している。しかし17日の早朝から72時間は殆ど地元医師会のメンバーと保健所が中心となって活動したことは当然であり、明白である。「開ちゃんのつれづれなるままに」という軽妙な文章をこの会報に載せている開田先生からは、早朝魚崎小学校の校庭より連絡を受け、ガーゼや医療物品を東灘診療所から持ち出して救援活動に役立てて頂くようお願いした。開田先生も自宅兼診療所が半壊し、自ら被災者でありながら、数日間は小学校の校庭で自動車で寝泊まりして救援活動を続けておられ、こうした医師会のDr.の献身的な活動については市民の方々が一番よくご存知のことと思う。

さらにDr.のボランティアだけでなく、ありとあらゆる種類の仕事に黙々と働かれたボランティアの存在も忘れられない。病院という小さな社会でさえボランティアの助けがなければ、職員だけではどうにもならなかったであろう。被災地のなかでは消防、自衛隊、警察、日赤等の大きな組織力での活動が顕著であり、当院もその恩恵を大いに受けたが、病院内の11階までの階段をポリバケツの水を運び上げて頂いたのは遠方からの多くの個人的なボランティアであった。この中には外国から来られた方もおられ、今までの自分の考えの狭さ、甘さに恥じ入る次第であった。

今回ライフラインという言葉がよく使われ、その内容は電気、ガス、水道が中心とされているように思う。事実そのとおりであるが、電話を始めとする情報交換のための通信手段と交通がそれに含まれるべきだと痛感している。病院内も早くから全力をあげて整備し、三次救急が受けられると市の対策本部より各所に発表して頂いたにもかかわらず、あの混乱の中では橋が壊れて通れないという怪情報だけが一人歩きしていたように思う。

このような初期数カ月の体験から今考えていることは、防災、情報交換手段の改善等多々あるが、まだこの不完全な復旧状況のなかで、世界中のどこかに大災害が発生した時、緊急に医療班を組んで送りだせるかということである。可能性を探らねばと思っている。

終わりに当たって、市民病院を助け、支えて頂いた地元医師会の先生方を始め、多くの患者さんを受け入れて頂いた他地域、他都市の医療機関やボランティアの皆様に衷心よりお礼申し上げます、現在の埃高い神戸が震災前よりさらに美しい活気のある街に変身する日の出来るだけ早からんことを祈りつつ筆を擱く。

(神戸市立中央市民病院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 阪神大震災に思う

中央区 太田 昭 斌



まず、今回の阪神大震災で亡くなられた、多くの方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。突然、ドーンと床下から突き上げるような、爆発でも起きたような衝撃で飛び起きると同時に、今度はグラグラッと大きな横揺れ、ロッカーが腹の上に倒れ、テレビ、スタンド、小型冷蔵庫、白衣棚が倒れ、一体何が起きたのか。とにかく、大変なことが起きたらしい。眼鏡を探し、当直室から廊下へ飛び出すと、患者さん達の悲鳴、その間にも振動は度々、停電と同時に一時的に自家発電が作動して明るさは保たれたが、まず、患者さんを廊下と階段付近に毛布持参で避難してもらい、ガラスの破片が散乱しているため、スリッパを全員に履いてもらい、各病室を看廻り、残っている人達に「大丈夫です。心配ないですよ」と声をかけ、落ち着いていただき、母親はベビーを心配するので当直小児科医に各々手元に渡してもらい、三回位看廻ったように思う。次いで、火の出そうなところを見廻り、廊下が水漏れのため滑りやすくなっているため水漏れ個所をモップで拭き取る。次いで、ガラス破片をホーキと塵取りで拾う。努めて「落ち着け、落ち着こう」と言い聞かせながら。音楽を流そうとしたが、自家発電のため不能。各階のエレベーターの使用禁止の貼り紙、腹が減ってはと、取り敢えず朝食の手伝い、一方、2階詰所の畳部屋に、気分不良者を収容するようにフトンを用意。ここまでが現場での初期行動で、医療らしいことはしていない状態だった。

破損した時計の針は、一様に5時46分を指して止まっていた。この瞬間に、殆どの家屋の倒壊が起き、次いで、火災が起き、尊い人命が失われ、この瞬間に「生と死」の分岐点があったのだろうと思う。患者さんに被害の無かったことが唯一の救いであった。何か大きな力に守られてたような気がしてならない。

後に神戸が未曾有の大災害の中心地であることを知る訳であるが、直後より、通信網は不通となり、停電中のためテレビは写らず、外部との連絡は完全に断たれ、全く情報が得られず、連絡も寸断され、地域内の医療機関との連絡網も全く機能せず、情報収集不能で全くの孤立状態であった。院内にも独自の連絡網があったが、全く機能せず、三日目までは現場に居る者達で対応せざるを得なかったのが、今回特長のように思う。

行政も含め、救急体制の立ち遅れと、通信・交通の機能喪失により情報収集が出来なかったこと。次いで、ライフ・ラインが断たれたことなどが致命的であったと考えられる。

あの忌まわしい戦争の傷痕から立ち直り、戦後50年に、選りに選って、この神戸の都市が代表で選ばれたらしい。精神的なショックに対するメンタルヘルスの必要性が昂まる中、一日も早い医療機関の復興が、地域住民の心の安定、健康の保持に繋がる。都市直下型大震災で市民の生活

環境は完全に破壊されてしまい、これからの地域医療は厳しい。マニュアル通りにゆかなかった今回の経験を今後の教訓にしなければいけないと思う。

災いは忘れた頃にやって来る。どうか、犠牲は我々だけにとどめてほしい。日本中、ヒビ割れの様です。明日は我が身と、日頃の心構えだけはこの機会にお願いします。

悪夢から一月以上が経ちましたが、一年以上も経った気が致します。皆様からのご厚情、身に沁みております。

私事になりますが、西宮在住のため、未だにガス・水道不能、交通寸断のため、箕面市での避難生活が続いておりますが、家族全員お蔭様で元気にやっております。ご他聞にもれず、専ら震災ルックで、足を乗り継ぎ、乗り継ぎで変則勤務をしています。連日の代替バス乗り継ぎで、全国の観光バスに乗ることが出来ました。

不思議なもので、一月以上もこのスタイルを続けていると、結構、板についてきたように見えるらしいです。非常用のものは、大抵リュックの中に納まっております。携帯電話、折りたたみ傘、タオル、ひげそり、洗面具、軍手、ナイフ、ハサミ、箸、フォーク、スプーン、ドライバー、ニッパー、ロープ、カイロ、ペンライト、マスク、ウェットティッシュ、下着、靴下、筆記用具、コップにパジャマ等々であります。昔、仲間と山女魚釣りに使用してた愛用のベスト、ポケットがたくさんあり、これが又、役に立っています。ウインドブレーカーを上に着て、マスクをしてのリュックスタイル、ご想像下さい。当分の間、未だ続きそうです。そういえば、一月以上ネクタイとは無縁である。慣れてくると結構気楽なもので、これで今はホテルでも何処でも受け容れてくれる。大阪あたりへ行くと、このスタイル、なかなか親切にしてくれます。先日、久しぶりに床屋へ行ったら、そこの主人が帰り際に、箕面のスーパーガーデンの招待券を2枚くれて「頑張ってください」。家内と2人でお茶を喫みに行ったら、これ又、帰り際に塩昆布の包みを下さり「元気を出して下さい」。金物屋では1,730円の品を1,230円に500円も負けてくれた。etc.etc.

初めての体験で妙な気がしたが、人情という奴なのでしょう。力まず、皆と一緒に行動し、共に喜び、共に悲しむ。よいものです。

一月以上も経ったのだから、記録にと思い、リュックの中にカメラを入れて歩いてみたが、鎮魂のためにも撮ってはいけないような気がして未だに果たせないでおります。

歩きながら思う。「今日は何曜日だろう」「おかげで老後の先取りのための、歩く習慣をこの際に」などと思いつつ、今日も震災ルックで元気に行軍しております。

あれから四カ月が経ち、一つの目標だった震災前から決まっていた娘の挙式も5月13日になんとか終え、無事旅立ちました。

(パルモア病院)

## 阪神大震災に遭遇して

東灘区 白石 敏之



「災害は忘れた頃にやってくる」—今まで言い古された有名な言葉ではあるが、今回の大地震については忘れた頃というより、阪神地区、特に神戸には全く関係ないものと考えていて無防備の状態、突然に遭遇したとしか言いようがない災害で、全く油断大敵といわれても仕方がないような災難でした。もっとも何年か前より直下型地震は起こりうるのだと説いていた学者もいたそうであるが、少なくとも私の耳に届いていなかったことでもあり、もう少し声を大きく警告しておいてほしかったとも遅まきながら思っている昨今である。もっとも、警告を受けたとしても現在の科学では予知不能ということであれば、一応地震発生時の用意くらいしか出来ないというのが現状でしょう。

1月17日未明、突然の大きな揺れで目覚めたが、一瞬何事が起こったのか気付くのに数秒もあつたでしょうか。2階の寝室で寝ていたのですが、ペットが20センチメートルあまりも移動しており、眼鏡の置いてあった場所に眼鏡が無く、勿論、停電でなにがなにか判らないまま階下に降りて、台所の戸棚の倒れているのを足でさぐりながら玄関へ出てみたが、玄関は開かず、部屋から出ようとしてもスチール製の雨戸はびくとも動かず、外からは誰が叫んでいるのか大きな声が聞こえるだけ、やっと診療所の玄関が開き、外へ出れば既に道路前の商店街から火の手が上がっているのが見え、茫然としている内に拙宅にも火が移り、ただただ見ている間に全焼ということとあいなった次第です。



1月17日午前6時頃向かいの商店街よりの火災により類焼全壊しました。僅かに診療所の後がみとめられます。(平成7年1月18日撮影)



夜が明けるにつれ、旧来からの患者が集まってきて将来の事も聞かれるが、勿論的確な返事もできず、無事だった近隣の先生方をお願いするようにして一時その場を離れ、迎えに来てくれた娘のマンションに移った。

当日及び翌日に近所の診療所を回ってみたが、外科系の先生で診療所を開いている所はまるで野戦病院であり、玄関前までも怪我人の列で足の踏み場もない状態、医療機器は散乱していても整理の時間もないようでした。医師会に連絡して応援をお願いしようにも連絡方法もない状況の中で頑張っておられる先生方には頭の下がる思いでした。

このような大災害に指揮をとる方法を医師会で確立しておく必要は痛感したのですが、広地域の災害にはあまり役立たないでしょうか。何か対策を考えておくべきでしょう。私としては検査センターの状況を早く知りたく、幸い通じた電話で問い合わせたところ、市医師会本館は無事、但し2、3階は水浸し、外来部門は大きな被害はなく、西神別館の検査センターは殆ど被害なしということで安心したところです。今から思えば大倉山より移ったことが幸いしたと申せましょうか。

私自身もなんとか今一度地域医療に参加、復活していきたい意欲は充分持っていますが、災害地の復興の様子を見ながら対処していきたいと考えているところです。

(白石医院)

## 私の地震顛末記録

東灘区 中 島 保 治



なにか“ごおー”という地鳴りを夢現に聞いたがかと思いきや、寝ていたベッドから突き上げられたような感覚と同時にがたがた、ぐらぐらが続いた。反射的に寝惚けたままで飛び起きたが暗闇の中でもあり、前に進めるどころか立っていることすらできない。家内に“起きろ”と声をかけ、常備していた懐中電灯を探す。こんな時に限って電池の消耗のためか、ほんの僅かうっすらとしか灯かない。しかしこれを頼りに子供達の部屋へ急ぐ。部屋を開けると入れない程無茶苦茶になっており、2人共恐怖におののき蒲団をかぶっているようだったが、ベッドの上には何も落下しておらず、返事が返ってきたのでほっとした。無事を確認してすぐ又自分の寝室へ戻ってみたら、家内はベッドの横で茫然としており、あたりを見廻すと家内のベッドが180度近くずれて回転しているのにあらためて驚愕する。左頸部と手甲部に痛みを感じたが、たぶん左棚よりテレビとビデオレコーダーが落ちてきての怪我だったと思われる。間髪をいれず家の外から絶叫と悲鳴が聞こえた。薄暗がりの中、外をみると東3軒目の家が全壊、近所の人達の救助を求める声と共に外へ出た。残念ながら生き埋めとなった2人を助けることは不可能だった。

朝が明けはじめるとはっきりとすべてが見えてきた。よく助かったものだと思えば胸を撫で下ろす反面、ぞっとする思いが交錯した。気を取り戻し、唯一のたよりである携帯用ラジオにかじりついた。これを聞いて、初めて神戸に大事が起こったことを知った。しばらくして下の娘の大学の先輩が様子を伺いに来てくれた。彼は2人を全壊した家の瓦礫から助け出してきたといった。

足の踏み場もない家の中をスリッパをはいてまたぎ歩くしかなく、まず2階の上の娘(臨月を迎えていた)の部屋のベランダより、今後の余震警戒のために縄梯子を準備し、ガス、水道、電気などの元コックを締めてまわったり、家内は貴重品の持ち出し準備や夜に備えての用意などでそれぞれ動き廻り始めた。次に何をやるべきかを考えていたところ、梶川会長が自転車で訪れてこられ、各理事や近くの医師に協力医(避難所への)として連絡するようにとの由。私も急いで近隣の先生へ連絡に廻った。(後で分かった事だが、会長宅は殆ど全壊なのに会員のことを考えての行動、頭の下がる思いであった)また会長より伺っていた某先生宅が危ないようなのでよろしくとの事のため、下の娘を連れて往診カバンを自転車に積んで急行した。先生宅も全壊であったが、幸いにも瓦礫の下より近所の人に助け出されたようで、胸部圧迫のため某病院へ運ばれたが混乱のためか、これぐらいなら家で安静に寝ているようにと言われただけで(左肋骨骨折)、返す言葉もなく引き返し、路をへだてた家の応接間で寝ておられた。少しの呼吸困難と疼痛があるため、診察した上でいやがられたが湿布処置を強制的に行い、元気付けて家をあとにした。

帰宅途上、避難所の一つである御影中学校へ寄った。体育の先生とも話し、体育館へ足を運んだが、重症の人は救急車で病院へ送った後だったため、2~3の人の血圧を測定するだけで、何か

あったらすぐ連絡しますとの返事をいただき娘と共に帰宅した。その途中の町並の状態は私が生まれて初めて目にする惨憺たる光景であった。

その日は余震も続き、不安と寒さの中で一夜が明けた。翌朝、町内会の通報より御影地区に避難勧告が出された。何事かと思っていたら浜御影のガスタンクの 하나가壊れLPガスが漏れ、爆発の恐れあり、住民は山手の方へ避難せよとのこと。ダブルパンチに見舞われたのである。通常なら簡単に致し方なしと思うのだが、今回は私的な事で恐縮だが、嫁に行った身重の長女を預かっているという責任の問題もからんでいたのも、さあ大変なことになったのである。というのは、全員歩いて避難しろというからである。可哀相だがゆっくりと時間をかけて上り道を歩かせた。しかし避難する建物はなかなか遠く、途中公園の中でダンボール箱を壊してその上に座らせ時を待っていたが、雨が降り出したのと寒さのために娘のお腹の状態が痛くなりはじめたため、覚悟を決めて(LPガス爆発の)また家へ引き返すことにした。しかし無人と化した御影地区には執拗にスピーカーが鳴り響き、避難することのみ伝えていた。このため家族と相談した上で、娘と娘のお腹の児の危険を察知し、電動式のガレージをこじ開け、とりえあず京都への脱出を決意したのである。(京都は嫁ぎ先でもあり、家内の里でもある関係で)夕方4時頃出発したが、進む道々殆ど不通箇所が多く、六甲山越えて三田、篠山、福知山、綾部、亀岡を通り9時間かかってやっと京都へたどりついたのも夜半すぎであった。途中で電話をするために立ち寄ったビジネスホテル“アピカルインキョウト”の人達は私共が被災であること、また娘の状態に気付かれ、温かく迎え入れて下さったことに心より感謝している。また出発のときには給水もしていただいた。

19日朝になって娘の状態がやや緩和したようなので(咽頭痛、頭痛は少し残っていたが解熱したので)、さっそく親戚の京大総長宅へ電話し産婦人科医を紹介していただいたが、この日は診察できず、翌日連れて行ってみると容態よりみて24日帝王切開のやむなきと決定した。このためひとまず家内の兄夫婦に娘達を預かっていただいて、家内と夜遅く神戸へ引き返した。(8時間近くかかった)すぐさま21日、家内は娘の入院、手術の準備をして夜遅く(夜でないと車が走れない状態のため)タクシーで再び京都へ行かざるを得なくなった。これから以後が私の暗闇の中での正念場とおぼしき単身生活が始まった。

さて一人になって診療所も自宅もぼちぼちと後片付けをし始めるが、何回か襲ってくる気味悪い余震のためなかなか整理がはかどらず、ため息をつく時間がやたらと多くなった。このため明るい間は連日避難所である近隣の小・中・高の学校へ往診カバンを持って救援活動に参加、いろいろな人達と交流でき、刻々と変わる震災後の実情を見聞し、時間のたつのも忘れがちとなっていたが、夜ともなると孤独におちいり懐中電灯とラジオをそばにおいて、いつでも避難できる体制を整えつつベッドに横たわるが、7枚の衣服をまとっても寒さが骨身にこたえる辛抱を強いられると、幼い時の冬の空襲警報のことがふと頭をよぎった。

食事は毎日道に並んでいただかないといけないので、朝は食事なし、昼と夕方は区民会館でオニギリ2個と漬物2切れ、お茶がなく冷たいコーラかジュースで飢えをしのいでいた。4日たつと毎日同じ食事のため内心はうんざりしたが、半ば感謝の気持ちもあった。この頃より精神的に不安定となってきたのが分かる程、誰かが訪ねて来てくれるのを楽しみに待つようになった。まず娘の友達夫婦が名古屋より(車で12時間かけて来神)、タンクの水と飲料水であるペットボトル、ガスコンロとガスボンベを届けてくれ、やっと暖かいお茶にありつけた。久方ぶりの感慨であった。更にいろいろな人達がカンズメやインスタント食品を、遅れて高校時代の友達からどんどんいろいろな品物を送っていただき、少し人間の生活らしさに戻ったようだった(本心はなかなか家事ができず悩みつづけていたのであるが)。

24日夕刻、気になっていた娘の件で公衆電話にて無事出産との朗報を耳にし、安堵と共に少し気持ちが落ちついてきた。

翌日また巡回診療に出たが、全国より救援医師が来てくれた関係で、以後避難所へは行かなくなった。

26日、従業員一人と薬局の方が一人来てくれたのと、患者さんやその家族の人達が薬をとりに来たのと一緒に、片付けと同時に懐中電灯を5個並べて薬作りに専念した。

30日、やっと電気がついたので午前中のみ診察を開始したのである。午後～夕方にかけては300メートル程離れている近くの井戸水を運ぶのが日課となった。水道が来たのが2月7日であった。この間、明石成人病センターに勤務している息子も時々時間をもらって水その他を運んでくれ、また手伝ってくれた。

もう一つのトピックスは22日夜半、集団泥棒に入れそうになったが、大声と電灯2個で撃退したことである。更に患者さんの言葉に甘えて淡河までお風呂をもらいにいった(2週間ぶりである)。この間下着は一応着替えてはいたし、濡れティッシュでいつも清潔にしていたつもりだが、少年時代の情景が交錯する。

次に2月5日の日医生涯教育講演会に大阪へ出席した目的は、散髪と入浴と暖かいものを久方ぶりに食するためであった。このような状態のため我が家では今でも私一人のことが多く、家内と下の娘が時々京都より返ってきてまた行くという生活が続いている。

今回私なりにいろいろと体験できたことがまたいつの日か生かされることがあろうが、いや、あってはならないと愚考し続けている毎日である。

稿を終わるにあたり、今回の大震災での多大の被害を被られた方々に心よりお見舞い申し上げますと共に、不幸にも犠牲となられました人達に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(中島医院)

## 悲観論者

兵庫区 常 深 幸 生



今回のことで地震学者の権威の失墜はまぬがれない。これは大変なことなのである。天災に対し人間は全く無力であるということ、いやというほど見せつけられた。

村山総理の行動に対しては、17日、18日はまあ許されると思う。神戸に震災が来るなんて誰も思わなかったからである。しかし19日以後は政治家たる者は豹変し、大ナタを振るうべきである。敵が攻めてきてそこで会議を開いた感である。政治家たるものは、自分の命を惜しんではだめである。殺される心準備が出来ていなければならない。その点で村山さんは労働組合長でしかなかった。私が思うに、18日、村山さんは震災に対し国民に向かって「規正をかける、しかし金は出す」これで先ず安心させる。次に20日には学者、財界、金融、政治家、庶民、諸々…でシンクタンクを作り、タテワリの行政をテツ廃す。その会議で意見の難航していることを時々マスコミを通じ公開する。これで良い結論がほど遠いということを一応民衆に知らせるのである。たとえば、電車が遅れている時、乗客はイライラして待つ。しかしパンタグラフが壊れているとマイクで流す。事情がわかれば仕方がないと、やや安堵する。

私は村山内閣に期待はしていない。ここで本論からはずれて政治の話になるが、村山内閣の成立は、世界の目から見て奇異であった。愚行だったのである。その内閣がこの非常時に良い案を出せるわけがない。やがてボロが出て村山氏、河野氏、森氏は失脚し再び桧舞台におどり出ることはないであろう。ついでに言うが「さきがけ党」は細川氏と別れたのは失敗だと思う。田中秀征はもう少しでしたと思ったけど、社会党の山花氏、赤松氏は時を見る目がなかった。去年脱党すべきだった。

私が中学生の頃、戦火で神戸が一面焼け野原になっていた。それを見た時、いま都市計画をおこなわないと、もう二度とこのチャンスはないだろう、しかし利権がからみ至難の業だと思った。その絶好のチャンスがまた来たのである。今度はこの機を生かし、世界に笑われない都市になることをひたすら祈る。

<追記>

## 性 悪 説

永いあいだ性善説と性悪説、このどちらに軍配があがるのか関心の的でした。孟子、荀子から2千年以上たっても、まだ結論が出ないのに私がシャシャリ出ることはおこがましい。しかし気になることでした。すると10年程前ハット思いつく事柄があり、決りと出たのです。それは人間に

はネタミ（ジェラシー）利己主義（最後は自分が一番かわいい）このふたつがあるので、私は性悪説を取ったのです。今回の震災でこの性悪説が一挙に噴出した感じです。テレビの論客は、おかみが悪く庶民はそんなに悪くないように放送していますが、庶民も結構悪くがっかりさせられます。ひとつひとつ言うと枚挙にいとまがないので、おおざっぱに言います。

1.人間は困窮した時に本音が出てくる。「ブルータスお前もか」といった感じでした。

2.与える人と、もらう人にはっきり別れた。もらう人に感謝の念がなくずうずうしさがめだつた。

3.物持ちはその分量に比例して損をした。例えば三宮のビルの持主は、がっくりである。

4.精神病者がふえた。主に不安神経症とうつ状態だと思う。又当院での糖尿病4人いずれも血糖値が上昇している。生活環境の変化だと思うが。

5.私は前から古いガラクタを集める癖がある。そこに江戸時代の徳利がなに知らぬ顔で立っている。これと30年もつきあって来たが、私は「把鏡照面心茫然」である。窓から外を見れば草木は初夏の光を受け若芽、天を指す。しよせん色即是空。

無一物、無尽蔵

このことが震災により、そうだそうだと思う毎日。終わりにひとこと余談。人生情あり。

(5月21日)  
(常深医院)

## 震災と私と医師会と

兵庫区 本 多 平八郎



天地鳴動す。その日の朝、布団の中で頭が醒めて行くのを楽しんでいた時、言いがたい地鳴りと激動に襲われた。飛行機が落ちたかと思ったが、振り回される電灯の笠や天井を見て、地震であることが理解できた。

部屋を見回すと、本箱の一つは壁沿いに北に滑り、一つは南に大きくかしぎ、机とパソコンラックも勝手気儘に位置を変えていた。コードがモルモットのはらわたのように絡み合っている。もともと私の部屋は物置みたいになっていて、雑多な道具の瞬間に寝ていた訳だが、今はもうごみに埋まってしまっている。しかし見たところ家は潰れた様子もない。

どうしたものかと考えていると、家内が飛んできて布団の裾にべったり座って、「怖い」と繰り返すので「怖かったね」と同意しておいた。実のところ私の頭は何時もと違う働きをしていたのかも知れない。

私が動かないので家内は「腰が抜けたか」と言う。これをきっかけに起き上がって、落ちかかったパソコンをそれぞれ元の位置に引きずり上げ、家の中を一回りすることにした。どこもここも唸る程の状態になっていた。台所を眺めたとき家内が大切にしていた食器だけが割れていて、あまり好きでなかったと思われる食器は厳然としてその中にあり余震に踊っていた。

蒼くなって私に付いて回る家内に「これからは学校給食みたいな食器を買いなさい」などとつまらぬことを言っていたようである。

何事も初動が重要と言われるが、これらの言動が後々に尾を引いて、「私よりパソコンが大切か」「人の気も知らないで」「歳をとっても、おむつは換えてやらない」などと今や家族の批判的になっている。

外を見ると、近くに火の手が上がり、火の粉が飛んでいた。火の粉というのは灰のような物と思い込んでいたが、木切れに火が付いて飛んでいる物と知って非常な驚きを覚えた。

家の前には血だらけのタオルや素手で体を押さえた人々が集まっていた。この時6時5分、階下の診療室は4階の高架水槽と給排水管の破損で水浸しになっていて、仕方なく待合室で治療を始めた。ラジオはまだ大したことではないように伝えていた。その後はラジオもなにも耳に入らずひたすら仕事に専念した。懐中電灯の光が黄色くなる頃に漸く電灯が灯って、患者も私も少し安堵した。

滅菌縫合糸は在庫があって助かったけれども、消毒済縫合セットは日頃から2組しか準備してなく、乏しい精製水と石油ストーブで器具を消毒しながら飛び回っていた。

患者が途切れたのは午後4時少し前で、居合わせた看護婦3人と家内を入れた家族3人、それに私を加えて7人で手当てをし、切創、打撲、手足の骨折、骨盤骨折、肩関節脱臼、火傷など51人

の記録が手元に残っているが総数は未だにわからない。X線写真撮影はできても現像は出来ず、写真を撮っておいて更に透視で診断する始末、その他の検査は検尿位で倒壊した家の下敷きになった数人に血尿の有無を調べただけであった。頭の怪我は意外に仏壇による者が多く、毎日拝んでいたのにと悔やむ老人をみて、地獄極楽この世にあるを西へ西へと行くぞ可笑しきと言う何かの文句を脈絡もなく思い出した。

4時過ぎには水に濡れ土足に踏みにじられたカルテを6人が乾かし、私は椅子にかけて医療事故の種は無かったかとぼんやり考えていた。空腹を訴える者も無く誰も声を出すものは居なかった。

夜になってやっと人心地がつき、皆テレビの前に集まったが、時々襲ってくる余震に凍りついているのが分かった。

私は彼女等が死なないように念じた。

こうして最初の1日は終わり、翌18日から水と薬品、包帯材料などの不足に悩まされた。トヨタの看板方式を採用した報いである。診療は午前中にして、昼から家族は待合室のトイレの掃除や片付けに精を出し、私は区の医師会に行ってみた。運良く田淵会長と名生会計理事に会え、散乱している書類や事務用品やガラス片をかき分けてFAXに辿り着くと何とか見えそうに思われた。前夜、会長と連絡がとれぬままに作成した見舞文とアンケートを3人でああでもないこうでもない苦労して全会員宛発信した。

3日目の19日、相変わらずの物不足に苦しみながら午前中の診療を終えて、午後から区医師会に出た。西田事務員も自宅から4時間をかけて出務してし、た。アンケートの回答は24件であった。これを基に伝聞等を加え診療可能な医療機関を抽出した。

昼間、三菱病院の千葉院長から電話があつて、不足している薬品等をたずねられ、補充して頂いた。問屋の配達が出来なかった時期だけに誠に有り難いことであった。

自宅では夜になって見舞いの電話が相次いだ。私は繰り返しの返事で少々疲れたが、家内は知人や肉親の声をきいて久しぶりに大きな声を張り上げていた。「怖かった、それでも元気だよ、うんうんソー、何処にも行かへんわ、あの人は死んでも動かへんから」等と言っている。動かんのでは無くて、逃げて行く所が無かつただけなのだが、済まないと思った。

4日目の20日、自宅のことは少し置き、区医師会の活動について触れると、この日、緊急理事会が開かれた。止むを得ないとは言え、出席者は会長以下監事を含めて12名であった。すでに詳細は兵庫区医師会より「兵庫県南部地震発生後10日間の記録」として神戸市医師会に報告をしているが、協議事項は

## I. 医師会としての系統的対応

### II. 被災会員への対応

- i. 被災状況の調査
- ii. お見舞い金等について
- iii. 行政等への書類関係
- iv. 融資
- v. 税金
- vi. 各種支払いの繰延べ

であった。

21日午後、市医皆木会長より避難所・兵庫中学の救護所に出務要請があつた。状況の変化に合わせて、兵庫中学校を水木小学校に変更するよう保健所の了解を求め、皆木会長に報告。

22日、区医師会役員が水木小学校の救護所に午前3名、午後2名出務した。姫路市医師会の藤森



会長、当方の皆木会長と相談して、23日以降は姫路市医師会に応援を依頼した。以降の経過は市医師会に報告の通りである。

23日から26日まで、情報の収集と救護所の連絡に追われた。

27日に市医師会館談話ロビーで臨時理事会が開かれた。

報告事項は、

会員の現況について

救護所－水木小学校について

協議事項は、

## 一、震災に対する当面の善後策

### 1.被災状況の調査

i.会員負傷の有無

ii.医療機関の損壊の程度

iii.診療開始の時期

iv.連絡先

2.社保、国保その他の請求、支払い関係

3.医協、薬品問屋その他の支払い関係

4.税金関係調査

5.医療機関の損壊に関する届出関係

6.区医より被災会員への見舞い

7.調査結果の広報

8.その他

## 二、長期的展望に立つ善後策

1.状況の落ち着きを待って行う災害実情調査

2.救急・救護組織の検討

3.情報の収集および伝達に関するソフト面の検討

であった。各項目毎に担当部門が検討実施することとし、該当担当者が居ない問題については庶務で行うことにした。

その後も理事会は2月3日、10日、17日、24日と毎週開かれ、23日には地区委員会をもった。被災状況も救護所問題も毎回報告検討された。

2月10日には兵庫臨時保健医療相談センターも湊川公園に開設されて、兵庫区医師会員が出務している。

自宅での27日以降の10日間は状況も殆ど変わらず、耐乏生活が続いた。私は以前から釣りが好きで、数日間海に行くと顔も洗わず、歯も磨かず、髭も剃らずの傍若無人な生活に慣れているので、この度もビールで歯を磨き、途中で歯磨きを止めてビールを楽しむ程度のことは何でも無かった。しかし、コップ一杯の水で顔を洗っていた女性軍は誠に気の毒であった。食べ物にしてもそうだが、私の釣りのワゴンには数人が2～3日生活できる位の携行食と携帯コンロ、鍋釜一式がいつも積んであって、食べもしないのにと家内におこられていた。それが今度は皆、大いに喜んでくれたけれども、私はその時物悲しい想いとらわれた。

2月の半ば地震から一月も過ぎて、医師会も世間も殆ど以前のように動きはじめた。地震の直後、呆れるほどに優しくて思いやり深くなっていた人々も又以前に戻った。残ったのは人それぞれの傷痕だけである。職を失った人も数知れず、神戸を捨てて脱出した人も多い。春はまだ遠

い。

医療機関も患者は半減して、旧市内の医療地図もいずれ大きく変わるものと思われる。

筆の走る儘に駄文を草したが、情報の収集と伝達、時流に乗るようで使いたくない言葉だけでも危機管理機構、これらは医師会にとっても改めて検討に値する命題と感じている。

(本多医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 未曾有の・・・

中央区 西田 芳 矢



今、ゆったりと原稿用紙に思いを綴る気持ちには到底なれぬ。しかし「思い」を「想い」に風化させるまでに、粗削りの感情をそのまま無骨に書き留めておくのも大事かと、市医広報御依頼に勇を鼓してペンをとる。

でも震災当初のことは…やはり思い出したくない。気がつくと、頭からの出血におびえる家内を叱咤しつつ、家具で骨折した母を引きずりおろす最中…窓を焦がす火焰の近さに自分も又充分におびえ切っていた。やっとの思いで玄関にたどりつき開けると同時に「応急処置だけでも」と怪我人が飛び込んでくる。

労災病院の御好意で母はギプス固定後入院、縫合を終えた家内を助手席に乗せて、さてそれから…殊更早く感じる日暮れ、隣家がもたれかかり周辺は真暗闇、無人街と化した自宅に留まる気に到底なれず、少しでも灯りがみえる場所を求めて車を走らせているうち、生田川沿いの小学校へ。周辺を照らす三基の水銀灯が実に印象的。校庭に停車、うつらうつらしているうちにスピーカーから医療関係者呼び出しのアナウンス、職員室に名乗り出て、それからが戦場…被災者同志、Dr一人、看護婦二人、医療事務一人が急場の医療チーム。薬も衛生材料もなく、取りあえず自院に戻り散乱著しい器具の中をペンライトを頼りに最低限の資材をかき集める(自宅に泥棒に入る如し)。

とにかく高齢者が多い。血圧は220以上、加えてインフルエンザから肺炎に移行、喘息顕著、点滴も吸引器も持って来なくては!でもここは病院じゃない。病院も被害多く、何とか機能しているところは満杯状態とか。構わず片端からTEL、そしてほとんど断られる。足手まといになるお年寄りを、病院ならばと置き去りにするケースがあとを断たず、「病院は避難所じゃない」…病院側の混乱を知ったのは後の事。緊急性をカバーしつつ、より高度の医療ニーズの対応のために…病院のジレンマも今になれば解る。しかしその時、何が良く何が悪かったのか、それは解らぬ。とにかく未曾有の災害だったのだから。

震災以来ご自分も半壊の自宅に家族を残したまま陣頭指揮の教頭は、過労に住民の苦情が被いかぶさり出血性腸炎であえなくダウン。後日病院のベッドで彼はポツンと言う。「自分達の仕事は在校生の安全確認、確保ではなかったのか…?」最高時25万人を超した避難所は一体誰が管轄すべきだったのか。これも解らぬ。

各区医師会は小回りを効かして収容数の少ない場所にも目を向け、又収容数の多い場所に組織的にはりついていた医療ボランティアから地域医療の担い手として、円滑な引き継ぎを模索しつつあると聴く。しかし東西南北それぞれ事情も異なる。仮設住宅環境の問題も将来浮上するにち

がない。

震災五週目のある晩、巡回中に民生委員に「一人在室のおばあさんを診てほしい」と頼まれついていく。半壊の文化住宅の一室、裸電球の下、ひっくり返ったままの小さい仏壇、87才で身寄りも皆無、生来の高血圧と骨の脆さ、それでも何とか自分の事は出来ていたのがグラリと来て腰が砕けてそのまま…食餌だけはこれも独居の隣室のおばあさんが朝、夕二回避難所から持ち帰り、食いつなぎ、排泄は…。今更避難所にかつぎ込まれて皆の荷物にはなりたくない…。でも、もし余震が来ればここはたちまち…。「先生!私もうそれで良いんです」暗闇にハリのある声がリンと響く。何とか半強制でも入院先をと依頼し、むなしく帰ってくる。「姫路から老人病院が車を寄越してさっさと運び去りよった」二日後に隣のお年寄りから聞かされた。その隣人も無人となったアパートから立ち退きを余儀なくされ、話し相手を失い、不本意乍ら入った避難所も二月末で閉鎖とか…。

一体自分は何をやって来たのか、否何をやるべきではなかったのか。日々刻々と変わる情勢に思考力は衰え、頭は混乱するばかり。それも仕方あるまい。とにかく未曾有の災害だったのだから…。

(2月28日記)

<追記>

### ・・・そして「瓦礫の街へ」

思いがけず避難所になったその「憩いの家」はホテル街の裏、瓦礫の中でなぜか無傷で残っていた。お年寄りが多く40人程の小じんまりした世帯、行政の眼も届きにくくろうと地区医師会が巡回のスケジュールに組み込んだ一か所である。

場所柄、客扱いの上手な女性も混じり、玄関先に壊れた自店から持ち出したコーヒーマーカーを置き、来客に振る舞う仕種も如才無い。リーダー格のS氏、老人手帳を持つ年齢で、震災直後道路を塞いだ自宅を市の助成も待たずさっさと取っぱらいここにやり住んだと聞く。原宿もどきの華やいだ昼の顔、甘美、頹廢のイメージ漂う夜のホテル街、その陰でいかに多くのお年寄りがひっそり生きていたことか。「憩いの家」は逃げのびた彼等の束の間の安息場となった。プライバシーが無いと嘆く反面、独りぐらしの被災前に較べ穏やかな表情を読み取ったのは自分一人だったろうか。

一際高齢88才の彼女はTVをつけっ放しの一階居間で、朝は布団をたたみ、皆がそれぞれの用事で出掛けるのをニコニコと見送るだけで自分は出かけるアテも体力もない。身の整理後はただ黙念と座するだけの連日、高血圧でかかりつけの医者も居るが今は巡回医療団の薬で急場をしのいでいる。一人娘も自分の店の復旧でそうそう顔も出せず、つい回りの人が世話をすることになる。彼女を中心にした連帯感が皆の心のよりどころともなったのだろう。優先で仮設住宅に当たってはいるが、ここを離れる気配はない。夕刻、皆が帰ってきて夕食の弁当を開いても彼女は正座のまま彼の来るのを待っている。連夜訪れはするが話し相手と血圧測定位しか能のない町医者である。「おばあちゃん、大好きな先生が来たよ」皆が冷やかす。彼女は顔をほころばせ、だまって細い腕をさし出す。今夜の血圧値を聞き安心して夕食を済ませ、又寝苦しい夜をむかえる。「夜中おしっこが近いから皆に悪くって…」声を秘めてこう打ち明ける。

コンクリートの塊の下をこわごわ抜けると広い坂道へと急に視界が広がる。ミモザ並木、ガス灯の立ち並ぶ坂の途中に近々廃校予定の小学校がある。山側の校舎は倒壊、一時は千人を越す人であふれ、陣取りは熾烈であった。過疎化で児童が減ったとは言え、授業再開のメドが立たず学

校側は狭い校庭にプレハブ教室を造った。卒業生を送り出し、ほこりでくすんだ桜の下を新一年生が入学してきた。校長はボランティアを通して講堂の明け渡しを要求し、フロアーに居た大半は納得し居を移したが、ステージの一团はかたくなだった。「先生一度血圧測って頂戴!」と中年女性。学校やボランティアに責められ、明日のメドも立たずイライラするばかり、と言う。かかりつけはあるけどこれでは診察を受けに出かける気もおこらぬと。“こんな時こそちゃんと診てもらわないと!”こんなやりとりが続いてある夜、「今日、薬もらって来たよ」「そりゃ良かった。先生どう言ってた?」「いつまで避難所でがんばるつもりや! さっさと自活の道を考えんかい」…おこられたという。長年培ってきた医者、患者を超えた付き合い故に平然と言える一言。数日してステージ組も自発的に居を移し講堂は児童達に戻った。更に数日後、壊れた市場の前で「こんにちわ」と声を掛けられた。大きいマスクで一瞬わからなかったが、その彼女、垂れ下がったコンクリート塊を気かけながら、自分の領分であった場所で、わずかばかりの果物、青物をあきなうその仕種に暗いイメージはもう無かった。

桜がおわり、瓦礫の街に今年も白蓮が見事に花をつけた。殺伐とした光景の中そこだけ残ったビルの一階、店先の花ミズキが淡桃色咲いた喫茶室で常連の老人は今年始めてダッチ仕込みのアイスコーヒーを注文した。連休明けの汗ばむ午後、スポーツ紙に眼をおとしながら「又この店でアイスコーヒーが飲めるとは思わなかった」。マスターもポツリ「私も又こうやって店をやれるとは思わなかった」…誰も笑わない。それぞれの想い、そしてそれぞれの立ち上り。時は初夏、確実に巡り来る季節の移ろいに引きずられて、この街もようやく動き始めた。

(5月20日記)  
(西田医院)

## 雑 感

東灘区 松原嘉雄



折り重なって倒れた機器や家具、飛び散ったガラスの破片を眺めやりながら、診察室の入り口にただ茫然と突っ立っていた私を、我に帰らせたのは「たった今、生き埋めが救出された、路上に寝かせているのですぐ来てほしい」との男の声だった。足場を確保しつつ機器の上を乗り越えて、往診鞆の置き場所にたどり着き、瓦礫をかき分けて輸液セットをさがしだし、ラクテックGを一瓶持って男の後について走る。子供の頃から度々診た患家の姉妹の姉の方だ。しかし既に心停止。懸命に心マッサージと人工呼吸を施したが蘇生せず。「まだ妹の方が埋まっている」と怒号が聞こえ感傷に浸っている暇はない。取って返すと玄関には頭を血だらけのタオルでおさえた婦人がいる。とにかく「一時も早く診療可能な状態に復旧せねばならぬ」と、その時ようやく自分のおかれた立場を認識し得た。

従業員達の安否も気掛かりだが、確認のしようがない。一人で動かせる物は何とか起こし、重い物は中身を一旦出して移動させる。患者さんに怪我をさせてはと、ガラスの破片は出来るだけ丁寧にかき集める。幸い夜中に電気が復旧したので18日の朝までには、受付と診察機のまわりに診療できる程度のスペースが確保できた。

段ボールに「診療中・お薬出せませす」とマジックで書き表に貼りだすと、定期の投薬日にあっている患者さん達にまじって、かかりつけの医院が全壊したので、喘息の薬がほしいという人や、六甲アイランド病院へのアクセスがなくなったので自己注射しているインシュリンがもらえないかという人達が18人受診された。きっとこのようなニーズが多いと考え、その週は日曜日も診療した。

この頃から、TVやラジオで被害状況のほかに医療体制の現状が報道され始めた。しかし主たる病院の診療状況とボランティアで駆けつけたドクター達の様子ばかりで、開業医についての情報は皆無だ。「先生の所が開いてよかった」「18日からやっておられたのを知らなかったので、薬が無くなって不安だったが我慢していた」等の声を聞くたび、避難所におられる患者さん達に私が診療していることを知らせてあげたいと切実に思う。ボランティアの医師達が来て、避難所の仮の診療所を設置し、24時間体制を組んでいてくれても、定期の薬はかかりつけ医からもらいたいというのが患者さん達の希望だと思う。何処の診療所が診療可能なのか、自分のかかりつけの医院は？ 診療時間は？ 休診日は？ この面での迅速な報道が今回は全く欠如してはいづいぶんはがゆい思いをした。

災害時の医師会の役割やマスコミとの連携という面で、今後課題を残したのではなかろうか。

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化 : 神戸大学附属図書館)

## 未曾有の震災を体験して

北 区 辺 見 譲 治

1月17日早朝の、突発性地震に見舞われて当院産婦人科病棟では丁度14名の産褥婦のもとに新生児たちが授乳の為に配置されており、母子共にしっかりと胸元に抱擁しておって不幸中の幸いで大騒ぎとはならずすみしました。

病院本館は建物の揺れが少なく患者さんは一時本館に避難しましたが、停電、断水、暖房停止のため室温低下を考えて早急に病床に帰っていただきました。

病院は本館と第二次増築棟との間に僅かな亀裂が入り、特に第三次増築棟では30センチメートル以上に大きな亀裂と柱、天井の破損が生じてしまいました。エレベーターも一基が停止しました。又本館屋上の貯水槽の亀裂と配管の破損があり、直ちに水の確保の為に仮設の配管が手配されました。幸いに午前中には電気が通り、それでは今のうちにと、前期破水で入院していた妊婦さんの帝王切開分娩を午後に行いました。



### 栄養科厨房キレツが走る

(平成7年1月17日撮影 神戸アドベンチスト病院)

病室の患者さん方には電気毛布と電熱器を至急に購入して配置をし、退院可能の患者さんには退院していただきました。

栄養科の建物の損壊がひどく、食事は一日2食としていただき、排水可能となるまでの数日間は排便は新聞紙に行って焼却処分としました。

急患は災害による大きな傷害の方は少なく、小手術の傷害程度の方々が多く、数日後には気管支炎、肺炎の方々が多くなっておりました。

17日より10日間で21名の出産があり、その内4名の方は神戸市内の被災者の方々でした。中には臨月で気管支炎を発生しての分娩の方もおられました。

1月22日には雨が降るとのことで屋根にシートをかけたりしましたが、かなりの場所で激しい雨漏りがあり、ボランティアの方々が雨の中で活躍して下さいました。



震災後10日目にして、給水は仮設タンクで、排水は一部を除いて使用可能となり、ガスは液化ガスを設置し、また栄養科にはプロパンガスを使用して暖房、シャワー、給食も可能となり、震災後閉鎖していたホスピス病棟と健康管理病棟とをオープンすることができました。

一時期薬品の不足が伝えられましたが、姫路の病院を介して問屋さんより薬品が搬入され、又医療器具（ディスポ製品）の不足については東京の姉妹病院より搬入され、早期の給水に対しては広島姉妹機関よりトラック輸送をして下さり、又食品については三育フーズ（姉妹機関）より大型トラックでレトルト食品が搬入されて診療が継続されました。

東京の姉妹病院よりは数名の医師、看護婦等のボランティア支援があり、地域の被災者への巡回診療も行われました。遠くは米国より、又広島より医師の救援申し出がありましたが、辞退をして診療を継続できました

日本病院会会長よりの御激励と援助金を副会長が直々に御訪問下さって恐縮いたしました。又教団より、姉妹機関よりの多額の援助金を頂戴して今後の病院復興計画を検討中であり、現在は建物の破損個所の応急修理に3,000万円を見積もっての工事を行って、震災の大きな爪痕を患者さんの眼に入らないようにと配慮しております。

未曾有の震災を体験して、病院職員の手早い対応と姉妹機関、関係機関よりの心のこもった御支援によって、将来に向かって明るくスタートできることは私にとって大きな感謝です。

50年前の戦災を体験している私にとっては悪夢が再来した感じですが、今回は大きな確信をもって出発できると感じております。

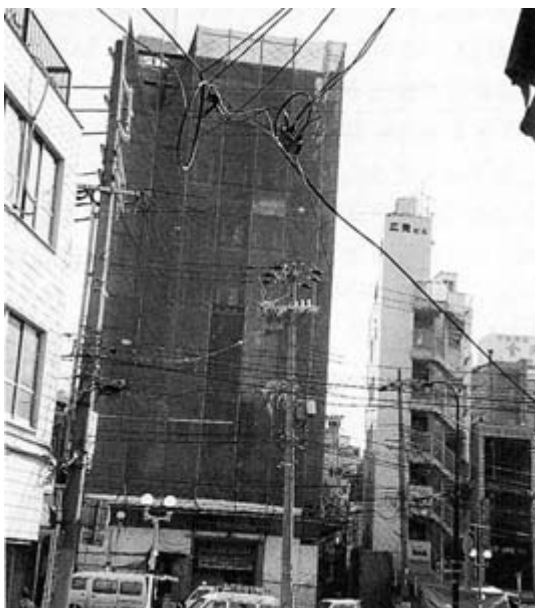
神戸の復興と地域医療の一層の充実を今後期待しております。

(神戸アドベンチスト病院)

## 透析不能の1週間

中央区 申 曾 洸

地震の朝私は、やや遅れて襲ってきた激烈な揺れに家中が大騒ぎし、真っ暗な中やっと探し当てたトランジスターラジオを聞き、夜明けには国道方面からの何本もの火事の煙も見てはいたが、それでもこれほどの災厄であったとはまだとても想像していなかった。早出勤務の透析技師からクリニックが無茶苦茶ですと電話があり、車で加納町あたりからのビルや木造家屋の倒壊に驚きつつ到着したクリニックは、壁面のコンクリートがX形に割れて鉄筋が見え、中では院内のあらゆる機器備品が倒れ、全館水浸しで、ほとんど手がつけられない惨状であった。



**テナント入居中の当元町鯉川阪神ビルは、東西の壁がX型に割れて、窓のサッシと壁を更新しております。(平成7年1月下旬撮影。平成7年7月現在、今も工事中です。)**

言うまでもなく、腎機能の廃絶した透析患者にとって、透析できないことは死を意味している。倒壊した機器を何としても復旧させるよう指示し、とにかく緊急透析を依頼できる病院を捜すべく、外で並んで公衆電話をかけてみたら、西宮、尼崎、大阪の透析施設も断水や配管の被害などで引き受け不可能と言われ、集まってきた透析患者さんたちには今日の透析はとても無理ですと、連絡先の電話番号だけ聞いてカリメート(高カリウム血症治療剤、透析不足の時に最も怖いのは高カリウム血症による突然死なので)を持って帰ってもらった。そしてやっと確保できたのは京都の病院で(私はこの時まで電車が動かないことを知らなかった)、その後、大阪江坂の井上病院に緊急透析を依頼できたが、あの渋滞の中、井上病院を目指した患者さんたちは大変だったそうである。

当院がこのように処置なしの時、近くにある原病院の復旧はお見事であった。透析室が地下で機器などの被害が比較的軽く、電気、電話も使えたとはいえ、自前で配管を修復、タンクローリー(水)も確保して震災の翌朝に早くも透析を再開し、周囲の施設の透析患者の緊急透析を何交代もフル回転で実施し、原院長以下病院あげての獅子奮迅の御活躍であった。そして病院スタッフもこんな不眠不休の激務はとても続けられないということもあって、元町の患者の透析は、原病

院の透析室と機械をお借りする形で私たちにやらせていただき、私たちも大変ありがたかった。

私は午前中はまず元町でスタッフ、患者の連絡と復旧などをし、午後からは原病院、朝晩は送迎運転手ともなり、暖房もないのでジャンパーとコップ酒の、顔も洗わない原始生活をしていたのであったが、当院も懸命に一步步復旧し、数日後に電気も来て、地震から7日目の23日(月曜日)に透析を再開できたのであった。

この間、市内全域が停電、断水、電話不通、交通渋滞の大混乱の中、連絡がなかなか取れずに困ったが、ほぼ1週間後に当院のスタッフと患者全員の消息が確認でき、3名の中4日透析を余儀なくされた透析患者があったものの、全員が無事で、本当に幸いであった。ありがたかったのは、当院と連絡が取れなかった患者さんたちも、患者さん同士で連絡しあったり、家族、身内、あるいは友人などのついで、どこかで何とか透析してくれていたことである。そして何よりも嬉しかったのは、市内、県内、大阪京都だけでなく、遠く沖縄や茨城県に行っておられた方々がまた当院に戻ってこられた時に、本当に我が家に帰ったように喜んでいただいたことである。

このような事態を全く想像だにしなかった不明を恥じながら、こうして未曾有の災厄を無事克服できたことを喜びつつ、今回思い知ったことを以下に記録したい。

1. 電話と電話番号簿:停電で不通になるような電話は許されない。停電対応の電話機と数本の回線を確保したい。携帯電話も回線が塞がって当初はあまり役立たなかった。院内の公衆電話が壊れていなくて有用であったので、緊急用電話番号として記録しておきたい。またいつも最新の、職員と透析患者の電話番号簿を、皆が持っているようにしておきたい。
2. 電気:電気がないとどうしようもない。停電は極力短時間に復旧されることが、そして停電の間も最低の機能を保つための自家発電なり発電車なりの対策が必要である。
3. 水:水がないと透析できないので、水とその輸送手段(タンクローリー)を確保すること。
4. 情報:透析患者をどこの施設に依頼すればよいか、の情報が必須である。今回私は、震源地を淡路島と聞いて、緊急透析を東の透析施設に依頼したが、実際は明石以西の被害が軽微で、西や北の施設にもっと連絡できていたらと悔やまれた。電話が通じにくい条件でも透析の可、不可の情報を得られるよい方法があればと思う。同時に全般的な被災状況や交通事情の把握も必要である。
5. 地震に強い建物と機器:今回、幸いにも建物は倒れず引き続き診療できているものの、壁面の損傷はかなりひどく、今後修復に相当の時間と費用、不便を覚悟しなければならず、また機器の損傷も大きかった。建物は耐震設計の頑丈なものでありたいし、機器はせめて壁面に固定するくらいのはしておきたい。
6. 交通:命があり住むところがあれば、次は社会生活である。透析を再開しても、交通手段がないと通院できないので、特に電車の早期復旧が望まれる。復興した神戸は地震に強い街でありたいし、はやく普通の、元の生活がしてみたいと願う毎日である。

最後に、この度の震災に際して原病院をはじめ、多くの方々の御助力をいただいたことを御報告し、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。皆様のお陰でこの災厄を大過なく過ごすことができ、復旧もできました。皆様の御心配、御配慮に、心より感謝致しております。本当にありがとうございました。

<後日追記>

震災時に大変お世話になった、原病院の原信二院長が震災約80日後の4月7日に亡くなられた。震災時にも病状はすでに相当悪かったとのことである。私がまだなかば放心状態の震災当日に当院にまで来られ、集合可能な透析医に招集をかけて水の確保など善後策をリード、翌日から原病院での透析を可能にされた強い意志と行動力からは、私にはとてもそうは見えなかったのであつ

たが。

4月3日に私たちがお見舞いにかがった時も、痩せ衰えたお姿ではあっても、病床から変わらない笑顔でお話し下さった。震災後は誰もが相当へばったのに、あんなに頑張られて先生の病状にさわらないはずがなかったのである。

原先生は兵庫県透析医会の会長も長く勤められ、この大震災に際しては御自身の病状もかえりみず最後の力を振り絞って、最後までこの地域の患者と医療のために尽くされました。ここに先生の御貢献に深く感謝いたしますとともに、先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

(元町HDクリニック)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 震災周辺部雑感

垂水区 鳥山紀彦

高知県須崎市の野見湾に「珍鳥」クロハゲワシが出たとの報に、鳥仲間と連休を利用して車でいった。幸運にも行くなり発見し、600ミリメートルドアップ撮影成功。残った時間を自然保護で有名な、清流四万十川を上流から河口まで温泉に一泊して見物。「うわさ通り」と納得。中村市の開高健おすすめの店で祝杯をあげ、夜半に帰神。疲れもあって、寝込んでいた所へ、あのサディスティックな揺れ。今では「二度とごめん」と思う反面、フト思い出するのは、私にマゾの気があるのでしょうか。

その後は、皆様御存知の光景。ガスの臭いと、消えたままの信号の中を、ともかく診療所を見に行く。壊れていない!!



珍鳥クロハゲワシ（平成7年1月15日撮影）



“珍しくもない” ジャッキ・アップの「クロハゲイエ」（平成7年6月26日撮影）

初めの頃は電話も通じていた。長田と兵庫の従業員から電話がある。－ひどいらしい。とにかく歩いて逃げてこい、と指示。ひと通り電話して、再び自宅に帰る。途中瓦や壁の落ちた家を

見、私の家はましだと思う。少し傾いて入り口が開かないので、窓から出入りする。ジャッキアップの事は知っていたので100万～200方位いるかなと概算。これが実は一桁違っていた事を知り、ガクゼンとするのは、工事屋さんの見積もりを聞く数日後。

今回の地震による建造物の被害の分布は、「面」の分布ではなく「線」の分布の集合であることは、皆様とっくにお気付きだと思います。東のほうはこの「筋」が多く、しかも濃い。しかし、たいした事がなかったような周辺部垂水といえども、この「筋」は何本かあった。この「筋」が、活断層によるものか“六甲オロシ”の影響かは知らない。だいいち「太平洋プレート」については聞いていたが、活断層なんて聞いてはいなかった。

垂水は震源地に最も近い住宅密集地であるが、壊滅的な破壊は免れた。しかし、「枝筋」は何本か走っていた。従って都市形態は比較的保たれていたが、被災者は結構いた。「電気」「水」「ガス」は中心部ほどではないが、それに準じていた。垂水から避難して“行く人”もいたし、又“来る人”もいた。

そんな周辺部で感じたことを、中心部の方々には「何をネムタイ事」と言われそうですが、私見を書いてみます。

レトロスベクティブに見て「こう対処すべきだった」と言うようなことは総じて無し。すべてシャーない状況で、よくパニックも無くいけたと思う。

☆☆垂水区医師会の対応一文句なし。(ヨイショ)

周辺部の役割は、出来るだけ早く通常状態にもどすことだと思います。

避難所でもらったパンもありがたかったが、近くのコンビニが開いていて、好きなものが手に入る方が、もっとありがたかった。お風呂屋さん。ありがとう。そう「もらい風呂」ばかり出来ません。食べ物屋さん。ありがとう。そうラーメン、おでんばかりとはいかんわ。薬の問屋さん。ま、がんばっていただきました。“救援薬”も結構ですが、やっぱり通常ルートが一番助かります。

「筋」の上に中国出身者の多く住む神陵台小、中学校の避難圏がありました。中国語が少しわかるということで、途中から3日に一度、お手伝いをさせてもらいました。そう華々しいエピソードも無かったが、少しは役に立ちましたよね。

☆☆☆神戸市民の対応—自慢出来ます。

極限状態に近いのに、総じてオトナ。オシャレ。日本人だけかと思っただが、中国系の方々も同じ。きっと神戸人の特性でしょう。

☆私—少しやさしくなりました。

この非常時に、夫婦喧嘩一つもなし。街で「腹立ちクラクション」も鳴らさなくなった。

★動物の予知能力—ホンマかいな。

この種の話は多く聞きます。うちの猫が鳴くたびにビクビクします。春のサカリがついとるだけかも知らんに。

★地震予知連様及び初期ニュース様—ホドホドに。

立場上しかたなかったかと思いますが、もっともらしい「マグニチュード6程度の余震……」の恫喝のストレス。どうマドいてくれるつもり。胃に孔のあいた人もいると思うよ。医学もファジーですが、地震学には勝っているような気がします。

NHK「クローズアップ現代」の☆☆☆国谷裕子さんが「余震」で控えめながら、来ないような言い方。元気づけられました。逆に控えめながら、来るような言い方だった諸氏。反省よろしく。あとで「それ見た事か」は無し。ジャンケンのあとだしはキタナイよ。

☆☆☆全国、各国の朋友—ありがとう。

タイムスリップしたような、何十年振りの電話うれしかったです。

生きてゐることがうれしい水をくむ

山頭火

(1995年3月2日時点)

(鳥山クリニック)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 一瞬の悪夢

灘 区 瀬 藤 晃 一



あの忌まわしい大地震から1ヶ月余りがすぎました。ほんの一瞬ともいうべき20秒余の振動で、私の魚崎の実家は無残に全壊し、大好きだった神戸の町は瓦礫の町へ変貌してしまったのは誠に痛恨の極みであります。

あの瞬間、私はまだ浅いまどろみの中にあり、がたがたと来たとき慌てて飛び起きましたが、何が起こったのかわからず暫く茫然としていました。地震と気がついてTVのスイッチを入れたが既に停電、ラジオを取り出したところ、大阪、彦根震度5といったことを放送していたと思います。ふだん停電するとすぐレスピレーターのことを気になるので病院へ電話したが既に不通、いらいらしながら夜が明けるのを待って病院へ向かいました。

我が家は六甲山の山裾にあり、近隣の住宅、道路はまったく異常なく、こんな大被害になるとは思ってもみませんでした。途次いつも通る一方通行の道が一部不通になっており迂回させられたが、これは後に家屋倒壊のためと分かりました。しかし、その時は余気にもせず、約15分で病院へ到着、電気は自動的に非常電源に切り替わっており、患者も全員無事と聞いて一安心しました。ところが、その頃よりガラスその他で負傷した方々が次から次へと来られて廊下に列をなし、外科系の医師達が総出で傷の縫合に追われました。しかし振り返ってみるとこの事態は序の口で、歩ける人達が自分の足で兎も角病院へ来たということで、昼頃になると家の下敷きになったり生き埋めになった人々が、自家用車やワゴンに乗せられて続々と運び込まれて来ました。これは勿論救急車が間に合わなくて自家用車で運ばざるをえなかったものと思われます。病院はまたたく間に野戦病院化し、忽ち病室は一杯になり、後は廊下や椅子、更にはリハビリ室、人間ドック控え室まで人であふれることになりました。停電、断水下ではコンピューターは動かず、X線も撮影不可、検査も出来ないといった事態で、生命の危険のありそうな方々のみ入院、肋骨骨折と思われるような方は一応固定して帰っていただくしかありませんでした。夜になると更に重症患者が増え、ローソクの光の下での縫合、廊下のあちこちで人工呼吸、点滴が行われ、兎も角救命可能と思われる人から処置せざるをえず、子供2人を亡くして茫然としている父親を見て、これは地獄だと思ったのが実感です。

DOAの方々を含めて遺体は増えるばかり、しかも警察から遺体検案が終わるまで遺体を動かさないでくれとの要請があり、検視官が17日夜には来られるということで待っていましたが、全然音沙汰なく、警察でもらちがあかず、2日たった19日夜には遂に遺族の怒りが爆発して、病院長の判断で何とか出来ないのかとつめよられたのには困りました。東京の連合会本部から警察庁、厚生省の方に善処をお願いしていた頃やっとな警察官の立ち合いの下に当院の医師で遺体検案して下さいとの指示があり愁眉を開いた次第です。このあたりはもう少し早く弾力的に運用してほし



かったと思っています。

1月17日～19日の3日間で結局1,000名余りの負傷者を手当し、50名余りが入院、別に30名余りの方々が亡くなりました。医療関係者としてこれで良かったのかという反省と、いや全員精一杯頑張ったんだという満足感が交錯しており、亡くなられた方々には心から御冥福を御祈り致します。



#### **変電盤の部分の地盤沈下「約50センチメートル」**

(平成7年1月18日撮影)

この大震災を通してライフライン（電気、水、ガス、電話）の重要性を痛感しました。幸い、電気、電話は比較的早く復旧、水、薬品、食料、燃料は近隣の連合会病院、特に大阪の大手前病院と舞鶴共済病院より1日数回ピストン輸送をしていただいて何とか急場をしのぎました。2月末には水、ガスも復旧し、病院の業務もほぼ正常に戻ることが出来ました。“窮すれば通ず”という言葉がありますが、震災より数日間即席かまどを作り、薪で御飯をたし、て患者給食を続けましたが、戦争直後のような気分でした。一方、家を失った人も多数いながら、文字通り不眠不休の活躍をしてくれた医師、看護婦達の使命感に燃えた行動も高く評価したいと思っています。



#### **倒れた書類棚（平成7年1月18日撮影）**

病院の建物は比較的被害が少なかったとはいえ、機器の損傷、特に地盤の陥没、よう壁の亀裂、地面、道路のひび割れ等、完全修復にはやはり数億円かかると試算されております。外来患者の動向が今一つ不明の現在、病院運営について思案する今日この頃です。

尚、1人の負傷者を除いて入院患者、職員、家族全員が無事であったのは誠に幸運、奇跡だと思っています。

(六甲病院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 震災あれこれ

西 区 櫛 木 奂



正月の注連飾も取れて、今年初めての成人の日と流れ休日の連休疲れでぐっすり寝込んでいた。その時である。一旦稍体が沈んだかと思うと下からドーンと突き上げ、更に左右に容赦なく振り廻すような揺れが襲ってきた。“さあ遂に来たぞ”

大阪に早朝出勤する息子のため常に早起きの家内の泣くが如き悲鳴と共に飛び起きた。続いて何度も起こる余震に足を掬われそうになるが、寝巻のまま右往左往する。光る空に轟々たる地鳴りの連続、まさに世も終わりかと思う。一瞬しんと鎮まりかえる近くの気配、みんな一体どうしているのかとさえ思うほど不気味な鎮まり方である。電灯は消えて暗闇の中で携帯ラジオを探すがみつからない。仕方なく小型液晶テレビにかじりつく。漸く震源地が北淡町と判るが死者は数名だという。懐中電灯を探すがこれもなかなか見つからない。やっとあるにはあったが、今度は電池が旨く合わないし、すぐつかない。焦りがこみあげる。

地震が昨年より頻々と北海道南東沖から次第に東北沖、関東・静岡県東部などと近づいて来るにつれ、“何か来そうぞ、大きな地震が…”といつも口癖にいていたのが、こうも早く現実のものとなるとは。“枕元に風呂敷包みを置いておけよ”などと冗談まじりに言ったことが本当の事になろうとは。さまざまな思い出が頭を駆け回るが、何一つ纏った行動がとれずに呆然と立ち尽くすばかりだ。そのうち稍余震がおさまり薄着に気づき、風邪を引いてはと再び暫く寝床にもどる。数時間後には電気もつき、テレビの画面をみれば大変なことになってしまっている。阪神高速道路が崩壊して六百米も横倒しになり車が転落している。

三宮ビル街が中潰れになったり、傾いて今にも倒れそうになっていたり、火災があちこちから発生しているのに、呆然と着の身着のまま三々五々入り込む被災者の姿などが映し出される。死者の数、負傷者の数は更に増すばかりで、最早や神戸を中心に地獄の有様である。震源の北淡町はじめ明石・芦屋・西宮・伊丹・宝塚・川西・豊中までもひどい被害である。

やっと我に返り、病院は、患者さん達は、職員はと益々心配になって来る。ただし電話は通じない。行こうと思うが電鉄はとまり、交通は渋滞し、漸く昼頃までに病院に着けたが、その間約2時間、いつもなら半時間とかからない距離だ。

早速病院の被害を見て廻る。病院も大被害である。まず至る所で亀裂や隙間、高架水槽は屋上で壊れて、勿体ない話だがジャジャ洩れで水が噴出している。擁壁・石垣が傾き、電気室は沈下し基礎の床面は落ち込み、変圧器が傾斜してしまっている。

他人事でなく自分が被災したのだという実感がなかなか湧かないのはどういうことかと思う。患者さん達、職員、特に当日の勤務者の姿をみて無事を喜び合うのが精一杯という感じで“良かった、良かった”という気持ちで、他の事は一切考えられないのである。

その後、薬品の品切れが起こらないか、食料品はどうか、職員の輸送手段は、特に夜勤者の確保はできるか…心配の種はつきないが、まず“一つずつ片付けないことにはどうなるものでもない”一種の悟りの境地に突き当たる。

1週間も経たず、今度はパニックで発症した新しい患者さんが次から次へと送られてきてその対応に大童になってしまう。超過病床など何処かに消し飛び、“何とかせねば…”という考えのみに日が暮れてしまうのである。“そう言えばあれも地震の前触れだったかも”

昨年11月頃、常ならある新入患者が全く無く閑古鳥がなく事態があったが、それが全く嘘のよう。“そのうち大忙しになるから見とって…”などといった冗談がまさか震災でほんものになるとは…。

ほとんどが軽躁～躁状態に近い人ばかり、中には数日で鎮静して親類先の他府県に引き取られる患者さんもいた。こういう状況なのでボランティアに協力をと頼まれるが、院内用務繁忙でそれどころではなくてすべてをお断りする羽目になったが、どうかご寛容のほどを。

当院ライフラインでは何よりも水が豊富だった。開院以来、村と共同で掘った簡易水道が物をいったのである。電気の修復も比較的早かったし、ガスはプロパンガスだったから何よりであった。

それに入院中の患者さん達がみな落ち着いていてくれた。春がやや早く1月初めに少しくハイになっていた人達が、地震のあと落ち着いてくれていたのは有難かった。僅かに職員達が持ち込んだ流感が小流行したぐらいですんだ。

何だか胸騒ぎを覚えながらあれほどテレビの犠牲者名を見て暮らしていたのになどと悔やまれるが、1月下旬たしか28日だったろうか、JR六甲道駅近くで従兄が圧死したというのである。きけば即死だったため3日間家の下敷きのまま放置され漸く掘り出されたとか。まことお気の毒で、もはや言葉を失う。やっと火葬が済み、2月18日に本葬と聞く。どうしても参列してあげねばと思う。

その頃だったか、わが恩師第二内科学名誉教授の竹田正次先生、先輩生駒純一郎先生の遭難の訃報を、他に現役学生2人の死も。残念至極、痛惜の情去りやらず、ご冥福をお祈りし合掌。

ところで今回震災による死者は5430名に達し空前の大惨事となったが、もう1時間～1時間半ずれて発生していたらどんな結果が待っていただろうか。思えばぞっとするばかり、犠牲者は十数万人以上だったろう。

とくに初動態勢、なかでも自衛隊のそれが大問題となった。地方自治体の命令権やライフライン確保での対応が遅れたことなど、危機管理のあり方が今後の最大の要望事と言えよう。ボランティアが活躍し話題を提供したが、窓口業務の一本化や責任のあり方などが問われよう。ともあれ今回震災で私達は多くの事を学んだ。今後それらを如何に生かすかが課題といえる。

古今未曾有の大震災だったが、すでにあちこちで復興への槌音が響く。その槌音は犠牲者への鎮魂の調べであり、私達残された者の胸の鼓動であり、息吹そのものであると感ずる。

新生神戸の、いや阪神・淡路の素晴らしい未来像の実現を信じながら。

(雄岡病院)

## 恐ろしかった阪神大震災

兵庫区 とき田 吉 房



1月17日午前5時46分、この時間はあとから聞いたのですが、私はまだ夢うつつで、就眠中、突然ドーンと下から突き上げられ、それから左右にひどく揺すられた。地震だあっという判断は浮かばず、ただ大変な事が起きたと感じた。三面鏡が体にのしかかり、這いだすようにして、隣室の妻をオーイオーと呼び続けた。声がしないので気になり、真っ暗な中を手さぐりで妻を探したが、筆筒が倒れているようで、その下でかすかに声がした。一万の筆筒を何とか押し上げて妻を引き出そうとしたが、妻は数十年来おさまっていた喘息の発作が出て、ひいひい言って、それでも体を引っ張り上げて、ようやく脱出させることが出来た。それまで何度か揺り返しがあったようですが、全く夢のようで、茫然としていました。今から思い返すと、よう生き残ったものと感謝に耐えません。

夜が明けるまで何をしていたのか、思い出せません。電気は付かず、勿論電話も不通です。電気は幸い一日で付きましたが、それからの40日間は水道、ガスのない生活が始まりました。テレビは見られましたが、災害地での火災の様子は全くひどいものでした。地震の時、近くに火事が起こり、家が倒れて下敷きになった人が助けを呼んでもどうする事も出来ず、7人の人が亡くなりました。そんな事が兵庫区、長田区でも沢山あったとの事で、もっと救援作業が早かったら被害が最小限度に抑えられたのにと悔やまれます。

ところで、平成7年2月4日から乙亥五黄土星に入ります。この年は昔から地震や戦争が多い年といわれております。株式も下がるでしょう。銀行も倒産するかもしれません。

私は去年の暮のある日、従業員の一人に「来年は大地震が起こるぞ」と言いましたところ、彼女は私にこう言いました。「先生、もし神戸に大地震が起こったらどうしてくれますか?」と。私は神戸には地震は昔から起こらないと何となく思っていたので、ちょっと返答に困りました。そして、とうとう罰があたったのです。しかし、暦の上では阪神大震災は18日早かったこととなります。これからまだ大地震が起こるかも知れません。人間は誠に勝手なものです、神戸にだけは二度と大地震が起こらぬよう、神仏に祈りたい気持ちです。

さて、この度の阪神大震災で5,400余名の方々が亡くなりました。私の灘中時代にオニイチャンの愛称で人気のあった体操の内田光男先生が亡くなられ、又中学同窓の生駒純一即先生、大阪高医同級生の佐野定敏先生、同窓第1回生で元西本願寺管長の西福寺住職豊原大潤先生、18回の杉山輝夫先生、20回の小西幸雄先生ご夫妻、21回の永田昭一郎先生、その他にも開業医の先生方が亡くなられました。また私の患者さんで麻雀教室を運営していた末松氏は耳と鼻から血を流していた等、他の先生方と同様殆ど圧死のもようでした。何と恐ろしいことでしょうか。茲にこの度の震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、心からお悔やみ申し上げる次第です。

おわりに、地震の前に色々な現象が起きた事があちこちで報告されておりますが、専門家の方々がこれらの現象も参考にされ、地震の予知や活断層の調査、分析をされ、今後1000年間は神戸には大地震は起こらないというような太鼓判でも押してもらえたらよいのになあと願っております。

(とき田医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 私の震災からの10日間

東灘区 開田 宏一



先日、市医師会広報部より阪神大震災に関しての諾々を記録しておきたい由、筆を執るよう依頼があった。四季の移り変わりの中で、日頃身近に感じたことを思いつくままに書けという依頼ならば喜んで引き受けるところであるが、自然がことのほか好きだった私が、一瞬の自然の気まぐれか、人類の自然破壊に対する反発かとも思える今回の現象により多くの親しかった人々や隣人や可愛いさかりの学童や患者さんを亡くしたことにに関して書くのは、いささかつらい作業となります。

昨年暮よりインフルエンザがはやりはじめ、特に成人の日前後の連休は猖獗を極めていた。私はこの連休中も多くの急患を診察し、16日夜は市の夜間急病診療所にも出務した。ここも多忙であった。いささか疲れて帰宅後、風呂に入りビールを飲み、寝込んだ直後に生じたのが今回の震災である。自宅は頑固な棟梁が年月をかけて作った家であり、今までの地震でもピクリともしななかったが、今度ばかりは柱の折れる音、雨戸の飛び散る音、最後には壁土の臭いや土ぼこりがし始めるに至り、慌てて家内を起こし、離れの次女の部屋へ走った。娘の部屋の戸は辛うじて開き、娘が無事に飛び出してきた。その後大きな余震がなかったようなので、懐中電灯をたよりにそれぞれ充分に着込み、貴重品を持ち、全てのコンセントを抜き、ガス栓をチェックした後外に出た。南北の土塀は崩れ落ち愛犬のボー君は既に見当たらなかった。探しているうちに近所に住む長女夫婦が徒歩でやって来た。私は自転車に飛び乗り、近くに住む姉の家に向かった。全壊であるが、既に助けだされた後とのことで安心し、次に梶川の叔母の家に向かった。会長宅もかなりひどい状態であったが、全員の無事を確認し、重症患者の搬送先の確保などを依頼した。

しばらくすると壊れた入口から近所の婦人が入ってきて、避難民が魚崎小学校に集結しつつあり、その中に大勢の怪我人がいるので湿布や包帯、消毒薬、痛み止めの座薬等を提供してほしいとの申し出があった。外来診察室に入ると、くすり、カルテが散乱し足の踏み場もない有り様だったが、なんとかそれらのくすりを集めて手渡した。

既に近所で火災が発生していた。丁度近所の土建屋の親方が、何か手伝うことはないかと飛び込んできたので、仏間の戸が開かず位牌が出せないというとパールでこじ開けて出してくれたので急いで袋に詰めた。

今度は便が出ずに出血ばかりして苦しんでいる婦人が入ってきた。やっとのことでいちじく淀腸を探し出して手渡した。しばらくするとにこにこした顔で避難していった。

カルテは暗がりの中で何とかかき集め、旅行用のキャディバッグのケースに詰め込んだ。これは重かった。私は急いで娘のスキー用リュックサックに点滴及びそのセット、ステロイド剤、血糖降下剤、消炎鎮痛剤及びその座薬、胃潰瘍のくすり、睡眠剤、降圧剤、湿布、抗生物質、ソセ

ゴンの注射など、思いつくままに入れ、ビールのケース、毛布、食料品と共に2台の車に詰め込み、魚崎小学校のグラウンドに行かせた。門を出るとお寺をはじめ古い瓦葺きの家は全壊していた。呆然としているとあちこちから腕をつかまれ引っ張られた。検死の依頼と家屋の下敷きになっている家族の救助の依頼である。救助の方は私の力ではどうにもならない。検死をやりながら怪我人は小学校に運ぶように指示し、小学校へ急いだ。道中はわずかな家財道具を持った大勢の避難民でごったがえしている。私はこれはとても現実とは思えず、恐らく夢ではないか、もう一度一眠りすると元の静けさに戻っているのではないかと何度も思ったし、思いたかった。



**崩壊した当院北側の堀**（平成7年1月30日撮影）

魚崎小学校でも大勢の検死をし、救急処置をしてまわり、ひとまず保健室に救護所を設置した。打撲が多かったが骨折、縫合の必要な外傷者も多く、タンスで腹部を打撲し内臓がかなりやられていると思われる人も大勢いたが、痛み止め、点滴などの処置をひとまずして回った。この間自宅近くの火事も気になり、再三様子を見に帰宅した。火事はどんどん西へ広がっていたが、僅かの水を地元の消防車1台が放水しているだけで、心細いことはなはだしい。この消防車も甲南地区の大火の応援に行ってしまった。その後は地元の人が10人位集まり、徹夜で風呂の残り水、井戸水(これはすぐに枯れた)、近くの溝に突然湧き出した清水を集めて台車で運び、懸命に消火に努めた。既に自宅が全壊した人、全焼した人も次の類焼を防ごうと頑張った。私もツルハシを持ち、スコップで土をかけて消火に努めた。私はビールしか喉に通らず、オーバーのポケットに常に缶ビールを入れていた。一人消火の上手な人がいた。職業をきくと防水加工の関係の仕事をしているとのことで、一応納得した。皆には日本酒を持ち出してきて気合を入れてもらった。

18日の早朝、小学校の特設電話でいとこの神戸中央市民病院の松阪副院長と話ができた。「そっちはどないや」「ひどいもんですわ。我々のやれることは包帯交換所、頓服診療所程度のものなので、骨折、縫合の必要な人も多いのですぐにでも救急外来の核として東灘診療所を開設してほしい」と言った。

LPガスの漏れによる爆発の恐れがあるとかで、山手幹線より北、十二間道路より東へ避難した。医療品の入ったリュックサックがやけに重かった。この避難が原因で多くの老人が肺炎、心筋梗塞などを来たし死亡された。

この間も再三自宅及び火災のチェックに往復した。夕方になり、もうそろそろよかろうと判断して、灘高の第2グラウンドに2台の車を持ち込みここを拠点とした。ちょうど娘婿の父が部下を連れて大阪から自転車に来てくれ、門の前で書き置きをしているところに私が帰ってきた。全員無事であることを知らせた後、家族の処に案内した。娘婿を残しておいてくれて、家内と長女と次女を連れて徒歩で甲陽園の空いているマンションに連れていってもらった。これで私は身軽になり、それ以後は娘婿を連絡係として車に残ってもらい、火災現場、避難所をまわった。火災は大



分弱まっているが、依然としてあちこちでくすぶっている。特に布団や畳の燃えているところでは火の厚さが30センチメートル位あり、少々の水をかけても消えるものではなかった。

この日、小学校の救護室でボー君の調教師に出会った。引き取りに伊丹から長時間かけて来てくれたとのことであるが、肝心のボー君が見当たらずひとまず帰ってもらった。火災は依然としてくすぶりつづけ、風も強くなりだしたので小学校の近くの道路に駐屯していた自衛隊に直訴に行った。通信隊だった。先頭車の運転手台の隊員に説明すると上官に言ってくれという。旧陸軍の階級章ならおおよそ見当がつくが、自衛隊のそれはわかりにくかった。一番年かきの隊員に話をした。近くのクリーニング屋がつぶれ、その店の中には揮発性の薬品、ボンベなどがあるので、火が回ると危険だと訴えた。直ちに一ヶ小隊位が給水車をもってかけつけてくれた。これで9割位の火災は治まった。

19日朝、自宅の門の前で愛犬のボー君と再会した。うれしかった。純白の大型犬が真っ黒になっている。相当怖い目にあったようだ。思い切りしばらく抱いてやり、水とエサを与えたが落ち着きがなく相当興奮しており、私は2度右手を思い切り咬まれた。痛いのと情けないのと不自由なものには閉口した。自分で破傷風のワクチンを注射した。

この朝、東灘診療所が本格的に開設された。歯科も併設されていた。心強かった。私も早速犬に咬まれた傷の手当を受け、包帯の上から8号のゴム手をし、その上から軍手をして仕事をした。

小児科医のおいが大阪から自転車で見舞いに来てくれた。彼を送りがてら娘婿と3人で自転車で甲陽園のマンションに行った。2号線の歩道は倒壊した家屋、ビル、看板で埋まり、避難民、自動車、単車、自転車のごったがえし中での進行は大変だったが、思っていたより早くつき、久し振りに顔や手足を洗い、肌着を着替えて一服する間もなく神戸に戻った。

その夕方、必要なくすりを取りに帰宅した時、暗がりでも電話のベルが鳴っているのに気付いた。床に落ちている電話機を引っ張り上げたところ、伴からであった。相当心配していたようだが、全員無事と聞いて安心したようである。

道路のあちこちに自衛隊員が掘り出した遺体が、毛布に包まれているのが見られた。その側を通る度に自分の身分を名乗り検死をした。

22日に灘高の第2グラウンドから魚崎小学校のグラウンドに車を移動させた。今日が日曜日で電話センターの出務日だったことを思い出して、午後は電話センターに出務した。久し振りにTVを見、救急本部から差し入れのビールと焼きそば、果物を食べた。久し振りのくつろぎであった。ぼちぼちボランティアの医師が全国各地から神戸に集まって来てくれ、私共も身の整理をする時間が多少もてるようになった。その夜、魚崎西町、住吉南町の避難所の回診と私の受け持っている寝たきり老人の訪問に行った。後日その訪問先の一軒から多くの肌着が届いた。訳を聞くと私が余程ひどい身なりをしていた為だったそうである。

23日より出入りの工務店に外来部門の応急修理補強をしてもらった。外来は隙間だらけで寒いことおびただしい。24日に近所よりもらった握り飯で食中毒になり、大いに苦しんだ。この日に愛犬ボー君を調教師宅に預けた。25日頃より平常通り診療をはじめた。

先日、家の後片付けをしていると、昨年暮に亡くなった高野山普賢院大僧正森寛紹氏の「忍」と書いた実筆の色紙が出てきた。やはり今は「忍」の一字でしかないと思われる。父や私が大事にしていた陶器が大分破損した。身を切られる程つらいが、家族が全員無事であることで満足しなければならない。



### 解体直前の当院（平成7年6月7日撮影）

私は震災の約10日後に57才の誕生日を迎えた。過去56年間に私が使った体力、気力の合計と、震災から今日までのそれとは余り差がないような気がする。早いものであれから早や1カ月半が経ち、荒れ果てた庭に出ると佗助とともに梅の蕾もふくらんできている。これから仮診療所の設置、診療所、自宅、離れの取り壊しと新築、塀、ガレージの新築、庭の改修と、気の遠くなるような行程が待っている。あせることなく一步一步再興してゆきたい。未だに朝起きるとまずポシエットをする毎日である。なぜかこの中には貴重品にまじって割り箸も入っている。

欠けた月はまた必ず満つるのである。私が自分のやりたい事を心置きなく出来たのも娘婿のお陰である。彼は会社を休み、私の手となり足となり私を手助けしてくれた。そして10日間位私と共に車の中での寝泊まりに付き合ってくれた。又ひまをみてはボランティアとして、救急物資の荷おろし、運搬を手伝っていた。心より感謝する。

最後に、震災直後からの私の行動、見たこと、感じたことなどをとりとめもなく文章にしてみたが、日時に多少ずれがあるかもしれないことを断っておきたい。

（開田医院）

## 三度目の災害

灘 区 小豆澤 優



青天の霹靂！ 予想だにしなかったこの数十秒間の出来事。周辺の多くの家屋は倒壊したが、我が家は辛うじて住める状態であったことを先ず神、仏に感謝す。

当日は全く情報を得ることが出来ず、何とか携帯ラジオを取り出そうとしたがドアは開かず、再三起こる余震に不安を感じながら、何することなく時間は過ぎた。

午前11時頃長男より、後から思えば奇跡的に電話あり、通話が出来た。家族の無事を知らせる。今帰神の途中だという。その道中が心配で無理をしないよう話す。その後電話は不通となる。その夜遅く名古屋より辛うじて車でかけつけてくれた長男に勇気付けられ、運んでくれた食糧品、水、携帯用ガスコンロ等は本当に嬉しかった。

思えば昭和12年梅雨時季、3日続きの大雨は都賀川の氾濫を招き、道路は川の如く濁水が流れ、人家や、助けを求める人達が流されていくのを目撃したことを記憶しているが、幸い土砂が家の中を充満し、我が家の流出は免れ、九死に一生を得た思いであった。次いで昭和20年6月、戦火によって焼土と化した我が家を想起した時、今回の震災は全く予期していなかった災害だけに、その結果に唯呆然として、未だに復旧計画の目途たらず日々を過ごしているが、来年は古稀を迎えようとする老骨に鞭打っても如何程の事が出来るか、疑心暗鬼の心境に拍車をかけてくるだろう諸般の事柄に、対応する心構えが持てるだろうか、いささか心細い限りではあるが、何はともあれ、叩けよ、されば開かれん。のことわざの如く、前向きに頑張るしかない。目的達成には、多くを残すことになるだろうが、若い後継者に託するより仕方がないのではないかと思っている。

今改めて震災当日より3日間を振り返ってみると、当日は恐怖と不安で何することもなく時が過ぎ、午後5時過ぎには部屋は暗くなり、何も出来なくなり、懐中電灯の明かりのもとで夕食をとり、熟睡など到底望めない不十分な睡眠をとりつつ一日は過ぎていった。そのま余震は頻回に起こり、体感で震度が当たるようになった。翌日は、気分的にやや落ち着きを取り戻し、一階から三階までの開かないドアを強引に開き、或いは蝶番を除去して戸をはずし、散乱した食器の破片、窓ガラスの破片、落下、転倒した電化製品の整理、備え付けの汁器の除去等々で一日はすぐ終わった。三日目も同じ作業が続けられた。最後に最も破壊程度の強かった診療部門に移った。すべての戸は開閉ままならず、強引に蝶番をはずし、戸を除去してやっと部屋に入った。液状化現象で床は隆起し、坂をなして谷底に滑り落ちる如くとなり、ありとあらゆるものが散乱し、どこから手をつけるか戸惑い、先ず薬品類だけを一か所に集めることより始め、少しずつ整理が進んでいったが、日没と共に部屋は暗くなり、三日目も終わってしまった。携帯ラジオで情報收拾

に努め、少しずつ周辺の様子や、他の地方の情報等が分かるにつれ、今回の震災による被害の甚大さに驚き、二次災害特に火災を心配し、火元には常に厳重に注意してきた。

区、市、県各級医師会の執行部が診療関係、福祉厚生、金融関係等、多岐に亘りご尽力戴き感謝しているところですが、これからの長い道のりに於いてより一層の木目細かい良きアドバイスを会員に与えられんことを切に希望致します。

(小豆澤医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 診療再開日誌

東灘区 瀬 藤 英 嗣

大震災に出会い、自分の記録として書いてみた。

### ○1月17日(火)

9時頃に診療所の状態を見にいくと、建物は無事であったが、診療室内は重い耳鼻科用診療ユニット、電動椅子、レントゲン等が50センチメートル程度動き、本・書類等が散乱して足の踏み場もないような状態であった。自宅のある岡本地区は被害が比較的少なかったため、魚崎の状態を見て、あわててすぐ近くの実家へ行くと、そこは全壊で、住んでいた母と妹夫婦を探し、その対応に一日中振り回されることとなった。

### ○1月20日(金)

朝から1日中診療所内の整理に追われる。停電のため、診療用器機が使用出来るか否かは不明。全部の電源を切って帰宅。

### ○1月24日(火)

通電されたと聞き、各器機の点検を行ったところ、2、3の器機を除き使用可能と分かりホッとす。分業のため、薬局と相談、27日より再開することとする。

### ○1月27日(金)

本日より診療再開。時間は取り敢えず午前10時より午後1時までの3時間。従業員で出勤出来たのは僅か1名のみ。しかし患者数も10名で充分対応可能であった。

以後10日間程10～15名程度の日が続く。

### ○2月13日(月)

診療時間を少し延長し、9時30分～12時30分、14時～16時としたが、午後診は2～3名程度で、患者数も30～40人程度。従業員は2人となった。

### ○2月27日(月)

診療時間を平常通りの9時～12時、16時～19時に戻す。患者数は40～50人程度。以前は午後診の患者が多かったが、交通事情も悪く、以前の1/3程度の患者数である。

以上のような経過で診療を再開した。

2月23日に水道が復旧したが、ガスは何日頃になるのか想像もつかない。診療所のある東灘区魚崎地区は、木造家屋が殆ど全て壊れ、人口も1/3程度になっているように思われる。細い横道には、倒れた家屋が未だそのまま放置されている所が多い。私の実家もそのまである。これから解体し、整地して家が建つためには1～2年は必要と思われるし、元の住宅地域として復活するには3年は必要と思われる。



**当院診察所ベランダに隣の家が倒壊してきた。エアコン室外機が下敷きになった為、約1ヶ月間暖房不能となった。(平成7年1月19日撮影)**

自宅・診療所が残って被害は少ない方であるが、それでも私の人生設計は完全に狂ってしまった。

(3月1日記)

(瀬藤耳鼻咽喉科医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 持てる者と持たざる者

長田区 坂 牧 弓 絃

この度の震災で、我が家も一部半壊、一部全壊の状態となった。当然撤去しなければならない。しかし、家内は困った様子にみえない。物を持たない主義なのだ。それに反し、私はである。地震そのものは全く受動的に、とにかく20秒で過ぎてしまったのだが、その後が大変。一応書庫はあるし、色々コレクションが大好きときている。一体どうしたら片づけられるのか全くもって頭が痛い。人間無一物で死ぬわけだし、それもそう遠いことではない。今度は家内を見習って簡単な生活をすると思うのだが、結局、懲りもせず、元の木阿弥になるのだろうか。

震災でも無くならないものもある。身に付いた技術、教養、品性、精神力などがそうであろう。震災がなければ、或いはこのまま惰性で生きていったかも知れないが、少しはしゃきっとして、5歳位は若返って働き、人間を高めようと殊勝なことを考えてもいる。

震災で眼に見えてきたもの、そして、さらに増えてきたものに人との絆がある。家族、親類、友人、看護婦さん、近隣の人達、患者さん、診療関係の方々そして知らなかった人々。感謝するだけでなく、これから少しずつでも恩返しをしなくてはならない。

先輩であり、尊敬する友人でもあった永田昭一郎先生を亡くした。涙が出た。心の一部がポロッと欠けた感じがする。亡くなられた沢山の方々の胸中を想い、御冥福を祈る。

(坂牧眼科)

## 立ち上がろう！神戸っこ

兵庫区 中野 篤



1月17日午前5時46分、何が何だか分からない時間が通り過ぎて行きました。でもその中で一瞬私は確かに「死が来た」と思いました。それは半ば夢、半ばうつの中、怨霊みたような何かによって、私の身体が私の城ともども奈落の底に引きずり込まれて行く言い知れぬ恐怖の時間帯でした。その時の僅か20数秒間、いや私共には10分以上にも思われた長い長い時間が過ぎ、ようやく今のは地震だったということに気づいて、あわてて寝室の窓を開けた私達の目に飛び込んできた光景は、いつも見慣れてきた情景とはうって変わった、夜明け前の薄明かりに浮かぶ想像を絶する地獄絵でした。その中にはまだ家人が夜明け前のまどろみの床にいる筈の木造家屋の殆どが叩きつけられたようにひしゃげ、ビルというビルにはねじれたような亀裂が走り、その外壁は随所に剥がれ落ちて、冷たいコンクリートの下地があらわになっていましたし、また至る所で波打ちひび割れた道路には一面に木材片とガレキが、まるで秋の落葉のように散乱していて、まさに惨状の極限というべきものでした。

一方、子供達の無事を確認すると、懐中電灯を手に家具が倒れガラス片が散乱して足の踏み場もない廊下を苦労して2階の入院室にたどり着き、当日入院中の、我が子を胸に抱きしめながら恐怖に震えていた産婦を4階の私共の寝室へと導くことに成功、改めてお互いの無事を喜び合ったその時やっと自分を取り戻したように感じました。私はここで、電気なく、水なく、ガスもない環境での入院対応は難しいと判断、まずは自転車でK病院へ走ってその了解を取り付け、妻は生後2日目のベビーを毛布にくるみ、ひたすら猛煙の中波うちひび割れガレキの散乱する道路を数百メートル先のK病院へと走り抜けて行ってくれました。

夜明けと共に、我が家の前の道路には毛布を纏った避難者が次第に増えてまいりました。寒さに震え、お互いに肩を寄せ合うようにしていながらも、呆然自失の余り、無表情で殆ど言葉を交わすこともなく轟めきあっている光景は、何か異様な感じさえ受けました。一方その頃、長田区と兵庫区上沢通の火災を対岸の火事と受け止めていた下沢通の私達には思いもかけぬ事態が起っていました。倒壊家屋の中からの声を頼りに救出作業を行っていた最中の6時30分、突然下沢2町内の全壊家屋の一角から火の手が上がったのです。火は折からの西風に煽られて、見る見るうちに燃え広がりました。現場は以前に私が数年間自治会長をしておりました下沢1町内の風上に当たる西隣の町内ですし、やがて我が家を含む町内への類焼は必至と思われました。私は家のことは家人に託し、消火器を手に現場に走り、町内の人達と力を合わせて消火器とバケツリレーで何とかし、止めようとしたのですが、それも凄まじい火勢には所詮蠅の斧でしかなく、倒壊した家屋の下で次第に弱り行く悲痛な人の声を聞きながらも、ただ手を拱いて見ていると同じような自分達の無力さに、情けなく悔しくて涙を禁じ得ませんでした。10時30分、その燎原の火は8



メートル道路の際まで迫ってまいりました。もし火がこの道路を渡れば我が下りで1町内も多分同じ運命をたどることでしょう。何としてでもこの道路の手前でくい止めなくてはというのが、私達の共通の認識だったのかも知れません。また再び消火器と3,40人のバケツリレーが始まりました。1台の消防車もなく、停電の為マンションの消火栓も役立たなく、頼るのは各家庭の風呂の残り湯だけというぎりぎりの賭でした。「お風呂の残り湯ありませんか。声をかけて下さい!」と何べん叫んだことでしょう。でもみんなよく頑張ってくれました。こうして私達は、折からの西風が東風に変わる幸運にも恵まれ、類焼をくい止めることが出来たのでした。思わず万歳を叫びました。と同時に、急に全身の力が抜けて地面にしゃがみ込んでしまいました。その時私の腕時計は10時45分をさしていました。しかしこの下沢2町内火災での被害は約36世帯、犠牲者は12名にものぼったのでした。

震災から1週間がたち、我が家にもようやく笑顔が戻ってまいりました。でもまだ当院の外来対応も機能していない状況でしたので、私はふと何か自分に出来ることはないかと思いました。1月23日でしたか、私はたまたまラジオで、県立こども病院周産期医療センターのスタッフが、兵庫中学校の保健室で神戸市内の妊婦健診に当たっていることを知りました。早速自転車で駆けつけたところ、こども病院の周産期医療センターが明日から機能出来ることになったので、ここでの妊婦健診は今日で閉鎖することになっていたが、バトンタッチして戴ければ幸いという依頼に私は二つ返事で承諾、早速その日の午後から、当院のエコーを運んでの健診に当たりました。しかしこの健診は同室で内科の診療も行っている関係で、妊婦への感冒やインフルエンザの感染の懸念もありましたので、翌々日には閉鎖することになったのですが、ここでの健診をみる限りでは、本震災に起因する、ショック、転倒、腹部圧迫等による胎内死亡、胎盤早期剥離による出血、前期破水、早流産、妊娠中毒症等の発症は、当初私が心配していたほどでもなくスタッフ一同ほっと胸を撫で下ろしました。

あの日から100日を迎えた今、私の心の中にはもう100日かという思いと、まだ100日かという錯綜した念があります。ところで私の医院は2月1日から、午前外来診のみ行ってまいりましたが、3月1日からは何とか震災前の診療対応に戻り、今日に至っております。患者の方は初めの1、2ヵ月程は極端な神戸市の人口密度の低下により日頃の3分の1にも満たない状況でしたが、幸いにも今では7、8割方戻って来ている感じです。でもこの度、命があり家が残り仕事が出来るといっただけでもう十分に幸せと思っております。またこの間、数回ほど避難所のボランティア医療にも出務してまいりました。一方、ライフラインは、震災の翌々日には電気が、2月24日には水が、そして3月21日にはガスが復旧しました。「昨日やっと我が家にも水が出ました。やったという感じでした。これで本格的な掃除にも取り掛かれますし、家人にとってはハードな水汲みからも解放されますし、それにもう誰憚ることなく用を足すことも出来ます。こうして一つずつ元の生活に戻って行く歓びって凄く感動的です」これは私が2月の末に友人に宛てた礼状の中のくだりです。

今回の震災に当たって、ボランティアの果たされた役割は、それはそれは大きいものでした。お陰で被災者はどんなに勇気づけられ、どんなに有り難かったか図り知れません。私は今回のケースのボランティア活動の一つの理念として、「母親の子育て」を考えてみたいと思います。それは、0歳～3歳の子育ては、母親べったりのスキンシップを通じて大いに甘えさせ、子供の脳に「懐かしい母親」を焼き付けることが大切なのですが、3歳を過ぎますと、今度は母親離れをさせ、子供に自立心を植え付けていくという子育てに転換していかねばならないという考え方です。今回の場合、何もかも失った被災者は避難所生活でとにかく人に頼るしかありませんでした。行政やボランティアに甘えておんぶに抱っこも当然といえましょう。ここで私は震災後1ヶ月を、上記の子育ての一つの区切りと考えたいのです。この1ヶ月という線は子供では3歳、この1ヶ月が過

ぎたら、もう自立心を養う子育ての時期到来だと思います。遊びたいと思ったらオモチャが出て、飽きたと思ったらオモチャが片付けられている、そういう時期は終わりました。例えば、避難所での炊き出しにしても彼等にイニシアティブを移していく方向にもって行かねばならないと思います。彼等もやれます。少なくとも1ヶ月前までは主婦をやっていた方達なのですから。このように今後は順次バトンタッチをしていって、彼等に自立心と勇気を喚起させていくことがボランティアのこの時期の使命ではないかと考えます。これはまた医療ボランティアについても同じことが言えます。患者が避難所で医者を待つのではなく、自分の足で医療機関へ出向いていくという気持ちを喚起していくことが大切ではないかと考えます。

かねてより私は、過去半生多くの人達から「先生」という敬称付きで呼ばれて来て、少なくともそうでなかった人達よりはいい気分させてもらって来た筈ですから、せめてその分だけでも、いつかは地域社会に還元出来ればといつも心にかけておりましたので、この震災を通じて多少なりともお返しが出来たことをしみじみ良かったと思っております。また私は、これから神戸っこのこの廃墟から立ち上がって行く為に、何が一番大切かに思いをいたす時、一つには、「頑張ろう」の合言葉の下に、人を思い遣りお互いに励まし合ったあの時の原点に還ること、二つには、水が半分入っているコップに、「もう半分しかない」を、「まだ半分あるさ」の考え方に反転させる強かなプラス思考を挙げたいと思います。でも神戸っこは必ずやりますよ。神戸っこは逞しく頼もしいですから。西の窓を開けますと、我が家の周りは木造家屋は全て解体撤去されて、こぼれたクシの歯のように残ったビルだけが原野に林立しているような光景が目に入って来ますが、これはまたいずれここに美しい街が出来るという裏返しの視界でもありましょ。また東の窓を開けますと、風に乗って方々から槌音が聞こえてまいります。この分で行きますと、わが街神戸が世界一の美しい防災港湾都市として蘇って来る日は、決して決して遠くはないと信じて止みません。

(平成7年4月30日)  
(中野産婦人科医院)

## 窓を開けろ！！全部開けろ！！

長田区 飯尾卓造



当日私は、病院から3キロ離れた山の上の自宅で寝ていた。地鳴りと大きな揺れがおさまった時停電した。先ず何より病院へ連絡をしようとしたが、電話もファックスも通じなかった。電動シャッターの雨戸は開かない。手動の処から2階のベランダに出て、いつもするように双眼鏡で病院の方を見た。その時すでに煙が立ち昇っていてはっきり見えない。

妻も娘も無事だったので身支度をして出かけようとしたが、車庫のシャッターが開かない。電動である。手動用のハンドルなど記憶にもない。半ばあきらめて寝室に戻ったとき、聞き慣れない発信音がするのではないかと携帯電話である。散乱した本や書類の中から拾い上げてみると、病院の事務当直からの電話である。「患者は無事か。当直者は無事か」と叫んでいた。「建物は玄関の辺りが大きく壊れているが、看護婦さんの報告では怪我人はない、停電している」とのことであった。そして「ガス臭いです」という。「元栓は閉めたか」というと「はい。ガスコンロの元は閉めました」との返事、「駄目だ、建物の外に出て裏口のガス計量器の元栓を閉めよ、電話はそのままにしておけ」「閉めました」という。「メーターが動いていないか確かめろ」しばらくして「懐中電灯でみると、メーターが少し動いていたので止まるまで締めました」との返事である。次いで「スタッフ全員で窓を全部開けろ。タバコを吸うなと伝えよ」と命令した。「近くに火事が起きてきて時々火の粉がとんできます」という。「かまわない、窓という窓を全部開けろ、トイレの小窓も開けろ」と叫んだ。それを最後に電話が切れた。

ひと時して自宅に電気がきた。走り出してガレージのシャッターを開け車のエンジンをかけたが、なんと隣家のブロック塀が倒れて道を塞いで通れない。ショベルとツルハシで取り除きかけたら近所の人が集まってきて、手伝いを始めて下さった。「病院の近くが火事だ」というと「院長さん早く行け」と、やっと通れる幅の道が出来た。ありがとうと言いながら、病院の向い必死の思いでたどりついたら、当直の看護婦が「院長先生、窓、全部開けました」といって泣きながらだきついてきた。35名の入院患者も6名の当直スタッフも全員無事だった。

院内は手のつけようもない程散乱していたが、当直医と共に処置台や道具を前の駐車場に持ち

出して、縫合や創傷処置、DOAの検案を行った。戦いの初日であった。後に新聞の記事になったローソクの話はその日の夜の出来事である。

“骨盤骨折”で2階に入院していた老人は、一時ガスの匂いで息が苦しくて死にそうだった。窓を開けてくれたので助かったと言った。

19日の午後、やっとのことで電気が来た。とたんに色々な発信音が院内一斉に鳴り出したのである。音源は、各階の湯沸かし場と5階の給食の調理室と暖房用のガスボイラーなどに取り付けられた“ガス漏れ警報器”の大合唱だったのである。地震後、院内は都市ガスで充満していたという何よりの証拠である。爆発や出火しなかったのは不思議というか、幸運としか言いようがない。

12月に購入し未だ使いこなしていなかった携帯電話で病院と連絡がつき、私の命令を忠実に実行してくれたスタッフに感謝の気持ちでいっぱいである。





<追記>

### 阪神大震災の一私立病院長の体験

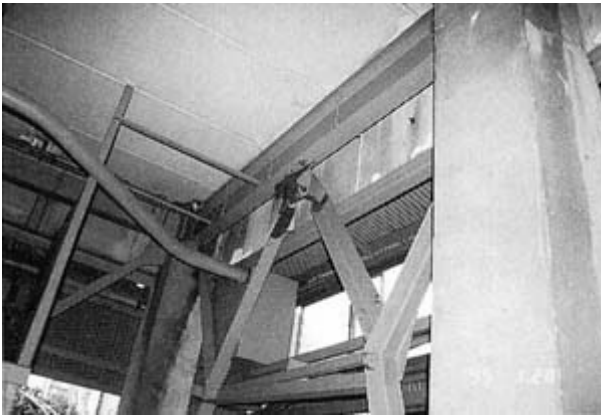
地震直後、「都市ガス」で充満していた病院を、携帯電話で、元栓を閉めたことを確認させると共に、煙と火の粉がとんで来るといふ中「窓を開けろ！！」と命じたことで、病院が爆発や出火から免れ、入院患者も当直スタッフも全員無事であったことは、既に本誌に発表した通りである。

「院長先生、窓は全部開けました」と、看護婦が泣き崩れた場面は、一生忘れることが出来ない。

病院は玄関と階段部分が大破し、吹抜けになっていたが、駐車場に処置台等を持ち出し、当直医が縫合や処置を行っていた。地面は血に染まっていた。外傷患者が押し寄せ、DOAの検案も重なり、さながら地獄のような光景となった。電気も水もガスもないところでの外科治療はどんなものか、経験した者にしか分からないだろう。



駐車場からみた玄関付近



### 非常階段脇のグレースの曲がり



### 配電室付近

混乱は翌日の夜まで続き、懐中電灯も電池がなくなり、パーティ用のローソクを立てて縫合した。

後になって震災当時の診療費を概算請求できる旨の通達が届いたが、一例も請求しなかった。外科医としてできることをしたままで、死体検案書の代金も請求しないことにした。せめてもの心意気である。

当日常勤職員で出勤できたのは、40名中12名。職種に関係なく、院内の秩序回復に頑張ってくれた。翌18日に宿直が当たっていた看護婦がリュックにおにぎりとお水を詰め、5時間かけて出勤してきた時には涙が出た。

給食は、バナナ、トマト、缶詰類など調理せずに食べられるものをすべて配付した。その後救援食や水が届きはじめ、危機は脱出できた。屋上の高架水槽は4トンの容量があったが、地震による破損もあり、数時間で空になった。地下受水槽は12トン位あるはずだったが、蓋を開けてみると空になっており唖然とした。

ライフラインの中で唯一生きていた電話が18日の午後、突然不通になった。テレビとラジオで飯尾病院が全焼したとニュースが流れたという。我々はテレビ・ラジオどころではないが、電話局が回線を転用するために切ったというのである。交渉の末回復出来たが・誤報が原因だったのである。

4日目だったか、テレビ局から電話で「外来診をしているか」との問い合わせがあり、一応診療をしていると返事したら、外来診可能な病院として、飯尾病院をメシオビョウインと紹介したという。数分後から外来が急に騒がしくなってきた。救急車までが運んでくる始末である。普段から診ている患者さんと震災当日来、創傷処置をした患者さんで混雑している所へマスコミがパニックを引き起こしたのである。地域のかかりつけ医的な範囲で、救急も受け入れているとはいえ、広範囲に情報を流されるとこんな混乱を巻き起こすのである。



準備中の風景。後の壁は崩落前、寒いので着ぶくれてにぎりめしの配布



病室の隔壁



玄関ロビーのテレビ台



### 鉄骨が露出している一階と二階の階段部

いつ崩れるかわからない危険な場所に患者さんを預かり続けることは出来ないと判断し、転院と考え、市内の各病院に受入れを要請したが、殆どの病院は混乱していて不可能とのことだった。近くの神戸市立西市民病院が損壊し、数百の患者の転送に市内の救急車が動員され、運ぶ手段さえない状態であった。近隣の病院長にお願いして、数日中に一人でも二人でも受入れてもらう約束をし、家族が引き取れる患者は各々転送先を探してもらうことにした。軽症患者を退院させてまで受入れてくださった病院に感謝している。

2月9日、訪ねて来られた瀬尾兵庫県医師会長に、「こんな危険な建物の中で診療行為をするのは問題だ」と忠告された。

神戸市から派遣された建築士によると、「強い余震が来ると建物倒壊の恐れがあり、至急避難はもとより、早急に解体の必要がある」との診断であった。

職員には1月25日付で解雇通告をし、その後は、無給のボランティアを申し入れた人たちと転医依頼書、情報提供書の作製など残務整理に当たり、カルテとX線写真を段ボールにつめ、避難を完了したのが3月31日である。と共に病院休止届を提出した。

4月6日から解体工事が始まった。27年余り、外科医として、一救急ユニットとして頑張ってきた病院は、6階部分から取り壊しに入ったが、予想以上に鉄骨が太く、重機が破損して中断するなど、予想以上に手間取った。解体を拒んでいるようで、見るたびに涙が止まらなかった。工事が完了し、周囲に金網が出来たのが6月28日である。直ぐに仮設ハウスを駐車場だった所に設置したが、診療はしていない。まともな診療が出来るとは思えないからである。

2階建の診療所の建築を発注。秋頃に再開の見込みである。

災害依頼、物心にわたるお見舞と温かい励ましをいただいた皆様に、心から感謝を申し伸べて、筆をおくことにする。(7月4日記す)

(飯尾病院)



## ボーツとして居りました

東灘区 矢野 武



ボーツとして居りました。

17日は茫然として過ごしていたら、夜中3時過ぎに大阪の次男が8時間かかって様子を見に帰ってきました。

18日に息子の車で診療所を見に行きました。ビルはちゃんと建っているし、シャッターも正常に上るのでヤレヤレと思って内部へ入ると、皆様御存知の通りの有様で、溜め息をつきながら階段を降りました。その晩、家内や息子と相談して、ひとまず息子のワンルームマンションへ避難することにしました。それから土曜日位まで、本当にボーツとして過ごしました。

やっと土曜日に診療所を整理しなきゃなあ、という気になりました。月曜日に帰神し、火曜に整理にかかりました。電気が25日にやっと来ましたので、27日から診療を始めました。

その間、恥ずかしいことに、ボランティアで働こうとか、医師会に連絡しようとか、全く考えもしませんでした。

TV等で活動している先生方の勇姿を拝見しても、エライ先生も居るのやなあ、と思うだけで、とても自分が出ていこうという気になれませんでした。

全くミットモナイ話ですが、一週間、腰を抜かしていた、というのが本当の所のようです。

(矢野医院)

## 私の阪神大震災

北 区 土 佐 光 弘

阪神大震災から早や100日が過ぎ、満4ヶ月を迎え、野山はすっかり、新緑に生まれ変わった。鮮烈な、痛ましい記憶は、どんどん遠のいて行く。如何ともし難い。しかし、通勤の有馬街道は、依然として大型車が多く、終日渋滞、4.1キロメートルを30分以上もかかる。幹線道路化した県道15号線が未だ1車線とは、戦後50年、我々が礎きあげて来た繁栄は、的を得ていたんであろうか。今回の大震災によって、経済大国日本の虚実が、灸り出されたようにも思う。

1995年1月17日午前5時46分、還暦を過ぎた身には、既に目覚めていた。揺れ始めたと思う間もなく、突然大男に背中を鷲掴みにされ、わけもなく、思い切り上下に揺さぶられるような、強烈な揺れを感じ、今にも柱が倒れ、天井が落ちてくるのではないかといった恐怖感を感じたが、“神戸には大地震は有り得ない”といった先入観が頭をもたげ、今に治まるだろうと思いながら、ここでこれ程揺れるのであれば、震源地はさぞ凄いだろうなあと思い、早く止んでくれ、早く治まってくれと心の中で祈っていた。幸い自宅は大したことは無かったが、医院は一部損壊を免れなかった。車庫は陥没し、診療所玄関ドアは引き千切られて寒風が吹き込むにまかせ、カルテ棚は転げ落ちて、カルテは一面、床に散逸していた。ここで始めて、今度の地震の甚大さを悟り、このような被害を被った事にとても腹立たしかった。カルテの整理やら、部屋のかたづけやらに1時間半程を要したが、誰一人来なかった。11時前になってやっと「先生やっていますか」と、よりによってこんな日に来なくてもよいような、風邪の男性がやって来た。ラジオは、刻一刻と、被害の激甚さを伝えていた。震源は、足元だった。午後、我々の両親の安否を気遣い、車を灘と兵庫に走らせた。神戸トンネルを抜けて布引から国体道路を東に、將軍通りに向かった。途中、見るも無残に全壊した我が家を前に、放心したように歩道にへたばる老婆、JR灘駅辺りで、にっちもさっちも進まなくなった。東進を諦め、王子動物園に出て西に走らせた。加納町から山手線に入った。西の空は、立ち昇る黒煙で覆い尽くされていた。長田区の辺りからか。崩れ落ちた家屋の数々、あちこちに大きく傾いたビル、4階がへちゃげた萬寿殿が、すくと立っていた。新開地3角公園で、一面にソウメンを流したように崩壊した三菱銀行、JR兵庫駅近くで、もうもうたる炎に包まれた民家、消防士が一人、唯眺めているだけだった。車窓から見えるこのような異様な風景の連続、平成の世の地獄図をみる思いだった。幸い両親は、共に無事だった。

この後ひと月間は、その日の診療を果たし続けることに精一杯だった。ガス暖房が使えなくなったため何枚も着込み、セラミックファンヒーター1つで、震えながら診察を続けざるを得なかった。これが一番辛かった。ちょうどこの頃、流感が猛威をふるい、又避難して来た被災者の診療がこれに加わって、患者さんをこなすのに、気力、体力共に消耗する毎日が続き、高熱を発して寝込んでしまった。仕事以外にも、あれこれの片付けから、車庫のコンクリートの修繕やら、又被災した知人の女の子がインフルエンザによる高熱を出し、避難所での寝泊まりが危ぶまれたため母子共々あずかったり、全壊したため老いた両方の両親を引き取ったり、ガスの出ない周りの人達にお風呂を提供したり、被災荷物をどっさり預かったり、あれやこれやで慌ただしく、ふた月は過ぎ去っていった。

このような僅かな体験を通じて様々な人間模様を実感することとなったが、第1に、人は身内、他人を問わず、常日頃の親しいコミュニケーションが、実に大事かということ、眼に見えないお互いの絆が、いざという時、どれ程大きく物を言うかということである。人は何時如何なる時に、

突如として人様の世話にならぬとも限らぬ。常々、人には精一杯の誠実さと優しさで、接していかなければならないと思う。第2に、今回のような青天の霹靂に遭遇して人の眼に曝されるような状況に放り込まれる時、それまで覆い隠されていたその人の核が露呈されるということが起きる。これは恐ろしい事だ。又このような激震下で、人はどれ程他に立ち働いたか。震災は、人間を縦一列に並べ変えたようにも思う。第3に、それこそ眼に見えないポテンシャルエネルギーが問われることにもなった。その人の潜在していた予備能が大きく物を言い、経済的にも人間的にも、豊かなエネルギーがあれば、それだけ思い切った援助の手をさし伸べることが出来よう。



### 街の明りが灯るのは、何時の日か(兵庫区)

日夜復興の槌音が聞こえる。更地が広がり、木の香りが漂う。懐かりし、旧三宮界限は、どのように生まれ変わるのでしょうか。神戸市も、これ迄の開発優先から、生活優先に切り換えねばならぬ。日々の市民の憩いを約束する、緑豊かで、温かな街の再生に向け、市民自らも参画、汗を流すことが、5千5百の無念の霊に報いることになるかと思う。

痛々しい倒壊現場の花束を眼にする時、人の生命の優さを想い、満感胸がしめつけられ、涙がこみあげてくる。そしてこの悲惨な光景を、心の奥底に焼き付けておこうと思う。

これから先、そう長くは生きておられないだろうが、これ迄以上に慎ましく、シンプルに、そして謙虚に生きていこうと切に思う。

(土佐内科医院)

## 大地震少したった今思うこと

中央区 木 皿 靖 男

神鋼ラグビーが7連覇を果たし神戸の威気を日本中に響かせた話題の中、一転、神戸は大音響とともに瓦礫の奈落に落とされた。平成7年1月17日午前5時46分であった。それから2ヵ月になろうとする今、復興は徐々に確実に進んでいるように見える。しかし、阪神大震災は多くの問題を露見させた。地震の予知は出来ないのか？ 活断層上の家屋、ビル、高速道路、鉄道路線等の補強対策は可能ではなかったか？神戸には大地震は来ないという大架空前提は自然の脅威を侮りすぎていなかったか？等々、素人的議論は多々あります。

小さな人間が自然の想像外の力に抗することは不可能です。我々が出来るのは防災、それも二次災害を最小限に抑える防災です。今回、中央政府をはじめ、地方自治体の危機管理の体制が殆ど役立たずのマニュアルであった。

今將に兵弾が日本に撃ち込まれんとする時、又、撃ち込まれた時、どうなるのか？ 原子力発電所が事故で放射能が漏れた時、どうなるのか？ どうするのか？経済一等国の自負という砂上に、何もかもが組み立てられてきた結果の崩壊と見える。国民不在、住民不在の行政の結果と見える。今後の危機管理の体制作り注目したい。

今回の地震による死者・不明者は5600人にもなり、このうち地震直撃よりもその後亡くなった人が大半であった。続く火災で、生きながらに焼死した人、救出が遅れて死亡した人、救出後医療の不備で死亡した人。医師として、救出された瀕死の住民を前にして命を救う道具が無いほど悔しいものはない。医師不足もあったろうが医師自身も被災しており、医療現場への患者搬送が困難であったこと、病医院自身が崩壊したり、救命の道具が不足・不備であったり、後方病院への連絡搬送が遅れたり、不可能であったことが多くの犠牲者を出した一因と思われる。

大災害時の医療体制について私見を2、3提案したい。大災害時に医師の取るべき態度は3つある。

1. 自分の家族・親族を守る
2. 現在治療をしている患者を守る
3. 被災直後の住民を守る

これは3者とも同列に論じられるべきものであり、妻の「私と仕事とどっちが大事なの?!」的な議論をすべきものではない。

医師の使命感に後押しされて走り回ることが最も医師らしい姿であるが、薬品や道具には限界があり、唯の人になりかねないし、貴方の家族はどうするのか、インスリンや心臓薬や降圧剤などを失った貴方の患者はどうするのか、こちらを立てればあちらが立たずのジレンマに陥る。



### 運悪く、友人の車だけ壁の下(東灘区)

災害時の医療の大前提は死者を最小限にすべく努力することであり、そのためには医師1人頑張っても無力であり、警察・消防救急隊・看護師等がチームとなって行動すべきと思う。そのために日頃より各地区に(各区医師会でなく)地元の医療チームを準備しておいて、災害緊急時にチーム毎に救急車に便乗して現場に急行し、現場で救命処置をし、後方病院に搬送させるべきであろう。(救急を要する患者は自分で来れないのだから、医療所を作って待っているわけにはいかないのである)もちろん災害時の救急車の充分量の確保と、救命に必要最小限の装備が準備されておらねばならないのは当然である。そして、これに関連してもっと基本的なこととして、医学教育での救急医療の知識と実施を必須のものとするべきである。

慢性疾患の患者特に心臓病・糖尿病・高血圧・喘息・勝原病・ホルモン剤補充者・癲癇・臓器移植後患者等では必要とする薬を確保し投薬すべきである。もし医師が病医院に行けない、或いは病医院が壊れ薬を準備出来ない時を想定して、日頃よりこのような患者には服薬すべき薬や注射の名前と量を書いて肌身離さず持たしておく配慮がなされるべきである。

今回の大地震に遭遇して私なりの価値観の変更を余儀なくされた。また、医師とは? 医療とは? 自問させられた恐ろしい経験でありました。(今日も6回地震を感じました)

(1995.3.5記)  
(きさら内科医院)

## 阪神大震災雑感

西 区 中 井 準

私共の西神戸医療センターが阪神大震災で受けた被害は軽微であった。それでも外壁に2、3の亀裂がはいったし、内壁には10カ所あまりのひび割れないしは脱落があり、看護婦詰所、患者食堂での冷蔵庫、器具棚などの転倒、破損と、コンピューター端末、カルテ、X線フィルム、薬品などの床上散乱などがおこった。しかし、診断、治療の機械類にはほとんど被害はなかった。また医師、看護婦をはじめ全職員が無事であったことは大きな喜びであった。

当日、最も困ったことは交通の寸断と自宅の崩壊、損傷のために職員が約70パーセントしか出勤できなかったことである。その日から医師、コメディカルは全員が病院に留まり、看護婦はとりあえず夜勤あけのものも帰宅しないで仮眠室、隣接の職員住宅での休息を指示し、病棟によっては前夜の夜勤の看護婦が日勤、あるいは準夜勤にそのまま入ったところがあった。地震後すぐ停電、断水がおこり自家発電でまかなっていたが、当日中に電気は復旧し、水も間もなく復旧したことは他の地域、医療機関と比べてたいへんな幸運であったと思う。



### 外壁に地震で生じた亀裂（平成7年1月17日撮影）

震災当日の救急患者は主として地震による外傷患者であったが、その数は106人、当日入院した患者が他院からの転入院も含めて86人であった。脳外科、整形外科の患者が多かったが、倒壊した家屋から救出された患者のうちには、まもなくCrash Syndromeを発症するものが多発し、そこへ透析病院を失った慢性腎不全患者も多数来院し、平常16人/日でやってきた透析を、64人/日つまり1台あたり4回転、24時間稼働させてしのいだ。それでも何人かの透析患者は他の施設にお願いしたが、この依頼先を探すのが一苦労であった。どこの病院が動いていて、どの程度の医療ができるのかがさっぱりわからず、また患者の移送にしても、どの経路ならどれだけの時間が掛かるのか、ヘリコプターが必要になるのか、などの情報が不足しており、個々の病院に電話しても、どの病院も取り込んでおり、必ずしもその病院の全体状況がすぐに得られるとは限らず、このような大災害に際しての神戸市全体の医療情報の把握と伝達とは、特別の態勢を準備しておかなければならないのではないかと思われた。つまり、医療情報のセンターを設置して、各医療機関は自病院の空ベッド、可能な機能を報告するとともに、センターに問い合わせることによって他の病院の情報を得ることができるシステムが必要であろう。

震災から1カ月余が過ぎた現在、当院の診療は透析以外は次第に平常に戻りつつある。未曾有の

経験に戸惑うこともたくさんあったが、何とか切り抜けてこられたのは、当院職員のなみなみならぬ努力と、関係各位のご助力によるものと心から感謝する次第である。また、神戸市医師会の皆様のお励ましに深甚の謝意を表したい。

(西神戸医療センター)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 地震の混乱のなかでの周産期病棟

西神戸医療センター周産期病棟

主任看護婦 梶 浦 とよ庫  
" 松 隈 三枝子

西神戸医療センターが平成6年8月に開院された。病床数20床、新生児20床・NICU5床である。周産期病棟のスタッフは、婦長1名、新生児室と産科病棟（分娩部を含む）各15名でそのうち70パーセントが卒後1～2年目である。分娩数は8月5例、9月～12月は平均19例であった。

震災当日は、16名の入院患者があった。ナースステーションでは、収納棚の扉は開き、トレイが散乱していた。また、セントラルステーションモニターは2メートルの高さから落下した。病棟ではベッドは斜めになり、点滴台はテレビ台の下に入り、テレビ台が持ち上がっていた。分娩室でも分娩台が移動し、水が湧きだしていた。病棟全体が停電し、廊下の防火シャッターがガタンと音をたて、閉まった。パニックに陥った患者が一生懸命開けようとしていた。

また、ショックから流・早産防止で入院していた患者に次々と腹部緊満が現れはじめた。

深夜勤務者は、その対応から始まった。そして「電話が通じなかった」と突然陣痛の発来した産婦が来院した。

日勤になって、流・早産防止の収縮抑制剤の点滴中の母体搬送3名をはじめ、7名の入院があった。18日にも3名の母体搬送、19日に3例の帝王切開があった。西市民・中央市民病院を初め15の施設から37名の紹介患者、母体搬送があり、1か月間の分娩件数81例（帝王切開18例）、入院107名、退院102名と、20床の病床数では到底間に合わない状況になった。



外壁に地震で生じた亀裂（平成7年1月17日撮影）

急激な患者数の増加に伴い、ベッドの確保が問題となった。20床と陣痛室3床、出産後の状態を観察するリカバリー室はもとより、家族が待機する家族控室にソファベッドを入れ、それでも足りず、空いている他病棟に収容した。多い日には35床、分娩開始した産婦が陣痛室、リカバリーに7名、また病室でも分娩開始した産婦がいた。他病棟に転棟した褥婦から不満が出て、再度退院後の産科病室に移動したり、他院から母体搬送された患者をベッド不足のため他院へ紹介、母体搬送せざるをえなかった。

当日は、被災して出勤できないスタッフも4名おり、2～3日後に出勤しても帰る自宅さえなく、医療従事者も被災者であり、大きなストレスを持っていた。夜勤者も1名増やし、新生児室・



産科病棟で5名とした。落ちつくまで勤務体制は流動的にした。1月21日から西市民病院の助産婦3名、看護婦2名の応援が得られた。しかし、1週間過ぎた頃より、発熱、感冒等の体調を崩すスタッフが現れ、早めに休養をとることで、いつまで続くか予測出来ない状況に対応した。

また、水も不足し、毎日行っている沐浴も出生時・3日目・退院時とし、褥婦も退院時のみのシャワー浴とした。しかし、他病棟では全てのシャワー浴・入浴はできなかった。

新生児センターにおいてもコットが不足し、西市民病院より運び活用した。余震の頻発した2週間程は、児の安全を考え母子同室を中止した。自律授乳を取り入れているため、授乳室には絶えず授乳している褥婦がいた。

妊産婦の環境にも変化があった。Aさんは自宅が全壊し、ほとんどのものを失い、流産防止のため安静、点滴治療と入院を余儀なくされた。公務員の夫は職場でガレキの撤去の仕事をし、21時の面会となった。2週間して「やっとガレキの中の洋服を出しクリーニングからかえてきた」と嬉しそうな表情をしたのが印象的であった。

Bさんは自宅が全壊し、避難した実家が総勢22名の大家族となり、買い出しにでかけてもカップヌードルなどのインスタント食品しかなく、「妊婦だといっただけかまっておれない」と1週間のインスタント食品の生活となった。その結果、妊娠35週の妊婦は20キログラムの体重増加となり、重症妊娠中毒症で来院し即入院、緊急帝王切開となり2026グラムの児を出産した。

また、Cさんは自宅も夫の職場も全壊し失業を強いられた。退院後は、3人の子供と夫の実家である四国で急に夫の両親と同居生活を送ることになった。

そんな妊産婦が前向きに物事を考えられるように励ましたり、話を聞いたりすることが大切であり、妊産婦にとって普段の生活がいかに大切であるかを深く感じた。

病院では、当日から職員食堂は営業されており、また夜勤者にはお弁当が用意され、食料の確保に神経を使わず働けたのは有り難かった。そして、住居のない職員は一時的に職員住宅を使用させてもらった。

危機状態にあるときには、おたがいを思いやる心が大切であると実感し、人は社会の中で生かされていると痛感した。また、患者家族の慰安につとめ、協力し助け合い、切り抜けてこられたことに感謝し、病欠者も出さずにのりこえられた事が、大きな自信となった。

ただ一つの心残りは、許容量以上の急激な患者数の増加で、私たちが目指している母乳栄養の確立などの援助が十分に提供できなかったことである。

## 阪神大震災に思うこと

垂水区 浅沼克次



これまで観測史上震度5以上は記録されていない神戸の地で、地震といえば関東の問題だとたかをくくっていた神戸の市民にとり、17日早朝の地震はまさに寝耳に水の経験になりました。我が家は診療所と同一建物で、地震直後の室内外の惨たんたる状況にしばらく声も出ない状態でありましたが、ともかく散らかった院内の片付けはその日のうちに行い、翌日より普段と変わりのない診療体制を敷くことが出来ました。

地震直後から、長田や三宮で被災され、垂水の親族や知人を頼って避難されてこられた、病气持ちの方がぼつぼつ来られるようになりました。その中で印象に残る患者の言葉を2～3ご紹介いたします。

### 〔証言1〕 60才代の男性、サラリーマン(長田区)

地震当日は、早朝出勤のため朝食を済ませ家を出たのが5時40分頃、道を歩いている最中に地震に合い、立っていることが不可能なので地面に這いつくばっていた。身体のまわりに瓦や、電柱や家屋の倒壊物がどんどん落ちてきて、生きた心地がしなかった。直ちに家に戻って返し、倒壊家屋から奥さんを助け出すのに2～3時間かかった。隣近所からも、助けてくれという声が数カ所で聞こえていたが、一人では全く手がつけられない状態で、そうこうしているうちに火の手があっという間にせまり、手を合わせながら現場を離れてきた。

### 〔証言2〕 70才代の男性、漁夫(明石市)

地震の際、丁度明石海峡大橋の下でアブラメの一本釣りを行っていた。3回船が上につきあげられ、その度に10センチメートル位オシリが船から飛び上がった。これは大きな地震だな、多分自宅は潰れているだろうと考えながら帰ってみると、幸い我が家は無事だった。

### 〔証言3〕 鷹取地区母子家庭の母、60才代

地震後3時間倒壊家屋の下敷きになっていた。もうあきらめかかっていた時に近所の人に掘り起こしてもらった。自分でも思いがけない力が出て壁を破って脱出した。約1時間後に火事が起こり、自宅付近は焼け野原になってしまった。

地震後3～4日後に当院に現れた患者の内で、神戸市の職員、警察官、自衛官などは日頃の人相が様変わりするほどの激務を行っていることが一目でわかり、その御努力に心からの感謝と敬意を感じました。

地震後、診療やテレビを通じて神戸の皆様が奇妙に明るく、落ちついておられ、改めて神戸は

ネアカの町でよかったなと再認識致しました。

神戸にとり、今回の最悪の事態は、寄せ集めの政権下の政府の対応のまずさだと思います。テレビの報道で地震の翌日の財界との懇親会に直前まで出席予定だったとの村山総理の行動には、なんともやりきれないものを感じました。積極的に情報を集め、機敏な対策をとらねばならぬ立場にあるのに、意欲、気力が感じられず、また対応する危機管理体制の欠如に怒りをおぼえました。

神戸はこの100年間に、大水害、空襲、今回の地震と3度の大きな災害を経験することになりましたが、本来ネアカで前向きな市民のことですから、以前に勝る復興が近い将来に行われることを信じて疑いません。

不幸中の幸いは、地震が早朝で、ラッシュアワーに重ならなかったこと、神戸市の人口が150万と、東京や大阪に較べて少なかったことなどで、今回のように危機管理体制がほとんど作動していない状態で、これが東京や大阪で起こっていたらと考えるだけでぞっとする次第です。これを機会に、万全の危機管理対策を切望する次第です。

(平成7年3月3日)

(浅沼内科医院)

## 医療と心の約束

兵庫区 上羽 康之



使命感・親切心・礼節を鐘紡記念病院の日常臨床における心の約束として日々の診療に当たっていることを、一昨年院長就任の時知らされました。それ以後、医療従事者にとって専門的知識と技術に関する生涯教育と、全人的医療を全うするための精神的援助と、その基盤について病院院内誌や研修会を通じて啓蒙してまいりました。そうした教育が一体どの程度理解、修得されているかを見極めることは、なかなか難しいものです。そして、1月17日、阪神大震災が起こりました。従来入院患者に加えて、災害により傷害を受けられた方、家を失って避難された方、病院は色々な問題を抱えて大混乱です。その病院に職員は医療担当者としての使命感に燃え、続々と馳せ参じてくれました。震災発生当日で、医師61パーセント、看護婦63パーセント、その他の医療技術者44パーセント、事務61パーセントです。倒壊した家屋の横をすり抜け、火の粉をよけながら亀裂の入った凸凹の道を徒歩で、自転車で、単車でやってきてくれました。近年のモータリゼーションの影響で脚力も決して十分とは言えません。歩くというよりは、足を引きずりながら、周囲の悲惨さに涙を流しながら、中には京都から大渋滞の中を14時間かけて来てくれた者など、それぞれが大変な思いをして駆けつけてくれたことは、非常事態に際してやらなくてはならないといった使命感があったからこそと思います。

病院内での活動は院長としての特別な指示はなく、問題のある時のみ相談にのる程度で、各職員が各持場で自己の判断に基づいてフルに活動してくれました。事務は食料と水の確保に全力を注いでくれましたし、臨機応変に活動した例としては、投薬業務の手伝いに医師が参加したり、電話交換に理学療法士が当たりました。わずかの障害もなしに順調に活動し得たのは、240床の中規模の病院であったことが幸いしたのかも知れませんが、災害により受診された方も避難された方も、病院の指示に従ってよく協力して戴きました。給水車が来たときも整然として列を作り、若い人達は水の入った容器の運搬を手助けしていました。病院に来られた方も受け入れに当たった職員も、総てが被災者であり、被災してしばらくはパンとおにぎりが続きましたが、不平を言うこともなく、お互いに慰めあい、励ましあって気力と体力の維持につとめて頑張りました。

従来、物質文明が幅を利かし、経済力の有無が評価の基準となっていることに、少々不満を持っていた昭和一桁の小生にとり、そんな情景に素晴らしいなあ、日本の国も捨てたものではない、殊に国際都市であり港街でもある神戸の住人が、各人のプライバシーを重視する余り、近隣との交際に疎ましくなりがちであったのが今回の被災では素晴らしい資質を見せて戴いたと感謝しております。

今回の大震災に当たって、行政機関、警察、自衛隊、全国から参集されたボランティアの方々、多くの救援の手をさしのべてくれた知己、友人など諸々の機関の方々の支援に、只管感謝

している次第です。

近年の傾向とはいえ、被災地から離れたところから、震災への対応策の不備な点のみを指摘、評論したり、わざわざ被災者ルックでマスコミの前に登場し、不平不満を並べたてている輩には、やり切れぬ思いが致します。平常時にあっても、また今回の自然の猛威による災害を受けた時も、それぞれが自己の能力に応じて社会的貢献をしているという自覚こそが、自己点検、評価につながるものと思っております。

(鐘紡記念病院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 震災雑感

灘 区 田 辺 恭 三

1月17日午前5時46分は、いつもと同じように熟睡していた。異常な揺れに目は覚めたが、あまりに激しいので爆弾でも落ちたかと思った。家族は全員同じ部屋で寝ており、襖が倒れてきて子供がおびえたが、無事を確認しホッとした。揺れている間はじっとうずくまっているだけで、とても何もできなかった。6才の長男も患者さんは大丈夫かと言っていたが、揺れがおさまったところで入院患者の確認にむかった。当院はビルの6階で、自宅が7階であるが、自宅は足の踏み場もないほど家具が倒れ、瓦礫が散乱していた。これはただ事ではないと思いつつ、暗闇の中病室までたどりつくと、患者は赤ん坊を抱いてベッドの上に坐っており一安心した。当直看護婦も部屋のドアが開かないと叫んでいたが無事であった。

とりあえず院内を片付けていたが、明るくなってきたところできれいになるまで朝食を患者に出し、一息つくと看護婦を自宅に帰らせた。院内の状態は惨憺たるものがあつた。機械類はキャスターがついているものが多いため派手に移動し、中には壁に当たり穴をあけたものもあつたが、機能的には意外に無事なものが多かつた。しかし、カルテ棚や収納庫等はすべて倒れ、カルテ、アンプル、薬等が散乱していた。あの重たい分娩台、内診台が引っ繰り返っているのには呆然とした。某病院では患者診察中地震に襲われ、患者さんが診察台かち落ちてしまったと聞いたが分娩中、或いは手術中に地震に襲われたらと思うと恐ろしいものがあつた。

建物事態は倒壊を何とかまぬがれたが、水、ガス、電気、電話はただちに使えなくなった。宿泊施設としての機能がなくなったうえ、入院患者の家族が自宅倒壊のため3～4人、親戚の者が1人、また当院で1ヶ月前にお産した方は実家が焼けだされて避難されてこれ苦しいものがあつた。エレベーターは使えず、外部との連絡に6階まで階段を昇り降りせねばならず、物を運ぶのも大変であつた。実際、水というものは大変重いものだというのを実感した。水や食料品を、従業員や患者で届けてくれた者があり、非常に嬉しかつた。入院患者は事情がわからず、トイレが使えない、ウェットティッシュがほしい等、いろいろ要望を言われても十分にこたえることができず困つた。またお湯をつくるのも大変であつたし、消毒もできず、入院している以上は責任もあり、各避難所でも避難された方も収容された方も大変苦労されただろうと思われた。入院患者が退院し、避難してきた家族も御主人が姫路より迎えにこられて帰られた時は正直ホッとした。分娩予定者も連絡をとらねばとカルテを探しだし、公衆電話にいったが、長蛇の列に諦めた。とりあえず、直接来られた方は紹介状をわたし、3～4日後、家内の実家から電話をしたが半分も連絡がとれなかつた。

その後、家族、従業員と共に院内、自宅を片付け、電気がつきだしたので震災1週間後から診療を再開した。現在ガスは復旧していないが、水道を使えるようになり、分娩、入院を再開するまでこぎつけた。しかし建物の損傷がひどく、修理業者との対応に追われる毎日である。

よく日本人は安全をただと思っていると聞かされていた。たしかに今回の地震は1000年に一度というものだし、全く突然のもので、今回のようなことはしばらくはないと思う。しかし将来どういった天変地異がおこるか分からないし、また他国が日本に攻めてくるということもないとはいえない。今回のように突然、水、電気、ガス、電話といったものが使えないという状況を想定して用意しておくのも必要だと痛感した。そういった非常事態に的確な状況判断し、行動することはとても難しく凡人にはできないが、まるで運まかせというのでは情けない。運も実力のうち

という言葉もある。

しかしながら慣れというのは恐ろしいものである。喉もと過ぎれば熱さわすれるのたとえの如く、私自身は今だその日ぐらしにあけくれ、マニュアル作りもしないのを反省しつつこの文を書いている。最後に結局ものをいうのはその人の体力であり、お互いの協力である。これは忘れないよう体をきたえ、まわりと付き合いの悪くないよう心がけている。

(田辺産婦人科)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 一産婦人科医の地震当日

灘 区 大 谷 恭 一 郎

阪神地方を襲った大地震は市内各地をパニックに落とし入れて、今なす術すら奪い去った。当院も例外ではなく、建物の倒壊は免れたものの、分娩室、手術室等の総ての機器はガラス片と共に飛散し、修羅場さながらの有様を呈し、電気・水道・ガスも用をなさず、通信・交通も絶たれた医院は孤島の廃墟であった。

このような状況下、前日から陣痛発来で入院中の2人の産婦さんを他院へ紹介することも出来ず、自院で分娩を行うほかはなかった。そこで何をさしおいても緊急処置の場を確保すべく、副院長をはじめ寮にいた9名の看護婦を動員し、頻発する余震の中をその復旧作業に取り組んだ。

午前8時30分、激震から3時間目に児頭骨盤不均衡で帝王切開を予定していた整形外科医夫人が陣痛発来で入院された。この方は第1子も大阪で帝切を受けておられ、転居のため主治医に当院を紹介されて入院予約されていたもので、取り敢えず経過をみることにした。何とか陣痛をやわらげ、電気の回復による諸モニター機器の作動を待って手術したいと、ウテメリンの点滴を試みたが奏功せず、期待する点灯の兆しも全くなかった。

このような緊張の続く状況下、午後3時25分に女兒の普通分娩を済ませて束の間、午後5時頃になってトラウベ氏ステトスコープによる児心音聴取で、頻脈と除脈の変動が著明となり児頭も下降しないため、急遽、帝切に踏み切る決心を迫られたが、この時期を待っていたかのように、手術室も一応の整理がついていた。

当院では日頃から緊急用に器具・術着からガーゼ類に至るまでの手術セットをガス滅菌して2セット用意していたが、これがビニール袋も破れずどころがっていた。幸いにして閉鎖循環麻酔器・酸素・免気も辛うじて使用に耐える状態であり、水は地震直後の30分間程断水しなかったのを、バスタブはじめすべての容器に満水させていた。

午後5時30分、送電が断ち切られた暗闇の手術室で、3本の懐中電灯、手動血圧計、蓄電式心電計を頼りに帝切を行ったが、看護婦の照らす懐中電灯の光は暗い中で澄みきった神秘的な輝きをみせていた。





全員が固唾をのむ中で、手術室一杯にオギャーという元気な産声は、地震の恐怖に怯えていたスタッフ全員を勇気づけるこの上もない天の声であった。3470グラム の女児の誕生の瞬間である。手術中に震度3クラスの余震に2回も見舞われたが、皆の気丈と協力で無事手術を終えた。

この間も依然として送電は閉ざされたままで、羊水の吸引も口で吸うカテーテルを用い、電動式体重計も使用不能のため、新生児を抱えた看護婦がバネ式体重計に乗り、自分の体重を引いて新生児の体重とした。

その後午後9時23分にも男児の経膈分娩があり、我を忘れた長い長い一日は終わった。

いま平成時代を騒然とさせた未曾有の大災害の中、元気にこの世に生を受けた3人の赤ちゃんの限りない幸せを祈らずにはおられない。

甦れ神戸！！ 頑張ろう神戸！！

(大谷産婦人科医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

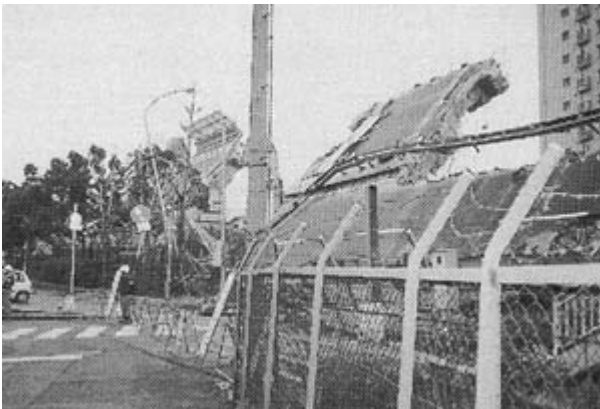
## 阪神大震災

東灘区 松山 栄二



とにかくびっくりしました。朝の5時頃といったら朝寝坊にとっては一番熟睡している頃です。しかも2連休の遊び疲れでよけいに寝入っているところへドドドーンと来たから、ほんまに朝ションがちびる思いでした。前半の横揺れの時は少し夢心地でしたが、後半の縦揺れの時は本当に強烈でした。ペットからはね上がってもう少しで天井に激突するところでした。多少オーバーかなあ。隣のペットで寝ていたワイフも近くにジェット機が墜落したのかと思ったのだそうです。気がついたらペットに乗ったまま部屋の隅まですべっていきました。

周りは停電なので真暗、カーテンを開けると外も真暗、街灯は消えている。懐中電灯は？廊下に出ると本棚や衣裳部屋のドアが開いていて、アルバム、本などが全部落ちて通路をふさいでいるため通れない。また、他の部屋も棚やラックや飾りの石像などが倒れ、食器やテレビや置物、その他殆どのものが落下破損しており、室内全体がシェイクされたような状態でした。



### 横倒しになった阪神高速道路

(東灘区深江付近 平成7年1月18日撮影)

3階に住んでいる次男夫婦と一緒に屋外へで出してみると、これまたびっくり仰天しました。近所の木造の建物があちこちで倒壊し、近くの商店街は両側から倒壊してきた建物が道路をふさいで通れない。また市場は朝の早いうちから火を使うせいか、あちこちで火災が起きている。2軒隣の2階建ての家が倒壊して、1階で寝ていた年配の御主人が30センチメートル位開いている隙間から助けを求めている。また2階で寝ていた奥さんは階段がつぶれて降りられない。幸い夫婦2人とも無事でした。また、裏の全壊した家のガレキの下から、3日目に自衛隊員によって掘り出されたオバアさんはもうすでに死亡していた。

それから1週間たって電気がつき、テレビがうつり、又々びっくりしました。三宮のビルというビルはあちこちで倒壊し、傾き、ビルの中間階は上から圧縮されて消失する、道路は倒れ、高架式鉄道は陥落し、高速道路は数百メートルにわたって倒壊し、駅ビルは丸ごと全壊した。正にこの度の大地震は想像を絶するものであり、この世の恐ろしい「地震・カミナリ・オヤジ」という所の地震ではなかったかと思えます。

それから1ヶ月経った今でも尚あちこちに全半壊した建物が点在し、ところによってはガレキが道路にはみ出し、今日通れた道が翌日にはガレキの処理で通れない。そして多数の人達が今だに避難所で生活している。これでは廃墟同様の神戸は当分回復不能かと思いましたが、やはり「人を助けるのは、人しかいない」の如く、皆様一生懸命生活している。街中地震前にも負けにくいくらい活気があふれている。他府県から支援に来られた車が頻繁に目につきます。本当にありがたいことです。これなら近い将来に新しい神戸が復興できましょう。



**途切れた阪神高速道路**（横転した高速道路を除去整地した後 東灘区深江付近 平成7年1月29日撮影）

今では受診に来られる患者さんには病歴をきく前に、先ず「お家は大丈夫ですか、ご家族の皆様はご無事ですか」を先に尋ねてから、本人の病歴をとるようにしている。やはり皆様は疲れているようでも、シンはしっかりしていて、生きていく希望を持っております。今度の体験は自分の生涯にとって貴重なものであり、自分も活断層上にあった自宅、診療所（賃貸）、貸マンション、ともにかなりの損害を受けましたが、この細い体にムチを打って、今まで以上にがんばって生活していきたいと思えます。

（松山外科医院）

## 何だ これは

灘区 大林 利治

平成7年1月17日午前5時46分、ペットの上での私の言葉である。この2日程前に読んだ新聞の大きな見出しでは、京都と大阪を結ぶ線上のどこかで地震があるようなことを書いてあるのをチラッと見たような記憶があるが、夢にも予想だにできなかった震度7の大地震が神戸を襲うとは。5343人のいたたましい犠牲者と私を含めての何万人もの負傷者、そして物的、精神的な被害は関連都市、関連会社を巻き込んで相当なものになるであろうし、ズタズタのライフラインの下での復興への道も非常にきびしいものとなるだろう。高速道路の支柱は折れて高速道は落ちたり傾いており、電車のガードも落下して道をふさぎ、阪神間を結ぶJR・阪急・阪神電鉄もその破壊は激しく、今だに部分開通で不便この上なく、又国道2号線、43号線も特殊車両、連絡バス以外は通行禁止で、他の道の渋滞はすごいものである。

さて我が家であるが、4階建ての4階から3階にかけての屋根に2トンもの電柱が向こう側より倒れ、我が家がそれを支えている様子がNHKで放映されたい。1階の診療室の医療器具の破損も甚だしいが、2・3・4階と上になるほど内部の破損は大変で、今だに手がつけられていない。修理の時に片付けようとの魂胆であるし、今もって気分的に整理する気になれない。診療については地震後4日目に隣の薬局の戸がこじ開けられて、薬剤師さん、事務員が整理整頓し、医院の方も長男、看護婦さん、事務員さんと整理をしているとき、来院してきた患者さんすべて無償診療していたが、カルテを作っていたのが幸いにして、保険請求が出来ることになった。レントゲン室も患者さん達の努力で戸も開けられて非常にうれしかった。鉛の入った壁も破らずにすんだ。2月1日より正式に診療再開したが、交通事情を考えた午前診と午後診にしているが、周囲に住人のいる建物は少なく、死者の多く出た地区なので避難所に行ったり地方に移り住んでいる人が多く、近くの避難所には救護車の常駐で無料診療しているので、私のスタッフより患者の方が少ない日が多く、午前診のみの院内スタッフを解雇する医院もあるわけで、このままでは地域医療はどうなるのであろうか、深く危惧する毎日である。



私の見聞するところ、今まで顔を合わせても挨拶もしたこともなかった人達が声を掛け合い、一緒に水を運んだり、少ない食料を分け合い、互いに情報を交換したりしている。一方、避難所その他でのボランティアの人達の働きがすばらしい力を発揮し、それに感動した人々もその輪に加わり、絆が強くなり、私は希望するのであるが、この輪が日本全土に拡がり全世界に拡がると、世界から戦争がなくなり、ひょっとすると数多い宗教も一つになるかも知れない。

私はこの阪神・淡路島大地震の犠牲者に深い哀悼の意をこめて、毎日仏壇に手を合わせている。この大試練のダメージをのりこえて、優しい人の心をいたわる人情のある市民に立ち返れたらと心の底から念じています。

この予想だにできなかった大地震であるが、神戸市は余りにも大油断であった。ある新聞か週刊誌であったが、人口比でみると神戸市の貯水槽の数と量は東京に比べて数百分の一といったものでなく、もっとひどく少ないそうで、消火に水の出ないニュースが大きく報道された。公園法といったケチな法律にこだわる事なく公園をつくり、その底に堅牢な貯水槽を、またビルの地下のその地下に大貯水槽を作ったり、また河川より導水し、そこより又河川に流したり、地下水、下水の有効利用についても考えるべきで、地震のみでなくその他の災害対策についてもこの機会に見直す必要がある。

市条例で取得土地の20パーセントを安い値で召し取られるが、市はこの土地を道路幅の拡張や公園を造ることに精出さず、ゴルフ場やワイン城のために利用していたと、神戸の大学教授は新聞に書いていたが、本当にそうだったのだろうか。そうだとすると神戸市は大反省すべとであります。今、行政や学者の間で復興について色々と考えられていると思うが、この席に地域の人も参加すべきである。神戸沖空港の建設に前市長は誤ったので、関西空港に遅れをとり神戸市の躍進に足を引っ張ったのであるが、復興される神戸市には少なくとも数カ所のエアポートを作り、そこには多目的倉庫を付属させ、あらゆる分野の市職員の執務室やちょっとした野戦病院的な施設も必要であろう。未来都市としての神戸はリゾート都市であり、光ファイバー都市としての機能をもって、市民が安心して住めるし、快適な生活を保障すべきで、行政の責任者はその総力をあげて努力し完成してこそ、今までの防災についての怠慢のそしりをぬぐえるし、犠牲者への大きな償いになるのではなかろうか。私を含めて一人一人の力は弱いですが、今後は互いに手を取り合い心を強くし、人に優しい人の輪を少しでも大きくし、より広げてゆきたい。今、私は初心にもどり、残された日々を大切に生きたいし、今と同じく奉仕の心を持ち続けたいと思う毎日です。

神戸市の復興に微力ながら参画してゆき、5343人の犠牲者の御冥福をお祈りします。

<追記>

### 求めるのか、与えられるのか

5月4日午前5時53分に震度3の地震に驚かされて目覚めたが、1月17日とあまり変わらない時間であることに気づき、危惧するやらいろいろの思い出やらでもう眠れないので起き上がり、周囲を少し片付けた。数えてみると107日目である。我が家は震災3日目より被災による補強復興の為の工事に取りかかっているのだが、まだ工事は終了していない。5月の中旬には終了との事である。これは何か書いたのであるが、西側の家が地震の何ヶ月か前に穴を掘り工事中断していたため、西側のダメージ相当なもので、入口迄水道が通じたのに水道工事人数人が5日かかっても水道が4階にも上がらずに途中で漏水するし、排水管もやられているし、内部破壊も非常にひどい。何しろ我が家は3度から4度西に傾いているそうである。勿論施主も工務店からも何の挨拶もない。数日前より工事再開しているのにである。工事中断するのにそれなりの事情があったかも知れないが中断期間も余り長すぎた。常識上そのため隣接する家屋に地震以上の余分の影響を与えていると思う。そのためかどうかは分からないが、その北側の2軒の木造はきれいに潰れてしまっている。

この5月4日の午後5時42分頃にも2~3の震度の地震があったが、目覚めている時の4以下の地震には驚かなくなってしまうているが、最近あちこちに余りにも多くの地震が発生しているようで、まことに異常である。どこかに書いているが、我々の被災地に、もう被害をもたらす地震の

エネルギーはないそうで、六甲山から大阪方面や京都方面に向かったの間には十分なエネルギーを有する活断層はあるそうである。大震災にあった者に共通するストレスを旅行でまぎらすにも何処に行けば安心なのであろうか。地震以外に北九州、四国に水が欠乏しているし、と考えると海外旅行かなと思ってみたりもするが、地震でペットより放り出され、その後の東西、南北の横揺れに腰、膝の上に落ちてきたテレビ、ステレオ等に痛められたシコリを今もって引きずっている我が身に、海外旅行もよくよく考えてみなければならない。痛恨の極みである。

私が阪神淡路大震災後一番心配しているのは梅雨であり、大雨でなければ良いのにと思っている。それ迄に何度にも分けた小降りであれば相当安心である。一度に大降りすると今迄何度もあった地震の為に活断層のすき間の小砂利が一度に土石流となって、フラワーロードや住吉川の東岸を駆け廻るだろう。

もう一つ、テレビ、新聞、週刊誌をにぎわしているサリン事件、オーム真理教問題である。どのように解決するにしても被災地や被災している人々に対する救援は目にみえて少なくなるであろう。私の診療所も小さいながらも、被災者のために安心の灯をともして午前、午後の診療のため今迄通りのスタッフと今迄に殆ど近い状態に診断、治療器具を揃えて開院しているが、周囲は殆ど被災して住む人なく、わずか半壊家屋に細々と生活している人々や、他都市に避難した人々の月2回の受診者のみで、上げた手のおろしようもない。壊れたので診察机を購入して、引き出しの中身の整理とか読みおくれた本を読みながらも、医師会より与えられた業務をこなす毎日である。医療器具も修理できるものは修理し、壊れたものは購入したがまだ欲しいものがあるが、4ヶ月近く続く工事費の最終的なものをみなければ手がだせない。我が家は半壊と認定されたが、工事費をみる限り全壊ではないかと思いたくなる。先述の如く腰と左膝の痛みは鎮痛剤ではよくなり、少しずつ悪くなり痛みも強くなり、4月中旬よりの毎週3回の注射で痛みは殆どなくなったが、この間の運動不足で下半身の保持力がおとろえ、端見では歩く姿が心もとないらしいが、私は元気に働いているし、自分の天職以外にも精出して頑張っており、痛い、しんどいといった弱い言葉はこの何十年口にした事もない。

よく、求めよさらば与えられるという言葉聞く。被災市民が安心して働けるよう、私は私なりに震災当日より頑張ってきたつもりで、オーム教の報道でいわれているお布施ではないが、市民に貧者の一灯を捧げて自立と復興のお役に立ちたいと念ずる毎日であるし、更に今迄以上にお役に立つことが見つけられたら早速頑張ってみたい。本当の弱者は何も言わないし、報道もそこまで立ち入ってこないのではなにも知られていないから、本当の弱者を探し出すよう行政にお願いしたいし、我々も協力することに万全を期したい。行政の智慧と努力が不可欠である。私は今考えているのだが、オーム真理教の報道で得をしたのは、上九一色村のスーパーはよく売れ、テレビ、新聞、週刊誌は視聴率が上がったりよく売れたり又、問題の2信用組合である。損をしているのは大震災の被害者だけでなく、上九一色村のペンション、民宿であったりだが、報道には出てこないが一番おびえているのが多くある宗教界の各宗派であろう。国民の悩める人に対して門戸を開かず、手を差し出していない。近くの神社、寺院や教会その他種々の宗教の伝道所で、なん人の心悩める人を収容や教導にいか程努力したのか私は知らないし、寝食を共にして共々切磋琢磨修行したという話も場所も知らないのは私一人だけであろうか。ただただオーム真理教のようなお布施の強奪がないだけ救われる思いがする。

私を含めた被災者は力強く自立に向かって立ち上がり、運よく被災をまぬがれた人々の力を借りながら復興に向かえば、必ずや新しい考えのもとに造り上げられた希望にみちた都市の復興が与えられるのでなかろうか。私はそれを楽しみに、今後更に頑張っただけでいいと思います。

(5月10日記)  
(大林医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 阪神大震災の6日間

灘 区 金 澤 精 一



ぼつぼつ起きよかなとした時、突然“ドーン”という深い音に戦争か、バクダンか、続いて体が上下に廻り、ここで地震…私には長い時間に思えました。

病院で火は出ていないか、入院中の患者さんに何か起こっていないか、当直職員にケガなどないか、対応はできているか、頭の中は真っ白になり、早く病院へ行こうと車のところへ行くとシャッターが潰れ車は出せなくなり、息子に送るように言い、ただ気はあせるだけで、息子には“落ち着け、落ち着け”と言いながら病院に向かうが、街は薄暗いこともあったが映画の世界かなにか、初めてみるシーンである。崩れた家、道に出っ張った家、落ちた高架、ふとんを被った人、どう走ったか覚えていない。そんな時、黄色い煙が見え一層不安が増し、祈る思いであった。近づくにつれ黄色の煙が黒赤色に変わってきた。將軍通の下で進むことが難しくなり、ここで車をすて走った。病院に入ったのは6時40分頃だったと思う。

玄関には土をかぶって血を流している人、座りこんでいる人、倒れている人、だが皆な静かでした。その中に処置をしている当直医、当直看護婦、詰所看護婦の白い姿を見かけた。その一人から入院患者さん、職員の無事を聞かされ一安心した。あらためて確認するよう指示し、私はそのまま処置の手伝いにまわった。その間にも人は増え、院内には入れず屋外にも群がるようになった。

近くの職員に縫合セット、ケツテル、消毒薬を持ってくるよう指示したところ手術室のドアは開閉不能、各外来診察室は入れる状態ではない、薬品庫も入室は出来ないと聞かされ、やっと院内の状況がおぼろげながら分かった。その間にもぞくぞく続く被災者の処置にどう対応しようかと苦慮した。

9時過ぎに医師4名、看護婦8名、寮からの看護婦も勤務につき、レ線技師も2名、計19名が集まった。その頃にレ線技師に手術室、薬品倉庫、外来倉庫、各外来診察室のドアを開け、薬品、器機を何でもいいから出せるだけ出すように指示。パトカー、救急車のサイレンは鳴りっぱなし。同時にこの頃から被災者が自家用車でタタミにトイタにフトンに乗せられて運ばれてきた。空床は0の報告をうけ、その後はリハビリ室、ベットとベットの間、各階の廊下も人で埋まる。それでも間に合わず、屋外、車中で蘇生を行うようになり、死亡を確認するケースが多くなった。死亡確認も名前、住所をきくこともなく、確認した時間をつけるだけで、後日来院していただくこととした。

発生から4～5時間経過して、死亡の確認のケースがますます増えてきた。死亡を告げるとその場で泣き崩れる人、ただ呆然と立ちすくむ人、告げてもなおマッサージを続ける人、泥に汚れた頬、顔をさすり“ごめん、ごめん”と言葉をかける人。看護婦よりバイタルサインの報告を受け診



察をすませ、血管ルート確保、O2量、気管確保を依頼し院内へ運ぶケースもあった。その中に泥・土などによる汚れもなく寝たまの姿の幼子を診た。胸せまり児の顔に手を当てただけで言葉にはならず、時刻を告げることも出来なかった。この事は今も忘れられない。

その後、看護婦も増え35名が勤務についた午後4時すぎに、外来の廊下、リハビリ室、2階、3階に入院した被災患者さんの容態を診て廻ったが、多くの方は被災時の恐怖だけで状況は何も覚えていない。助かったことに感謝する人、“私が変わってれば”と泣く人、ここでもそれぞれの思いが出ていた。

午後5時過ぎに灯りがついて病室から拍手が起こり、私もこれで暖房が使えると一安心した。次に給食はどうなっているのか、委託会社とは連絡はとれているのか、何としても食べるものを届けてもらえるよう手配をお願いした。

一息ついたところで、医局で入院患者数、容態、治療方針、改善の可能性について話し合いがもたれた。被災患者約100名が入院され、症状の比較的軽い方は今の病室の現状を説明して明日避難所へ移っていただくよう了解を求めた。同時にこれからの外来治療機器のチェックが行われ、消毒をどうするかが問題になった。この時、松岡医師から煮沸消毒をとの提案があり、さっそく都賀川に大ナベを持ち出し、ガレキで火をおこし準備にかかった。その時思わぬ人の協力を得、無事終えることができた。

その後、9時頃に松岡医師より避難所を巡回する旨話があり、縫合処置もできるようにと看護婦も同行した。帰院は18日午後1時を過ぎ、様子を聞けばひどい状況で、明日は内科の先生も一緒に行くとのことであった。この時給食が届き、時間に関係なく直ちに配ることにした。医局、看護婦、レ線技師、全員帰宅する者もなく、思い思いに仮眠をとることにしたが、詰所からのコール、救急患者の搬送もあり、仮眠はとれなかったと思う。

時間が経って、搬送されてくる人の状態は当然のことながら衰弱が顕著で、人数の割には死亡者が多く感じられた。外来での処置で終わる被災者数はかなり少なくなっており、3名の医師が外来を受け持ち、後は病棟に上ることにした。

入院患者のうち、筋肉挫滅症候群、外傷性ショック、内蔵破裂の疑いなどが16名。治療をどうするか検討されたが、今この状態で治療の方法はなく、対症療法を行うだけ。医師にあせりの色が見え、看護婦はモニターをチェックしながら涙ぐみ、病室から帰ってくると泣きだす始末。私も“泣くな”と怒鳴りながら詰所を出ることが度々あった。18日夜遅く、受け入れ可能な病院がみつかったと報告を受けた。皆で安堵したが、次の心配は搬送はどうするのか、いつ搬送できるのか、間に合うのか。患者の容態は徐々にではあるが悪化の方向に進んでいるのがみえるだけに、皆のいらいらは大変なものであった。

19日早朝、病院と連絡がとれ自衛隊ヘリで搬送していただくことになり、主治医がヘリ基地に行き、医官と引き継ぎを済まし、8名が大阪に向かった。1名の患者については搬送中に急変もありうるということで、見合わせるかどうか話し合われたそうであるが、病院の現状を説明し了解を求めたと聞いた。

医師、看護婦に疲労が見え、お互いの言葉が少なくなっていたが、患者さんには元気づける言葉をかけているのを聞き、私が皆に“ありがとう”とお礼をいいたい気持ちになった。

19日には外来の処置にも時間的余裕が出来、また病棟にも少し落ち着きが出てきた。数人が手術室に入り、取り出せるものを持ち出し、機器の整理を始めたのがこの日ではなかったかと思う。給食もとにかく届いているし、特に問題もなく、昨日までの慌ただしさはなかった。医師の病棟での診察時間が長くなってきたようだった。しかし看護婦の疲労は目にも見えて判然としてきた。看護婦は各詰所、看護婦談話室で、医師は医局、会議室で3夜目の仮眠をとることにした。

20日朝、それまで気にしてなかった壁の亀裂が目立つように見え、廊下の床に段差が出てき

た。患者さんの移動を決断し、救急車の手配など消防署に相談に行った。レスキュー隊、機動隊、自衛隊の方々が駆けつけてくださり、またボランティアの協力もあり、まず病棟間での移動を行うこととし、短時間で終了した。同時に避難所にもお願いした。この時の様子を知った大阪の暁明館病院他2病院から患者引き受けの申し入れがあり、病院車で迎えに来ていただいた。一方、このことを聞いた建設会社の方が来院され、ロビーの支柱内亀裂(勇断破壊)が問題であると指摘され、本社より技師3名が来神、全体をチェックした結果、支柱4本が危険な状態で2、3階の中央棟の病室は使用しないほうが良いという結論が出された。医局、看護部関係者にその旨話し、数回にわたり善後策を話し合った。その結果、避難所にもお願いした患者さんのこともあり、約40名を他院に移ってもらうことに決め、私共は引き受けていただける病院をあたることにした。一方、一人一人の容態を報告してもらい、人選にかかった。また、本人、家族の同意も同時進行で始めた。22日午前10時頃、宝塚三田病院から連絡があり、快く引き受けていただくことになった。救急車、大型バスで迎えに来ていただき、午後5時すぎ、38名の患者さんの転院が無事終了した。地震発生後6日間、私にも色々なことがあったが、この時になって張り詰めていた何か切れたように思う。地震発生以来、多くの方から寄せられた励ましの言葉、激励の訪問、夜を徹して届けていただいた医薬品、医療品を始め、数多くの救援物資、ボランティアご支援などなどに、私共職員は勇気づけられ、この困難な状況をのりきれたと思う。紙面をお借りしまして、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。また区役所、保健所、福祉事務所、消防署、警察署、自衛隊の皆さんの一方ならぬご協力に深く感謝いたします。

最後になりましたが、今回の地震で気付いたこと。

1. 初期対応の遅れを言われているが、今回のことは対応できる限界以上のすごい地震であったと思う。
2. 救護体制について  
どこかで災害が発生し、我々は負傷者の受け入れ又は災害現場へ出動して救護活動を行う訓練は行っていたが、今回のような、我々も被害に合うことを想定した訓練は考えになかった。
3. 通信、連絡について  
今回のように広範囲で電話回線が不通になることは考えていなかった。  
警察・消防が核になる医療施設でのホットライン、区内・市内のみでなく近接する他市とのホットラインも必要に思えた。

今回の兵庫県南部地震で、不幸にもお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りいたします。

(金沢病院)

## 地震のあとで感じたこと

垂水区 小野三郎

肉体は緊張のあまり反射的に体をまるめて息を止めた。身動きのならぬのは頭から何の指令もやって来ず、ただ強い抑制が体に掛かって自由を奪ったからなのだろう。あわれな金縛りの姿をベットの中で、立て続けに跳ね上げていたに違いない。真っ暗闇の中で頭は何事が起こっているのか探ろうとはするのだが、正体の定かでない轟音と、格段の振動の激しさは恐怖をかき立て、直ぐに考える事を不可能にしてしまった。確かに半分死んだように布団の中につずくまって、ひたすら時間が過ぎていくのを願っていた。体の揺れが大分静まって来てから、これが地震かと自問し目を開いた。恐らく負け犬のように背を丸め尻を落とした格好で立ち上がったものだろう。自分の体に怪我の無いのは確かなようで、妻の方に声を掛けてみたが、やはり布団の中から怪我は無いとの返事、お互いに命の無事を確かめたのだが、心の震えは春先の船の汽笛のように尾を引いて続いた。

幸いに、前日入院患者は退院していたので、産婦、褥婦と新生児に対する心配はせずすむことが出来たのだが、翌日には分娩患者からの聞き合わせが続き、自院での入院分娩に対して万全の準備を整えて対応することは出来ぬと判断されたので、分娩予定日の差し迫った妊婦は、福西秀信医長に御無理をお願いし、国立神戸病院に収容して頂くべく手配し、紹介状を添えて転医させることが出来た。

当院では後に急造した増築部分のみが土台の損壊で本館から亀裂を生じて分離した。この部分に在った新生児室、リネン室等を、本館の病室を改造してこれに当て、規模を縮小してこれまでの業務を続けることとした。

当初の計画通り、順調に事は運び、3月の入院分娩者から取り扱えることとなり、2月末より分娩業務を再開することが出来た。

地震直後は電話の不通と交通の渋滞とにやはり遭遇し、分娩患者の対応には腐心させられたが、福西医長の御厚情には深く感謝する次第である。

地震直後は物を失った悲しみなんかより、生き延びられたことの方が遥かに有難いと感じられていて、もっと大変な目に会われた方達さえ静かに耐えられていたのは、其の思い故ではなかったかと思ったりもした。残ったものが瓦礫や残骸であってみれば、物への執着の意味の少なさを思わないではなかった。そしてこれを機会に、生きること其の事にもっと懸命でなければならぬと思う事頻りである。自分のやりたい事とか、やっておかねばならない事に集中し、その事を生きる上での喜びとして努力し、又心のゆとりを持ってやれるようにしたいと自分に言い聞かせている。

しかし、我々が仕事としている事を充分に行うには、やはりそのための場と医療器機が不可欠であることを改めて、大変良く思い知らされました。生きていくためには、なる程物への執着は物への感謝となるべきものであったのかと、つくづく考えさせられました。

実に甚大な損傷に見舞われた先生方の一日も早い復旧への努力が叶えられますことを切に祈るものであります。

空間ゆがみ凍結すビル傾斜  
魂を裂く衝撃に人の涸れ  
先のこと思はずに水仙括ける

頭から毛布にくるみ担ぎ出す  
寒菊を置き言葉なし手を合わす  
柩並べし境内や春の蝶  
生きていること噛み締める花の下  
葉桜の影明と暗人の上

(小野産婦人科医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 罹災者の1人として

兵庫区 森 本 祐二郎



♪春は名のための風の寒さや…例年と違って殊更に寒く感じる早春の開幕です。

衝撃、ショック、恐怖、茫然自失、余震に戦きながらも鳴り止まぬサイレン、ヘリコプターの音と空気の汚れ、やや少なくはなつた騒音に満ちた日常です。まだまだ街中は不安に満ちています。

本当に大変でございました。一瞬の天災が全てを変えてしまう一宝塚・尼崎・西宮・東灘方面を始め長田・須磨へと淡路を含め「アツ」と息を呑む光景とか人伝に聞いています。



### 落馬した (?)聖徳太子 (湊川公園)

亡くなられた方の無念を思う時お察しして余りあります。心からのご冥福をお祈りいたします。そして怪我をされた方々、お家を全焼、崩壊された方々に本当に心からお見舞いを申し上げます。どうか気を取り直され、明るい方向へとお考えを向けて頂きたく存じます。

私事にて恐縮ですが、借家の私の診療所は半壊、いずれ住む予定だった須磨の家は全壊、コンクリート及びレンガの壁は道路に迄ち、剥き出しに破壊されたその姿はもう表現出来ない惨状でした。唯ただ空白感、頭の中が白くなる…神戸の方々や罹災された方々全ての持つ思いではなかったかとも存じます。

直後暫くの静寂一立ち昇る煙、血まみれで通る人々、住み込みの娘さんを寮より外へ、そして玄関で避難していた間の出来事は刻々と変わっていきました。とりあえず隣の老人ホームへ。渡り廊下、地面の割れ、水道管の破裂に気付いたものの幸い殆どのお年寄りには被害もなく蒲団の上に座り自失?状態のようでした。「煙草を吸わないように！」ガスの匂いの中、心配した事でした。



### 思い出の生家も崩れました(須磨区桜木町)

ライフライン—今回私にとって新しく耳にした言葉の一つでした。私の家も今週から出始めたガスでやっと一息ついた気持ちになりました。久し振りに水貰い、お風呂もらいから解放されました。それにしても親戚の人々、知人、昔一緒に働いた人々からの救援物資の数々、そしてお見舞状や電話の数々、本当に嬉しく感じました。唯、他所での災害、北海道南西沖地震や鹿児島での風水害にもノンポリだった自分が恥ずかしく思います。今回のご厚意は胸の中に焼きつけておきます。

次第にマスコミの視点も時間が経過するにつれ変わってきたようです。罹災直後の特集号は今では殆ど売り切れている由。垣間見たTVの映像が眼に残ってはいます。それでもNHK、東京放送そして故郷のテレビ高知、罹災後の「在宅ケア」について又遺族のエピソードなどを紹介してほしいと来られました。10年間に亘る兵庫区医師会在宅ケア連絡会でも「地震の無い神戸」という前提に立っただけにコメントしようもなく、意を伝達するには余りにも災害については無知でした。在宅ケアの3要素「財源、マンパワー、住宅」などなど。それが今回、お年寄りに直撃した災害—そしてその共通点「古い家屋」「一人暮らし」そして「一階」。余りにもかけ離れた共通点をどう考えていくか、これから在宅ケアを勉強し実践していく上でも治に居て乱を忘れずを心せねばならないと痛感します。

今回も尚、罹災後の記事やエピソードが雑誌、新聞にも多く掲載されています。読んでいる内に、どうしても涙ぐむのは人々のご好意の余りにも感動的で暖かさに満ちていたためでしょう。そして涙脆い還暦の老人になったせいもありましょう。しかし何か今まで感じられなかった人々の暖かさを感じます。唯、それが新しい町作りの中に生きつづけますように祈らざるを得ません。

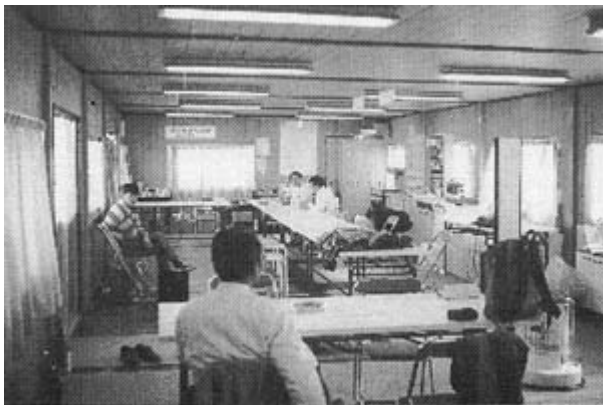


### 澄川先生と野田先生(澄川外科で)

今回は罹災後の立ち上がりが遅い、手順が悪いという多くの指摘もありました。しかし着々と復興はしています。しかし復旧ではなく、より暖かく、お年寄りや障害のある人々に思いやりのある神戸に新生してほしいものです。働く場所、住宅、港湾、地下鉄を含めた交通網、道路、全てに亘る被害をチェックし、それを次の災害防止策に生かしていく知恵がなければ又同じ災害を繰り返すことになりかねません。これには行政サイドにも参加する庶民の意欲も大切と感ず。

1月の下旬には私共兵庫区医師会在宅ケア連絡会第9回特別公開講座で「喪の途上にて」というご講演をされた野田正彰先生が松本憲一郎先生をお見舞いの後、歩いて突然に来られました。一緒に私の地域―湊川町、菊水町―や近くの避難所の神港高校、焼けただれた松本通、兵庫警察から下沢の澄川洋祐先生宅へ―恐怖の実態などをお伺いした後―連日徹夜で頑張っておられる兵庫区役所の内野勲区長さんをお訪ねしました。(神戸新聞にも書かれていたように)野田先生はその夜、次の事を歩きながら話されました。「地震は自分予測していたという学者もいるが許せない。学会の中で頑張っって主張し、市長や防災関係者にどう伝えたかが問題だ。」「建物がどう壊れたか検証すると共に、亡くなった方々の検証をきちんとする事が死者に対する最大の礼儀だ。即死が7割、圧死が9割と発表されたが、本当に助けようがなかったのか、救急車が遅れて死んだのか、個々のケースを調べてみる必要がある」「そして神戸の人々は危機を共にしたということで共同意識が高くなった。日頃の隣近所との関わり方が大切だ。人間の被災後の判断は先ず“立ち上がる気力” “財力”そして“社会的ネットワークの3つが基準だ。そして残されていく弱者―老人への救援対策が必要。人が大切にされる地域社会を心掛けるべきだ。」又、夜遅くまで少々傾いた家の中でのお話は心に残るものでした。

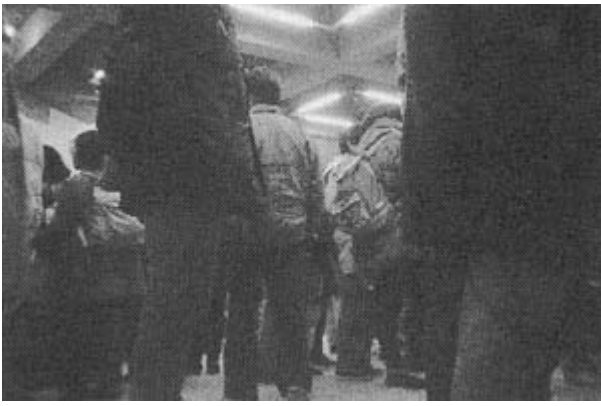
阪大の多田羅教授も来てくださいました。「在宅ケア連絡会続けなあきまへんで―」と深夜帰っていかれました。



### 兵庫区臨時健医相談センター

兵庫区臨時保健医療相談センターも災害対策本部・医・歯・薬、3師会の協力で出来ています。救護所の医療班の撤退後の開業医による巡回診療班も結成されつつあります。まず愛する神戸のために、そして障害のある人や貧している人々、そしてお年寄りが取り残されることのないように、自分達で出来るだけ「大きな声」を出し続けていきたいと念じています。

(菊水診療所)



## 震災ルック(区役所にて)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化 : 神戸大学附属図書館)



## 震源地が目の前に…

西 区 西 村 宏 明

突然の強烈な揺れで起こされた。何事が起こったかと思う間もなく、家中のあちこちで物の壊れる音。電気は消え、子供の部屋に行こうとした時にその地震は止まった。

暗闇の中で棚から落ちたペンライトが衝撃でスイッチが入り部屋の片隅で光っていたのが嬉しい、ラジオを探す。部屋、廊下は足の踏み場もない程物が落ちている。ラジオによると、なんと震源地は目の前ではないか！2階から島影が見えている淡路島とは驚いた。電気が回復しテレビで長田、兵庫を中継している。ビルや家屋の倒壊と大火災が発生している。診療所が気になりすぐ駆けつけたが、薬品棚やレントゲン機器は無事で被害は殆ど見られない。ホッとすると同時に長田、兵庫の先輩や同級生が気になるが、電話は全然通じない。

このような大震災時に最も重要なことは情報である。幸い地震発生数時間で電気が回復しテレビにより各地の状況が放送されたが、電話、ファックスが不通であったのが一番困った。医師会からの連絡や、遠くの親戚への連絡が出来ない。長田、兵庫から親戚を頼って老人達が避難してくるが、もちろん保険証、手帳はもっていない着の身着のままである。このような人に対してやや遅れて医師会からファックスが入り安心する。

水道、ガス、交通などいわゆるライフラインが止まると全く生活状態が変わってくる。交通渋滞、生活品の不足、医療面では抗生物質、解熱剤の不足（と問屋は言うが、このような非常時では“不足している”では済まされない）、入院施設の不足、透析患者の処置など。

自宅、診療所が崩壊して診療が出来ない先生方が多数おられると聞き、全く同情に耐えない。復興には“ゆとり”が大切だという人がいたが、全くその通りで、あせらずに…と祈らずには出来ない。

これまで阪神地区は呑気であった。地震など来るはずがないと思っていた。活断層、ライフラインなど、これまであまり聞きなれない言葉も出てきた。

それにしてもあまりにも大きく突然の大震災ではないか。

(西村医院)

## 大震災直後のできた事とできなかった事

中央区 西田 靖彦



平成7年1月17日早朝、突然の大音響と共に来た激しいベッドの揺れに気づき目覚めた。余りの激しさに、家がこのまま壊れるのではないかと、そのまま死んでしまうのではないかと考えるのに十分な程、長い時間揺れは続いたと思われた。

家族の無事を確かめ、倒れた家具や割れた食器類の片付けも程々に、「今日は車が混むかもしれない」程度の認識で午前6時30分過ぎに宝塚の自宅から神戸市中央区の診療所へと向かった。自宅付近は、水道管の破裂とか道路の亀裂はあるものの、街並みは保っているように見えた。(その後の調べで地盤の崩れや家屋の全壊も多数あったとのこと)普段通り、甲山を越えて芦屋へと向かったが、電線が切れ、道路を塞ぎ通行不可。しかたなく、仁川から西宮へ出て、171号線か2号線を通り神戸へ向かうことにした。途中、小林では家屋の倒壊がいたる所にあり、仁川の競馬場前の陸橋も半分は崩れている。新幹線のあの大きな橋脚は根元より折れ、線路も折れ曲がっていた。多くの人が食料品店とか公衆電話に列を作り、毛布を体に巻いて右往左往する人々、額を切った親子連れがタオルを巻いて道端に坐っておられたりと、異様な光景が次々と目に入ってきた。

その頃より車が多くなり、2号線ではほとんど動けない状態となっていた。43号線へ回るとあの阪神高速が横倒しになっており、まだ通行規制もできない状態で、ドライバーの判断で通っている状態であった。

途中でみるこの光景から、私自身の予想をはるかに越える規模の地震であり、大きな被害が淡路・阪神地区を襲っていることは十分理解できた。自動車ラジオは刻々と被害の状況を伝えており、淡路島を震源にする地震であれば、今見てきた西宮・芦屋・東灘の被害の状態からして中央区も更に大きな被害が出ているだろうと思われ、診療所がどうか、スタッフは無事か、患者さんは…と次から次へと心配は繰り返し増幅していったが、車は遅々として進まない。

午前11時30分、宝塚の自宅を出て5時間かかってやっと診療所にたどり着いた。患者さんもスタッフも誰もいない。中に入ってみると、薬品・カルテの散乱はあるものの、約1時間かけて独りで片付けられる程であった。それからすぐに予定していた往診に出たけど、診療所周辺の家屋の倒壊が多く、大安亭市場も壊滅状態であった。4名の方の往診はできたが2名の所在は不明であった。外来へ来られる独居老人の方とか患者さんの安否をたずねて歩いたが不明の方多く、人の集まる所へ聞いてまわり、避難所へ足を運んだ。

そこで多くの方と出会い、無事を確かめたり、再会を喜びあいもしたが、尚所在の判らない方が大部分であった。午後6時過ぎとなり、当日神戸市医師会急病診療所の出務に当たっていたので神戸市医師会へ行った。診療所より2時間かけて市医師会に着いたがシャッターは閉じており、中は暗く人の気配なく、本日は休みと判断し置手紙をして帰る。

状況の好転をみるまでは当面午前中のみ外来診療として、午後は患者さんの安否をたずねて周辺を歩いたり、避難所へ出向き不十分ながら医療活動を行った。

このように、休まずに震災後の初期医療活動が行えたのも、ライフラインは何一つなかったが(震災後1週間目に電気・水道が利用可となる)診療所が機能できる状態にあったこと、スタッフ全員が無事であり、長い通勤時間とか避難所生活の疲れをものともせず早期に揃ったこと、家族も私も無事だったこと、それと近隣周辺の方々の物心両面に渡る支援があったからこそできたものであって、一つ欠けてもできなかつたと痛感する。この間の行動の中で近隣の多くの地域住民の方々と同じ境遇の中で喜びも悲しみも共に感じあい共有できたことは、感動的な経験であった。このときほど医師という職業を選んで良かったと思ったことはないし、医師としてこれほど多くの人に喜ばれたこともなかつたように思った。

そのような毎日を繰り返しながら、あっという間に2週間が過ぎ、2月に入った頃には診療所の方で不自由な生活ながら何となくベースをつかめ、避難所も他府県からの医師団の派遣もあり一応の落ちつきを見せはじめた。

以上が今回の大地震において私がとった初期の行動であるが、今となつては、あれもしておけば、これもしておけばと数えあげればきりが無い。

その中の一つに一部負担金の問題がある。災害救助法が出ている時期と地区において、医療機関が患者に自己負担金を請求するのは適当でないとする考え方と、とても請求事務まで手が回らないとする現場の状況より、本院ではスタッフと真剣に話し合い、この際一部負担金は全額免除しようと考えて県医師会に震災4日目に一部負担金の取り扱いについて相談したが、平常通り行ってくださいとのことであった。今後検討するのではなく、平常通りという『平常』には、いささか失望した。今は非常時であり、非常時には非常時の常識があり、平常時と非常時の常識は自ずと異なつたものでもよいはずである。結局、独断で一部負担金の全額免除は実行できなかった。しかし今でも大変重要なことだという認識の点では変わっていない。

1. 同一医師が診療所と避難所で診療した場合、双方の患者さんで負担金の有無という差別を生み、誤解を招きやすい。
2. 派遣医師団と地元医師会との間に同一地区における二重の料金体系を生み問題を残す。
3. 1月21日県医師会からの通達は、あいまいな点が多く、医師も患者も十分に理解しているとは思えず、取り扱いによっては新たな誤解を生む可能性がある。
4. 請求事務はこのような時期には大変。
5. 地元商店街も災害時ということで普段より商品を安くサービスしている。医師だけが従来通りしては感情的シコリが残る可能性あり。
6. 地元医師会も被災者ではあるが、医療活動ができるのはまだ恵まれている。社会奉仕の姿勢を示すことは地域に生きる医師会として重要なことである。

地震の影響か、少々乱暴な意見ではあるが、被災民の中でもその上に病気にかかつたという、更に気の毒な方に接する我々としては、大切な認識ではないだろうか。非常時には現場から制度を作り、あとでそれを認めてもらうようにする勇気が私にあつてもよかつたと後悔している。

その他にも、できなかつたことを数え上げれば枚挙にいとまがない。できた事よりできなかつた事の方が今後の生活とか、来るかもしれない新しい災害に役立ち、より良い備えとなるだろう。

普段より開業医である我々が使っている「かかりつけ医」とか「家庭医」とかが空虚な言葉とならないように十分に反省しなければならないと思う。

神戸の復興は日々着実に前に進んでいる。今後も日常診療活動より、先に述べたことを念じつつ、少しでも早く元気で健康な神戸に戻るべく汗を流したいものである。

(西田医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 三度目の災害

垂水区 佐野 馨

1995年は、年頭から波瀾の幕開けとなった。

三が日を利用して、長く療養中の家内の母を湯村温泉に見舞った。11日、永眠。通夜のころから雪が降り、葬儀の日は豪雪になった。しかし診察は休まず、神戸と豊岡の間を往復した。

15、16日の連休1日目は消防署主催の凧揚げ大会に出席、2日目は誰にも邪魔されず久し振りの休日を過ごしたが、翌早朝あの大地震に襲われることになった。

目に見えない力に、押さえつけられ、放りあげられ、左右に揺さぶられ、5秒、10秒…家がつぶれるまで続くのかと思われた。

「津波は?」と、とっさにひらめき、ベッドに這いつくばりながら、海に面した2階の寝室から外に目をやると、数艘の漁船が全速力で岸に向かうのが見えた。電気はつかない。内も、外も真暗。舟が見えたのは、空が一瞬光ったからにちがいない。「余震がくるよ」と言ったまま、女房は布団にもぐりこんでしまった。まるで死んだふりをする昆虫…

われにかえて病院に電話した。M君が出た。入院患者は無事、建物も大きい被害はなさそう、電気は自家発電でついているが、水は出ないとのことだった。ハウスキーピング課のM君が当直だったことは幸せだった。

東灘のK病院で研修中の次男に電話したがつながらない。秋田日赤に出張中の長男と、京都の兄に、テレビをつけて震源地の場所と津波の危険について連絡してくれるよう頼んだが、長男は寝ぼけているようで反応に乏しい。兄は、「震源地は京都やでえー」と、まるで神戸は、京都の地震の余波をうけたかのような口ぶりである。首をかしげていると、折り返し「震源地は淡路島の北端付近で、津波の危険はないそうだ」と、テレビの情報を伝えてくれた。

懐中電灯をかざして家の中を見て歩く。2畳ばかりの書斎(コンピューターも)と地下室以外は、棚や天井からの落下物と、不安定な置物、食器類の破片で足の踏み場もない。漂う悪臭は、ウイスキーとブレンダーの洪水が原因だった。水道栓をひねると、はじめ勢いよく出た水は、やがてチョロチョロ、ついには一滴も出なくなった。ガスも出ない。

電池式のラジオがないので情報が全くつかめない。長田区居住の運転手には連絡がつかないし、いつもどおりの時間まで待つ余裕もなさそうだ。病院に迎えを頼む。

病院のホールは、椅子もソファも床までも外傷患者であふれ、昨夜の当直の先生と、整形外科のY先生、産婦人科のS先生、外科のL先生が、患者の間をぬって治療に当たっていた。しかし100名を超えたと思われる患者の記録は残されていない。医師・看護・当直日誌のいずれも、午前6時から9時頃まで空白のまま。カルテも、後日来院したもの以外はない。

病棟に向かう。異常はないようだ。厨房は…?朝食は…?入院患者と職員、合わせて200余の給食は、短期的には、近くのスーパーなどから食品を買いあつめ、可能な限り電熱器を利用し、中・長期的には、ガスボンベの調達と西播の給食業者に依頼することにした。

水は、幸いなことに(不思議なことに)院外薬局と看護婦寮まで来ていたので、透析液用のポリ容器で、厨房と院内各トイレまで運んだ。若干の滅菌水の蓄えもあり、断水が長期におよばぬ限り暖房はないが、産科の救急対応は可能と判断した。

一方、透析は当分不可能と思われた。東に受入れ可能の施設のあることは分かったが、被災地を抜けての搬送は困難である。あちこち当たった結果、公立神崎総合病院と多可郡黒田庄の大山

病院が引き受けてくださることになり、ミニバスをレントして毎日2班に分け、結局約10日間送迎することになった。

外傷患者が一段落すると、手の空いた職員が、ポツポツ事務所奥のテレビの前に集まってきた。倒壊した家々、高速道路、傾いたビル、様相を一変した繁華街。宮地病院や西市民病院の惨状が生々しく映し出される。市の中心部に火の手が上がる。死者の数が時々刻々増えていく。

外傷患者のあとは高熱の患者が来院しはじめ、内科医の出番となった。救急車(それも他府県・市の)で運ばれるものも多かった。地震発生後2、3日のうちに心筋梗塞4名を西神医療センターに転送した。クラッシュ症候群も1人みた。宮地病院からも搬送されてきた。

暖房のない病院は、深々と冷えわたる。地震でゆがんだ屋上の水槽が、近くの水道業者の好意で比較的早く復旧し、タンク車で水を上げ全館に給水、同時に重油を炊いて暖房の風が吹き出したときほど嬉しかったことはない。手術も可能となった。病院の機能はよみがえったのだ。8日目のことだった。

だが、今なお(3月5日現在)先生方の約3分の1が、家に帰っても店も市場もなく、子供たちの通学する学校もなく、交通機関の寸断のために病院で寝泊まりしている。家族と一緒に住める日は、遠い先のことになりそうである。

(佐野病院)

## 相信病院の現況

須磨区 高田 彰彦

当院は当地において昨年創立40周年を迎えました。中小病院の御他聞に漏れず、ここ10数年は慢性的赤字状態が続いておりましたが、昨年10月、努力の末、療養型病床群47床及び新看護(3.5:1)52床を取得(33床減床)、経営的にもやっと前途に光明が見え始めた矢先にこの震災に遭遇、建物は柱が7本破壊され、危険な状態となってしまいました。

地震当日の朝は、当院のドクター4名と駆けつけた開業医4名と共に、数えきれない程の外科治療及び心肺蘇生を行い、また次々運び込まれる死体、重傷者で病院ロビーが埋まる程でした。

2日目の昼すぎまでは救急車も全く機能せず、重傷者の転送先すら確保できず、骨折、外傷患者をロビーに20数名寝かしたまま、輸液と鎮痛剤のみにて凌いでおりました。2日目の夜、余震の度に建物が鳴動をはじめ、倒壊の危険を感じ、3日目の朝、機動隊を要請、近所の「神戸市立すま保育所」に70余名の患者を移動、以後2月20日まで、病院機能を維持、隣接した大黒小学校及び大田中学校の避難所の医師団と毎日ミーティングをもち、避難所のバックアップ病院として、夜間救急、入院治療に協力しておりました。また1月21日より外来診療も再開し、数十名の通院患者(平時は1日平均270名)を診ておりました。しかし、1週間経つと、入院患者の健康状態、特に治療食が作れないため、高齢者を中心に状態の悪化が懸念され出したため、全患者の転院を決意し、毎日数名ずつ転院開始し、2月9日に入院患者を0にいたしました。



**せん断破壊された外来診療所の柱**  
(平成7年6月15日撮影)

その後、市衛生局、県医務課より保育所の再開に協力してほしいと言われ、近所の中華レストラン跡(旧「三彩」)3階に移動(2月21日)、以来、同所にて外来診療のみを行っております。但し、病院としての外来点数は開業医よりも低く設定されているため、経済的にいつまで持ちこたえられるか、また、公的支援の額等も全く不明のため、病院を解散すべきか再建かの方針についても暗中模索の状態です。厚生関係の役人の中には「元来、神戸はベッドの過剰地域のため、病院の1つや2つ無くなっても問題ない」というようなことを発言した輩もいるようで、悔しい思いで一杯です。仮に公的支援が幾ばくか出たところで「病院近代化計画」の規定では、坪単価52万円で病

院を作れ、とのことらしく、実勢価格の約1/2程度で、相当の新規借り入れを実行しなくてはならず、まず現在の経理状態からみて不可能と言わざるを得ません。「誰のせいでもない。地震が悪いのだ」と、諦めざるを得ないのでしょうか。あの地震の日、医師としての義務感、責任感のみに働き動かされて3日間、只の一睡もせず頑張ったことだけは満足しております。

(相信病院:現高田クリニック)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化:神戸大学附属図書館)



## 地震当日、私は

東灘区 中村 功

ドーンという大音響となご、あたかもボートに乗っているかのように、フトンごと上下左右に揺れ、ガス爆発かと飛び起きた。電気をつけたがつかず、暗がりの中、外に飛び出ると、玄関に瓦の破片が落ち、近所で「地震、地震、だいじょうぶか」との声が聞こえ、あわてて自宅の外観及び室内を見た。家具がひっくり返り、至る所にガラスの破片がちらばっていたが、大きな被害はないように見えた。睡眠不足で頭はもうろうとしていたが、診療所のことが気になり、パジャマにトレーナー、毛糸のベストを着、車を出した。午前6時過ぎだったと思うが、道路はいたる所で陥凹、亀裂を生じ、壊れた電柱、家などで路は空いているのになかなか進めず、走れば走るほど被害の大きさに驚き、いつもならカーラジオを聞くのだが、つけるのも忘れて運転していた。特に深江で倒れた阪神高速道路を見た時は、夢ではないかと何回も何回も自分の頬をつねった。青木に午前7時30分頃着いたが、周囲の家は壊れ、焦げ臭かった。しかし診療所のマンションは残っていた。今から思えば、良く壊れないで残ったものだと思う。

玄関前には十数人の方が毛布にくるまり、プルプル震えながら立っていた。中でも小さな子供達は寒さと恐怖のためか、顔色なく、口唇は紫色、中に入ってもらおうとした時、「この付近のシャッター、いびつになって開きませんよ」との声がし、恐る恐る開くと、するすると抵抗無く上がった。良かった。入ってびっくり、中はめちゃくちゃ、おもちゃ箱をひっくり返したようであったが、まず被害の少なかった待合室に入ってもらった。暖房なく寒かった室内も、時間とともに人の温もりで暖かくなり、子供達の顔色も回復、私もやっと落ち着いた。

三々五々、家を失った人々が集まり、一つの避難所のようになった。

懐中電灯片手に奥に入ったが、コンピューター、視力計、スパイロメーター等が床に落ち、レントゲン操作台はずれ、モニターは宙ぶらりん、現像室は現像液でドロドロ、悪臭を放っていた。足の踏み場もないようで、どこから手をつけたら良いのか判らなかったが、まずガラス、現像液の処理から始めた。

患者さんが来院されても停電のため、陽の光で比較的明るい玄関で問診、処置、投薬をしたが、カルテが散乱しており、探して記載する余裕がなかった。

私のような内科町医者でも、今回、災害のトリアージは可能だったと思うが、治療の点で、縫合器具なく、出来た事といえば軽い外傷の消毒、止血、疼痛の軽減のみで、非常に歯がゆく思った。最も困ったのは、重症の方をどこに搬送すれば良いのか全く情報が入らず、一応床に休んでいただき、情報を得ようと試みた。公衆電話が使えると聞き、各病院と連絡するも通じず、唯一、東灘警察と話ができ、死者の処遇につき指示をあおいだ。持っていった10円玉が足りるのかなと思う位長い間待たされた上、1.勝手に診断書を書くな。2.死体を灘高に搬送せよ。3.搬送方法は自分で考えろ。との由。その後、死者が送られてきても、灘高に送るように指示したのみ。

後日、新聞によると、死亡診断書を30枚以上も書かれた開業医がおられたが、この地震で一枚も診断書を書いていないのは私位ではないだろうか。書くなと指示されたのだから。

昼過ぎ、宮地病院、甲南病院で診療が始まったことを知り、車で搬送した。

午後2時過ぎ、おにぎりとお茶の差し入れがあり、その時初めて、朝より何も口にしていないことに気付いたが、空腹感なく、2~3口位しか食べられなかった。

夕方、室内も暗く、寒くなり始め、殆どの方が知人宅、避難所等に移動を始められた。困った

のは、壊れた家より救出された寝たきりのお婆さんで、「私の主治医の〇〇先生と、福祉に連絡して、来てほしい」「のどが乾いた。牛乳が飲みたい」「しびんは?」「便がしたいので、おしめは?」等、わがまま一杯、私も周囲の方も振り回され、ついには「身寄りがないので、ここに置いてほしい」と。この診療所も余震が生じれば安全でないことを説明、避難所に移っていただいた。

気がつく和外は真暗、その後、夕食をどこで食べ、何をしたのか全く覚えていないが、建物崩壊の危険があるため、診療所前に停めた車の中で一夜を明かした。

振り返って思い出そうとしても、これ以上の事は覚えていなく、電話の重要性、情報不足による不安、人の親切、人のわがまま、医者としての無力さ、それに反して自然の力の強大さを、まざまざと痛感した1日であった。

(中村内科)

## やるで！！ がんばるで！！

灘 区 本 庄 昭

### PART-I 被災後の本庄医院

<午前5時46分:阪神大震災発生>

その時、私は熟睡しておりました。ドカン！！という上下動が突然おそい、自宅が摩耶山のふもとにある関係で、山崩れが起こったのかと思いました。しばらくの上下動、横揺れで地震と知り、生まれて初めて“死”ということが頭を横切ったのを覚えています。家族もビックリして飛び起きて来ており、お互い怪我のないことを確かめ、自宅より神戸市街を見ました。

6時頃にはすでに火災が東灘区、灘区内に発生しており、アツという間に7ヶ所、10ヶ所と数えられなくなり、特にJR六甲の周辺は数ヶ所の火災が大きな1つの火災となり、余震の恐怖におびえながらベランダからただ呆然と見ていました。停電のためテレビがつかず、地震の震源地、規模、被害の甚大さも見当がつかず「神戸は地震なし」という神話を信じていただけに、大阪かどこかが震源地で、かの地はこれ以上なのかと想像し背筋を寒くしていました。

<午前7時>

お茶だけを飲み、家内と歩いて診療所に行きました。阪急電車まで南下するまではあまり被害もなく、一部の家屋の屋根が落ちていたり、水道が破裂している程度でした。しかし、阪急を越えると様相が一変し、倒壊した家屋が散在し地震の大きさに驚きました。私の診療所も玄関周りを中心に破損し、ガスの臭いが充満していました。診療所の中は目茶苦茶でカルテは散乱し、あの重いオートクレープや薬品棚もすべて床に落下、ガラスの破片が飛び散り、足の踏み場もない有様でした。

<午前8時>

診療所に置いていたポータブルラジオで、淡路が震源地で神戸が最大被害地であろうというニュースを聞き、被災地のド真中にいる自分を見、「これは別の世界の事件で、本当の自分はここにおれへんのや」という気持ちでした。まるでテレビのシーンを見ている観客の気分で興奮している自分と覚めている自分が交互に入れ替わり「しっかりせな…」と自分で自分を叱咤したい気持ちでした。

<午前9時>

受付のスタッフ3名、ナース2名が各々御主人の付添いで来てくれました。(古くからいる他の2名のスタッフが来ず心配でしたが各々全壊、半壊で自宅を出られず、あとで無事であることが判りほっとしました。)とりあえず診療所の荒片付けをして、形だけ急患を診察できる準備をしました(終了午後5時)。

この間、同隣保の北田先生と近隣の診療所のチェックにまわり、普段の患者圏も巡回し患者さん達に声をかけてまわりましたが、この時点で3名の私の患者が帰らぬ人となっていました。

<午後5時>

JR六甲道のあたりが焼け野原だと知人が知らせてくれ、JR周辺のDrのチェックに家内と二人で

懐中電灯をつけ1軒1軒まわりました。最も心配した安藤先生は周囲が火災があったのにもかかわらず1軒だけ完全な姿でほっとし、“オーイ安ちゃん”と暗闇の中大声を出すと“オーイ”と返事が帰ってきて、思わず涙が出てきたことを思い出します。早や一日で感傷的になっていたのかもしれませんが。

次にまわった北端区医師会会長の自宅・医院は全壊しており「確かこのあたりやで」と電線の垂れている中捜しまわり、“北”一文字の看板を発見しギョッとしましたが、すぐ近くの方が“先生は大丈夫”と語ってくれほっとしたものでした。

<午後7時>

帰路、何か手助けをと考え、金沢病院、灘保健所をまわりました。検死の山を見にいったようなものです。

<午後9時>

ただ無言で診療所に帰りました。明日からの急患の受入れ準備のためです。朝よりコーヒー一杯とスタッフのくれたアメ玉1ケのためこの日初めて空腹感を感じ家内と二人で近くの稗田小学校へ行き、一枚の食パンと、水一杯をもらい二人で1ケの菓子パンを食べホッとしたものでした。

<1月18日(水)~22日(日)>

家内と二人で午前9時~午後2時頃まで外傷や発熱の急患を診ました。診察室はもうパニック的な忙しさで、カルテを作る間もなくメモ書きです。“お代は”と言われても計算などする時間ありませんから、処置、注射、投薬、全員無料の状態の超ボランティアでした。無論「災」の情報もありませんでした。

特に日曜日は王子スポーツセンター(収容1300名)、青陽養護学校(収容1000名)で「有病者は本庄医院が午後4時までやっている」という放送をしたため午後5時頃までの連続診療でホトホトゲンナリと疲れてしまいました。

<1月23日(月)>

ナースの一人が疎開先の鈴蘭台から家族を残して出勤してくれ、受付スタッフ二名も応援に来てくれ、その上、電気までもつき、玄関のシャッターの開閉も出来るようになり、暖房も入り、スキー用のジャケットを着たままの診察もオサラバ。スタッフがそろっただけで何とも気分がリラックスしたものです。

この頃より外傷より呼吸器疾患が猛烈に増え、抗生剤のストックが心配になりかけたものでした。

<2月20日(月)>

スタッフ全員集合可能となり、この日より従来の診療体制です。震災後、約1ヶ月振りの夜間診のスタートで気分も新たになっていますが、相変わらず私を含め、スタッフ全員私服のままでした。白衣の制服にもどったのは3月1日でした。

<2月24日(金)>

水が出ました。何と有難いことか。震災後より感染性胃腸炎の患者が多く、嘔吐、下痢のため“禁使用”のトイレも汚れ、診察後のトイレの掃除の水確保に苦労したことが嘘のようです。水の思い出としては1月18日の被災後診療第1日目にトイレ用の汚れを近所の方にもらったバケツ一杯の水で、苦労しながらトイレ掃除をしたことが臭い思い出です。

<3月6日(月)>

今この文章を書いています。レセプトも最後のおいこみですが「災」の多いこと。70パーセントぐらいでしょうか。被災後の診療での嬉しかったことはいくつもありますが、その中の一つ二つを披露してみます。

1. “先生の薬しか合わへんで、やっぱり避難先から帰ってきました”という患者の言葉
2. 「被災直後から先生はよー頑張ってくれたね。そやから私も頑張るネ」という全壊の人の言葉
3. 何も言わず顔を見るなり涙を流して「元気でなにより」といって、手を握ってくれたお年寄りの温かさ

私の診療所の日記を参考にいろいろと書きましたが、被災後50日経った今、早かった50日でもあり、夢みての50日でもあり、これが無我夢中の50日ともいえるのかもかもしれません。



**灘区医師会救護対策委員会での本庄**

## **PART – II**

### **灘区医師会被災後85日間の記録**

#### **－灘区医師会救護対策委員会の活動を中心として－**

「神戸に地震はない」という神話に生きていた私。前日の1月16日は、テニスC級コーチ講習会で「テニスとスポーツ医学」の講演をし、その後仲間と一杯飲みグッスリ睡っていました。

1月17日午前5時46分、未曾有のあの阪神大震災。この阪神大震災により灘区医師会として大切な2名を失いました。田所 順先生と事務の藤原栄子さんです。心からご冥福をお祈り申し上げます。また診療所の被害は全会員がうけました。全焼1件、全壊51件、半壊39件、部分損壊70件合計161医療機関です(震災時医療機関数161)。この数字は県下郡市区医師会では最大のものとなっています。心よりお見舞い申し上げます。

この原稿は被災後の灘区医師会の活動を灘区医師会救護対策委員会の1メンバーとしての立場で書いてみたいと思います。

阪神大震災により灘区医師会活動として最も大きな痛手は事務の藤原栄子さんの死です。被災後区医としての立ち上がりは1週間遅れたのは被災直後に彼女がこの世に居なかったことが大きくひびいていると思い、今さらに彼女の区医における大きな働きに感謝せざるをえません。灘区医師会救護対策委員会と名は大きくつけられていますが、発足当時は藤原さんの代行に迫られたことばかりでした。

さて、被災後8日目に理事会が開催されました。この時区医として医療ボランティア等の活動を

踏まえ、救護対策委員会が設置されました。メンバーは若くて元気なものとのことで中井副会長、安藤、川島、中迫、東川、本庄の各理事が選ばれました(奇くも野球部のメンバー)。

その日よりこの会の目的を(1)区医内：特に区会員への対応、(2)区医外:特に避難者への対応を2本柱とすることに決め活動をスタートしました。



### 灘区医師会救護対策委員会

左より 東川後昭先生、中迫博英先生、中井 潔先生  
安藤嗣庭先生、川島吉永先生、本庄 昭先生

1、2月中は会員への対応として1.避難された会員の消息とその連絡網の整理、2.被災状況の把握、3.オープン医療機関とその診療時間の把握、4.「災」やレセプト提出などの緊急性の必要とする書類の配付などを主眼として連日、休日を返上して医師会に詰めました。

この内最も苦労したことは避難された会員の消息の追求で、安藤先生、東川先生が大変な努力され、連絡不可能会員数1月26日:44名、1月31日:18名、2月3日:1名と頑張ってくれました。

これらの1.~4.はFAX網が完備しておれば容易なことですが被災直後のFAX不可能医療機関44件は作業を大変に困難にし、三星堂・日商・シンエーの卸商の協力で可能となり感謝しています。

2.の「オープン医療機関その診療時間のチェックは3月31日に「診療情報-NO.16-」を出し終了しましたが、この情報を各避難所、救護所へ配付したり、各県外医療ボランティアチームに配付し続けたことは、地元医師会の立ち直る姿を区民にも知らせることができた貴重な仕事と考えています。

一方、区医外:特に避難者の対応については、1月27日に保健所とコンタクトし「区医としてボランティア活動する地点を指示していただき、区医として動く用意がある」と申し入れましたが、「区内の各避難所には県外医療ボランティアが既に活動しているので、灘区医師会は早く立ち直り、可及的に従来の、医療体制になるよう努力してほしいとのことで、1~2月はサイドから県外医療ボランティアの手助けにとオープン医療機関情報等を修正してはくりかえし流しました。

1月30日保健所よりインフルエンザワクチン接種を医師会で実施してほしいとの要望あり、区医として初めてのボランティア活動でもあり、問題が出ないように準備し2月3日(金)、4日(土)、6日(月)、7日(火)の4日間区医会館3Fで実施しました。このワクチン実施には診療所・自宅全壊された渡邊(博)先生が応援に3日間も来ていただき渡邊先生の“Fight”に委員皆“ゴツツイナー”と驚き“アカンワー、ドナイショー”とグチル先生を見ては、“あの先生は、あないなこと言うてはるけど仮診療所を近々建てはるでー”と言っていたのを思い出します(仮診療所は3月22日オープン、おめでとうございます)。また、会員の高橋先生も気安く応援していただきありがとうございました。

2月6日、被災後20日目の避難者の疾病状況を見、被災の急性期が過ぎたと判断し、委員会で「県外医療ボランティア撤退時の区医の対応」について中井副会長を中心に討論がスタートしました。県外チームは各県の命令で兵庫県に入り、灘保健所の要請で区内各救護所に定点、巡回医療活動をしているわけですから、区医としての対応も行政と常にコンタクトが必要となります。丁度この日の夜、神戸中央市民病院より灘保健所に来られた大倉先生より私の自宅にTELが入り、大倉先生の考え方を十分に聞くことが出来、区医と保健所、区医と県外医療ボランティアチームの接点に大倉先生に立ってもらい、事をうまく運べるようお願いし、4月上旬まで大変なご協力をいただきました。

県外医療ボランティア撤退に際しての区医の対応の試案は2月9日に出来、その骨子は第20回理事会で承認され、試案の肉付け作業に入りました。さらに保健所の意見も聞き灘方式No.1-1は、2月16日の第21回理事会で承認され2月20日より実施されました。前後しますが2月18日にはA、B地区の巡回に関する会員の全体会議を開催し、灘方式の理解をお願い致しました(53名の巡回チーム)。2月28日には神戸高校に入っていた福岡チームがまず撤退し、3月5日までにA、B地区の10救護所の内6ヶ所の県外チームも撤退し、医師会巡回チームが本格的に活動をスタートいたしました。

各救護所の夜間救護対応は、医師会巡回チームが入るまでは個々の県外医療ボランティアチームが対応していましたが、そのチームが撤退することになり空白となります。そこで金沢副会長にお願いし、入院可能な区内6病院に全て二次救急体制をとってもらうようお願いし、了承していただいたことはこの灘方式がスムーズに実行された一因でもあります。

医師会巡回チームがスタートし、避難所・県外医療ボランティアチームの間で何かと問題が発生しました。そこで2月21日より「医師会巡回チーム・リーダー会」を定期的で開催いたしました。又、このリーダー会でどうしても行政に動いてもらいたいことが出ますので「医師会巡回に関する保健所との連絡会議」も開催するようになりました。

第23回理事会(3月2日)で浜田公園の自衛隊が3月5日で撤退するため、それに合わせたC地区での医師会巡回が了承され、委員会での試案作りに入りました。C地点での住民数をチェックしたところ43号線より南では住民約8,000名に対し大野先生の診療所があるのみで、A・B地区のように地元医師会の受け皿も充分でなく、この案作りは苦労しました。

委員会で作った試案No.2-1をもとに神大医療チーム(第4内科:千葉教授、整形外科:水野教授)と協議をくりかえし、保健所でも検討してもらい3月8日第24回理事会で灘方式No.2-1は承認されました。8月9日、C地区巡回チームとA・B地区のリーダーの合同会を開催し、3月10日よりC地区の灘小学校で医師会巡回チームは活動をスタートしました。3月13日、15日にはC地区の巡回チームは全て動き、A・B・C地区で区医会員約80名の巡回チームが動くこととなりました。尚、眼科医、精神科医はそれぞれの医会で巡回していますので、これらA・B・Cチームには属していませんが、その数は約10名です。被災により、A会員1名死去、被災後病死されたA会員1名、退会予定のA会員2名のため、3月12日の時点での診療所のA会員数153名となり、その内の約90名の会員の協力でこれら医師会巡回チームが構成され活動したことになります。

特記すべきことは金沢副会長、大谷副会長のお世話で、灘区病院群チーム(金沢病院、六甲病院、海星病院、昭生病院、吉田アーデント病院、中井病院)が発足し、周辺オープン医療機関の少ない西灘小学校の巡回を担当してくれたことです。まさに病診連携の姿が、ここにあるように考えています。

3月18日に第14回灘区救護班連絡会議があり、灘区の被災後の医療が県外ボランティアチームより地元医師会に円滑に移行したことを確認いたしました。この会は県外医療ボランティアチーム、保健所、薬剤師会、歯科医師会、医師会で構成され、被災者医療の横の連絡をとっていた会

で、1月25日より開催され、被災直後は3日に1度、2月下旬よりは5日に1度開催されていたのですが、県外医療ボランティアチームのスムーズな撤回が実現してきたため、この日をもって会を閉じています。

3月27日の第4回医師会巡回チーム・リーダー会では医師会巡回チームの撤退について話し合われ、A地区では3月下旬、B・C地区では4月上旬で撤退できるよう努力することになりました。医師会巡回チーム撤退後はナースが2名約1～2週間は定点とし、その後は巡回することが大倉医師の努力で実現しました。この頃になりますと、救護所周辺の医療機関のオープン数が増し、特にトラブルもなく灘方式は実行されました。この時点でのオープン医療機関は診療所128/153、病院8/8と計81パーセントとなっていました。

4月10日第6回医師会巡回チーム・リーダー会で稗田小学校以外の14ヶ所で巡回チームの撤退は終了しています。トラブル無き撤退の最重点は救護施設の長、避難住民の代表者、保健所、医師会チームの4者の話し合いを充分にし、4者合意で撤退をしてきたことと思います。又、不安のある救護所では、医師会巡回チーム撤退と共にそのチームのメンバーによる24時間オンコールの電話対応になったことも重要な点と考えています。

4月12日、新年度としての第1回理事会が開催され、灘区の復興状況より灘区医師会救護対策委員会の会務は終了したと判断され、解散に至りました。

以上、被災後の灘区医師会の活動を灘区医師会救護対策委員会の活動を中心に記しました。6月9日時点での区内の医療機関数は156で震災前より5医療機関減少し、震災時医療機関161は、全壊52、半壊39、計91と被災の実態はし県下郡市区別では最大で、更に未だ開院されていないもの19と最多数となっています。

一方、各医療機関は頑張って何とか修復し開院したものの、周囲の住民は区外の仮設住宅に多数移動してしまい、経済的にも多々問題が出ています。今後神戸市の防災都市を目指した都市計画の中に医師会の意見が反映され、救急医療、地区医療も十分に考えられた新しい街作りに期待したいものと考えています。

最後に、震災という考えてもみなかった天災を通じ、共に貴重な体験をし、共に苦しい時期を励ましながら素晴らしいチームワークで頑張ってきた灘区医師会員、特に救護対策委員会の中井潔先生、安藤嗣彦先生、川島吉永先生、中迫博英先生、東川俊昭先生又、中央市民病院の大倉宗悦先生に心よりエールを送り感謝いたします。

(本庄医院)



## 為さざると遅疑するとは

中央区 横山 宣男



本文は主として全国の同窓生へのお見舞いに対する謝辞として記したものである

前略御免下さい。先日（1月17日）の阪神大震災に際しましては早速にお見舞いのお電話やお便りいただき、誠に有難うございました。人の情の温もりを全身でお受けした事、重ねてお礼申し上げます。私は自宅（中央区北野町、鉄筋二階建、木造二階建増築、別棟に長男夫婦の地下鉄筋車庫、地上木造二階建）と診療所（中央区旭通、鉄筋五階建の一、二階使用、三階以上は貸マンション）が別ですが、地震様の通り道と少し離れた所では、可成りの差がある事を知りました。之は全く運命としか言いようがありません。自宅は地震時は激しく揺れましたが、物損としてはグラス、美術品に若干の損害と建物に数ヶ所亀裂が入った程度でしたが、診療所では受付のカルテ棚はひっくり返り、カルテは平成六年分と七年のカルテが散乱し、診察室では診察机（1.6×1メートル位両袖桜の木の可成り重い）が北へ40センチメートル程度移動し、70種位の注射液の収納ケース、100冊位の書籍棚はひっくり返り、水銀式自動血圧計は床に落ち、消毒用の手洗いはひっくり返り、足の踏み場もない程でした。レントゲン室では透視台（非常に重い）が15度位づれ、暗室の自動現像機も液はこぼれ、25度位づれており心電計や超音波等台の上にある機器のうち車輪のストッパーを掛けてなかったものは自由に室内を動いたらしく被害はなかったのですが、治療室にあった低周波二台のうち、ストッパーを掛けていた分はひっくり返っていました。事務室のコンピューターもストッパーを掛けてないのは助かりました。それらの整理に約三日かかりました。壁には亀裂が数十ヶ所入りしましたが、柱には異常なく当局の検査でビル本体を含め「適」マークを受けました。所が一昨年新築した別棟の薬局は隣のレンガ造り三階建の古いビルの全壊で見事に押し潰され一瞬茫然としました。医薬品は？ コンピューターは？ 数種類の検査器機は？ その他重要書類は？ と頭の中をいろんな事が駆け巡りましたが、その時ふと作戦要務令の一節が頭に浮びました。「為さざると遅疑するとは指揮官の最も戒むべき所とす。是此の両者の軍隊を危殆に陥らしむる事。その方法を誤れるよりも更に甚だしきものあればなり」よし負けてたまるか！！と妻と息子と嫁、男性の事務員、近所の男性二人を叱咤激励し、危険な所は先づ私が入り四日かかってすべての物品を旭ビルに移転させ、1月23日より（応急診療は18日より）診療再開への道筋を立てました。再開後の23日、27日、30日は従業員も確保出来ず大混乱しましたが、終戦時の混乱を体験していますので、大して苦にはなりません。更に医師会の役員をしている関係で避難所への訪問にも出務せねばならず、試練は次々と与えられるものですね。此の際地震列島に住まれる皆様に今回の災害の私の実体験を若干記し参考に供したいと存じます。



## 事業所が倒れ呆然としている従業員

### A. 地震と建物

1.地震は最初強烈なのが15秒位続いたと思います。此の時はジットして床の中におり隣室におる妻に大声で「地震だ！！服装を整えて庭に出るぞ」と叫びました。下着、パジャマ、ガウン、靴下をはいている時二回目の揺れが来ました。妻と一緒に庭に出て、長男の家の戸をたたきましたら、長男は青森県八戸の病院に出張中何回も地震に遭っており「こんな時は家の中が安全だ」と案外落着いているので、私もそんなもんかなあと又家にもどりました。それから大小何回も揺れましたがぼつぼつ夜も明け携帯ラジオをつけるとなかなかひどい様子を伝えておりました。北野から旭通りに行く間、家屋倒壊等で道は不通個所が多く“これはひどいぞ”と実感しました。

2.家屋は木造と鉄筋で多少の差はありますが、それより建築後の年数に可成り左右されます。（建築基準法は時折改正され新しい程きびしくなる）一度皆さんの住宅の耐震性をチェックされた方がよろしいでしょう。

3.総じて瓦屋根等上が重いものは壊れやすく（白蟻の害を解く人有り）、スレート葺トタン葺きは案外良い様です。但し風水害についてはわかりません。部屋の中でもタンスの上に重いものを置いておくのは危険です。それらの下敷で死んだ人も2～3聞きました。



一階が崩壊し、二階部分が一階になり診療所に97センチメートル(1ヶ月后87センチメートルになった)迫った隣家の惨状。南北にとめていたスクーターは倒れ、東西に固定したスクーターは見事に倒れた。

## B. 地震後の一週間

1.地震後は停電、電話不通が殆ど同時に来ました。ガスは間もなく停止しましたが、水道は30分位出ていました。新しいゴミ袋を三重にしたものに水を貯めました。後日大層役立ちました。  
2.復旧の順は電気が一番早く2~3日、電話がその次で3~4日、自衛隊の給水は初日からあった様ですが、継続的給水態勢は3日目頃からでした。水道の復旧は可成り地域差があり北野では一週間後から出ましたが、診療所は未だ出ません。水は飲料水よりトイレ用に大量必要な事もお忘れなく。風呂水は常日頃から貯めておく事が肝要です。ガスは最もおそく北野も旭通りも未だ出ません。風呂はガスと水が必要条件ですが、今の所普通なら入れませんが、心安いホテルのおかげで三日に一回位入っております。罰が当たらねばと思います。(避難所では二~三週目より簡易入浴が可能な様です)  
3.公共機関の救援活動は3日目頃から先づ乾パン、味付パン、即席ラーメン、お菓子類ついで毛布一人三枚が支給された様です。1週位たつと下着類トレーニングシャツ等が配給された様ですが、欲張りもおつたらしく不平の声も耳にしました。子曰「乏しきを憂えず等しからざるを憂う」という漢文が思い出されました。

## C. 非常時の備え

1.家族の数だけリュックサックを用意し非常食糧は各人4日分、水は大人一日2リットルとしてボトル4本分、下着、タオル二本(一つはマスク代り)、チリ紙、チュウインガム、チョコレート等と鍋とアルミホイル、スプーンと竹の箸等、更に一家の責任者は懐中電灯、携帯ラジオ、ロープ、シート、ビニール袋、マッチ、ナイフ、笛、マジックベン、ノート、印かん、銭は二万円位(100円と10円は必要)で毛布があれば最高です。貯金通帳等については各人智恵の出し所でしょう。  
2.道路事情は極端に悪化します。スクーターは最高ですが、自転車が割に役立ちます。その他乳母車も水の運搬によろしい。  
3.最後に「信ずる者は自分だけ」との信念を持つ事は大切ですが、常日頃から近所、友人との人間関係が大切です。姫路の友人から救援物資のダンボール箱2個、カセットガスコンロ、水をポリ缶5個等の差入れには涙が出る程嬉しかったです。「情は人の為ならず」(二面性の格言ですが)の一面が実感出来た震災でした。兵庫、長田地区等火災の発生した所では更にひどかった様ですが、中央区はまだ火災が少なかつただけ幸せとせねばなりません。神に感謝しつつ思いつくままに取り留め

ない事を書きましたが、皆様から寄せられた御好意に感謝しつつ一先づ擱筆します。  
委細は再会時の横山節で

完

平成7年2月20日（震災1ヶ月を経て）

追伸:北野のガスの復旧は2月20日、旭通りの水は2月24日、旭通りのガスは3月20日頃でした。

(旭診療所)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 阪神大震災に被災して

東灘区 中島 泰三

正月休み以来、3休診明けの明日は忙しい1日になるだろうと、漢方煎薬の予製剤をたっぷり作り準備万端整え、風呂嫌いの私が入浴後1時過ぎに就寝した。寝起きの悪い私が跳び起き、無我夢中で子供部屋のドアを開こうとするも開かない。ベランダの方へ回り、ガラス戸を開こうとしたが鍵がかかっているのに気付く、大声で呼び、ノックし一瞬ガラスを割ろうかと思っている間に返答があり、ガラス戸が開いた。本棚などが倒れ、室内はメチャクチャである。大急ぎで着替え、懐中電灯、ローソクをつけ、携帯ラジオをつけ、道路に出たりし、やっと我に返り時計を見たら6時4分であった。間もなく電気が通り、TVをつけるも映らず、故障?我家の一番古い2階の寝室に置いているTVがピンボケで二重三重に影がついて映る。転倒しアンテナがはずれたのかと付け替え、コードをある位置にすると民間放送が2~3チャンネル比較的シャープに映る。20~30年前によく経験したことを思い出した。よく検討してみると、未来都市芦屋シーサイドタウンは有線で共同アンテナ、ケーブルTV、衛星放送が入っている。ご近所では、芦屋市の地震前の催物案内、大型ゴミの日などの情報しか入らない。TVでは地震情報は観られなかった。共同アンテナが破損していたのであり、我家の2階の古いTVはアンテナなしでなんとか映った。このような状態が4~5日間続いた。7時過ぎ須磨区白川台に住んでいる従業員から電話があり、安否の確認と少し遅刻するかも知れないが出来るだけ早く行くとの由。その後地震で早く起こされ、もうひと寝入りしようと思えばTVを寝そべて観たり、北側と西側に煙が立ち上っているのを観たり、道路に出て液状化現象というものを知ったり、我が家を見回し少し傾いているのを発見したりして落ち着かない時が過ぎた。先程の従業員に出勤しなくてよいと電話するも通ぜず。公園の公衆電話からもかからず、見づらいTVのチャンネルを回して時が過ぎ、断片的にだんだん被害の大きさが解り、いつもの出勤時間の8時40分になった。こんな状態なら患者も来ないだろう残念だ。と言うのは、中島医院はJR住吉駅前にあり交通機関に乗って来る患者が95パーセント以上もあり、歩いて来院する患者は5パーセントにもならない。



薬局「薬品制より殆ど落下散乱、生薬分包器傾斜、工キス剤分包器変位」（平成7年1月18日撮影）



## 診療室「後方の本棚転倒、ベット枕変位」

(平成7年1月18日撮影)

午前11時頃、診療所が気掛かりで、妻といつもの抜け道コースを通ろうとしたところ、電柱が倒れ、お屋敷が倒壊し、白壁の土蔵がガレキの山となり、道をふさいでいた。地震後有名になった芦屋川西側の川西町、津知町の廃墟は、煙あるいは土煙が鎮まりつつあり、先程戦闘が終わったばかりのような異様な静けさの光影を呈していた。人々は所々寒空の中茫然と立ちすくみ、いつもの見慣れた光影は見当たらなかった。2号線の交叉点に出ると、信号も作動せず一目で大渋滞と解り、大急ぎでUターンして芦屋シーサイドタウンに戻った。電話ボックスに行列があるので、30~40分並び、妻の実家の栃木県に手短かに話し、親類、知人、アメリカの娘の留学先に無事であることの伝言を乞うた。話しは尽きないので省略。

地震第2日目。7階建ビルの2階の診療所に初めて行く。入口、階段、コンクリート塊落下、山積、壁亀裂、鉄筋露出断裂、停電、自動ドア開閉困難、以後開閉に各80分程度要す。電子ロック作動せず、室内メチャクチャ、間仕切ドア2ヶ所開かず。間仕切変位。電話機、FAX含めて5台ありそのうち3台埋没して定位置に戻すこと不可能。

第4日目(1/20)歩行途中よりタクシーにて東灘区医師会に行く。その後診療所へ。時が経つにつれ被害の大きさを実感する。当分診療所再開は無理と判断する。大阪、京都辺りでアルバイトでも、いっそ中国にでもこの機会に行こうか…。

第8日目(1/24)夕方停電回復する。電話が掛かってくるようになる。安否の問合わせと見舞激励、患者より早く診療を再開してほしいと期待される。おもしろかったのは、新聞の死亡欄に私の名前が載っていないと安心して、患者の命が助かったと言ってくれたことです。急に元気が湧く、整理に励む。また反面電話の応対に忙しく、整理に手が付かず。留守番電話のマニュアルを調べやと設定する。区医師会よりFAX初めて入る。嬉しかった。

第9日目(1/25)昨日設定の留守番19件あり2~3時間でFullマーク。郵便物初めて到着。東京1月16日消印の年賀状と共に。

第10日目(1/26)自動ドア修理、従業員1人初めて2~3時間出勤。

第12日目(1/28)阪神甲子園まで自転車で行き、大阪駅近くのホテル泊。ツインベットに3人泊。12日振りで入浴、翌日散髪。

第14日目(1/30)診療開始。

第19日目(2/4)水道まだ出ない。下水排水管、マンホール所々で破損のため、中島医院専用仮設トイレをリースで借りる。汚されないようワイヤーロックを付けるのに2~3時間かかる。

第23日目(2/8)JR大阪~芦屋~住吉駅間開通する。1夜にて放置自転車、バイク、人通り、代替バス待ちの列。混雑激しく、クラッチの足が震え、ノッキング現象、ガレージに近づくこと困難。現在はJRで通勤。

地震後1ヶ月目、自宅の水道、ガス復旧する。

第35日目 (2/20)私風邪をひく、38~39度、2日間、以後20日間体調悪し。妻、従業員3人交代で次々と発熱。1人はこの10数年間発熱などなかったのに。

第38日目 (2/23)診療所水道復旧、水洗トイレ使用可能となる。

〔考察〕大都市での大震災では予告なく、瞬時に同時多発で、文明の利器が破壊される。停電、TV共同アンテナ破損、電話不通、自動ドア、電子ロック破損、下水管破損、トイレ使用不可、断水、都市ガス不通、電車不通、道路大渋滞、高速道路崩壊などを経験した。特に敷地内の下水管・マンホールが破壊され汚物があふれる事態が地震後第16日目に判明し、一番困った。急遽中島医院専用仮設トイレを1ヶ月4万なにかしかのリースで借りた。

京都の高雄病院の先生より、地震後10日目頃に電話あり、中島医院を拠点に医療ボランティアを申し出てくれたが、足の踏み場もなく、トイレの水の心配もしなければならぬと断った。医療以前の問題が山積みしていた。

村山首相を始め行政の反応が遅かった。自衛隊の出動が遅かったと、マスコミが非難しているが、被災者自身の私も、地震後16日目にやっとトイレ使用不可が判明した。マスコミ地震も日が経つにつれて事態の深刻さを報道している。

(中島医院)

## 大地震・一開業医のメモから

東灘区 市 橋 大



1月17日阪神大震災の当日、被災地の中で救急活動を行うことが出来た医療機関が幾つあったか知らされていないが、私共のクリニックは幸いにもその一つとして精一杯の活動をする事が出来たので、その概略を報告し且つ行政や医師会への要望を述べたい。

1月17日、受診者数150余名、内収容患者18名、死亡者12名（検死を含む）。従業員36名のうち出勤できた人数11名（医師3名、看護婦3名、リハビリ技師2名、その他3名）。

電気、水道、ガスがなく給食不能なので収容患者のうち15名は大阪八尾市の厚生会第一病院、徳洲会八尾病院の院長の好意により救急車を配車して転送入院させる事が出来た。電話不通で東灘区及び周辺の病院との連絡は不能であった。

### 【反省点】

1. 当日朝7時より夜半迄、従業員には水と飴2～3ケを与えただけで殆ど飲まず喰わずの活動をつづけた。診療所としては最少2日分位の非常食の備蓄は必要であった。
2. 停電、電話不通のためテレビはつかず、外界との連絡は全く不能。後送病院との連絡も不能、僅かに携帯ラジオに頼るだけであったが、その電池もすぐついた。電池の貯えとその外の連絡方法を考える必要があった。
3. 生活用水の欠乏のためトイレはすぐ使用不能となった。簡易トイレ非常用も考慮する必要がある。

### 【問題点】

1. 行政:市、区役所からの連絡、指示なく3日目に漸く人が来てボトル2本の水とパン25ケの配給があった。その後は全く何も無い。保健所からの指示も全くなし。  
警察からは3日目に震災当日の負傷者の数の調査。5日目に県警から死亡者数の確認に来訪した。十数人も患者が待合室等に収容されている事実は聞き流された。
2. 医師会:電話連絡網はFAXを含めて全く機能せず。辛うじて区医師会の電話が一時的につながって無事を報告できた。県、市医師会からは震災後1週間位は連絡がなかった。  
未曾有の大震災だったので止むを得ない事であったと思う。
3. 救援:知り合いの篤志家が水と握り飯を当日と次の日に六甲の山越えに届けて頂いたのが、患者にも分けることができ大いに助かった。又大阪の厚生会第一病院からは多量の飲料水、食糧などを差入れて頂き、これで数日間は凌げたのである。2月に入ってから岡山市



の知人から食糧の他、毛布、衣類、下着などをトラックで運んで貰い、従業員や患者に分け与えることが出来た事は大変有難かった。

行政からの救援物資はその後全くないし、問い合わせも来ない。

#### 【要望事項】

1. 災害時には電話が不通になる事を考慮して、無線によるネットワークを至急に計画すべきである。
2. 行政と連絡を密にして対策委員会を組織し、住民の他、医薬品、衛生材料を含めて各避難所だけに限らず、活動している中小医療機関にももれなく救援物資を配送してもらいたいものである。
3. 今回の大震災時の医療活動に関して、テレビ、新聞等マスコミの報道は大病院、それも特定病院に偏りすぎて、個々の診療所の活動は殆ど無視されている感がある。これでは住民の大病院指向を益々助長することになりかねない。これを契機に県医、市医はマスコミ対策を真剣に取り上げてもらいたい。そのためにも、
4. 今回の大震災当初の各診療所の救急活動の実態を至急に調査して統計的実績を把握し、早々に日本医師会に報告、進言して頂きたい。

以上、震災後の混乱から未だ抜けきれないのでまとまりのない私的意見になりましたが、何卒御高察下さるようお願いいたします。

(市橋クリニック)

## 地震断想

灘 区 執 行 英 毅

断想ということばがあるかどうか知らないが、。だかまとまらない憶いを心に浮ぶままに書き記してみた。

### そのあとさき

私の診療所は灘区六甲のビル、自宅は西宮市甲子園口で職住分離である。自宅は武庫川に近く西宮市としては東端にある。神戸から震度7の帯が東へのび、その端が分散した地域にあたる。わが家は大きな損害を免れたが周囲の戦前からの旧いお宅はほとんど倒壊した。

震災の当日、気をとりなおして通勤路の探索を兼ね、車で診療所を見に行く。交通の渋滞を避け、いつもは30分の道のりを道路を模索しながら宝塚、有馬を経て2時間かかって惨禍の神戸に入る。診療所の内部は足のふみ場もない。内壁には亀裂が走り、床はガラスの細粉で一面にあやしく輝いている。電灯は幸い点くが、ガスは来ない。不思議にも水は出る。考えてみると連休明けで、屋上の水槽は満タンであったのだろう。願わくばこの水は出来るだけ温存したい。館内には冷々とした不思議な静寂があった。

現状を確認し、もと来た道を帰る。途中、北区藤原台附近の何ごともなかったように営業している、中華料理のドライブインで夕食をとる。飲み水もあり、水洗トイレも充分機能していて別天地の感じである。厨房で持参していたペットボトルに水をもらい、近くにこんなところもあるという安堵感を得て帰宅した。

徒手空拳ながら医師としての役割も気に懸かるが、耳鼻咽喉科医の技能を思えば、災害医療に立向うよりも、一日も早く診療再開へ向って復旧に努めることが目の前の急務と考えた。

水くみと整備復旧に奮闘の日々が始まる。

### 震災痴呆症？

激震のあとは夢中の一言につきる。それでも家族の無事を確認し、床上の本の山に驚き、改めて爆発でなくて地震と認識する。懐中電灯で屋内を見回り、建物は一応無事だと判って、はじめて寒さに震えているパジャマ一枚の我にかえった。その後どのようにしてどこで着替えたかは記憶にない。

ある知人の話。その人は夜が明けてもただ屋内を徘徊するばかり。朝食をとったことも覚え、片付け作業もただ傍観。そのうちに昼食をすませた頃にはじめて我にかえって、事の重大さに気付いた。その人の告白によると、家人が忙しく立働いているのは知っていたが、それが唯夢をみる心地で何事があったのかよく判らなかつたという。専門外の私にはよく判らないが、精神的ショックによる一過性の心身の喪失又は健忘症なのだろうか。

同じような事をテレビで見た。某大学の有名な名誉教授ご本人の告白である。震災の後は正常の拳措動作であったと自分は思う。かけつけた弟子達の協力のもとに、散乱を極めた書齋を一緒に整理をした。然し、その最中に言ったことや、動きまわったことを弟子達から聞かされたが、ご自分は全く記憶にないとのことであった。同様に他の然るべき地位に居た人々にもそのようなことがあったのではないか。

私が知ったなかでは、年齢の高い人にこのようなことが多かった。心身のショックに触発されて、意外な能力を発揮する人はたまに見受けられるが、色々と職務上、対人上妥当と思われぬ拳措のため、一時周囲の人々の誤解を招くことがかりにあっても、決してそれを批判してはならない。突然の危急の場合、余程心身の条件の恵まれた人は別として、多少の見当識の狂いも少なくないのではないかと思うのである。

## 地震と家具

散乱するものの主なものは1.比較的軽い物件（繊維品、食物、雑貨等）、2.割れ物（陶磁器、ガラス等）、3.重量物（家具、書籍等）等にわけることができるだろう。

その何れにも収納個所として棚があり、一般には、壁面や梁など建物構造に転倒の防止のため、固定することがすすめられている。然し、私にはこの考え方は少し違うように思える。

例えば3の場合、わが家では壁に一体となっても書棚が振動により、ねじ釘が抜き出て巾3メートルにわたり見事に倒れた。2は簡単でも入口にロックがあったのはよいが、ガラスの引戸や開き戸型では内容は落下全滅した。1は引き出しは飛び出して散乱し、簡単でもロックされた開き戸の部分は殆ど安泰であった。

屋根瓦を使わない軽量構造の、特にプレハブ的な建物が比較的安泰であったことを聞くにつれ、震動の際負担をかけるような瓦は敬遠し、重量家具、とくに本棚はいたずらに壁に固定して、建物に振動の負担をかけるべきではなく、自由に転倒、散乱に委すのがよいのではないかと考えている。大切なことは、色々と事情はあろうが、転倒しやすい家具物件の傍らや割れやすいもの（ガラス製照明具、人形箱）等の下のようなところで寝てはならないということだろう。

スチール家具は一般に良好であった。カルテなどを収納したファイルキャビネットは、移動することはあっても、状態は完璧であった。これらはすべて取手についた簡単なロック装置が内容の散乱を防いだものと思われる。手術機械キット等の収納用として便利に使っていたスチールの「工具ケース」と称するロックのない引き出しは、動揺と共に全部前方に抜け出し、その重みで前へ傾いて倒れている。（写真）いずれにせよ日常的な簡単なロックが意外に有効であることを体験した。



新発見はキャスター付の台である。診療ユニット、清潔交換用カート、ダイニング用のワゴン等は自由に移動を果し、その上の器物ビン等に何等損壊落下等はなかった。

## 反省、「耐震」か「対震」か

むかし「地形の輪廻」という事を教えられた。海溝や山野の成立侵蝕も、地球の悠久の歴史の中の一コマであるということは、コロラドの渓谷や普賢岳を思えばよくわかる。人間がいう「天災」

と称するものも大自然の中の一つの営みにすぎない。その中で火災と風水害対策までは、人智の及ぶところであろう。然し震災は少しちがう。「震度いくら」などは大震災のたびに人の思惑を越えて更新されてきた。幾百年に一度いつおころかも分からないことに対して「耐震」を掲げて、どこまで我々の日常生活の基本に組込むのか、判断の大変むつかしいことに思える。震災は防げなくとも、対応のシステム作りは先進国として出来ていなくてはならなかった。「耐震」の研究もさることながら、「対震」の考え方が大切であったはずである。それを拒む排他、偏見、悪徳、不正、怠惰等々、日本の政治社会に巣喰う悪弊が、天災に先立って我々国民を次第に窮地におとし入れていくような気がしてならないのである。

(2月28日)

(執行耳鼻咽喉科医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 親の気持ち

灘 区 多 祢 正 雄

大震災の朝、それはちょうど8時頃だったと思う。30才代の男が5,6才の男の子をかかえて病院に駆け込んで来るやいなや、「助けてください。なんとかっ、助けてくださいっ」と、薄暗い廊下中に響きわたるような大声で叫んだ。近くにいた私が見ると、すでに呼吸も心臓の拍動もなく、瞳孔は完全に開いていた。体にいくらか暖かみは残っているものの、掘りだされるまでに、死後かなりの時間が経過していることを示していた。額や胸に内出血があり、体中黄褐色の土にまみれているのは、おそらく倒れてきた土壁に押さえ込まれたのであろう。あきらかに、蘇生する可能性はない。看護婦のNさんも、私の目を見て首を横に振った。

必死の面持ちで私たちの様子を見守っていた父親は、すべてを悟ったようではあったが、それでも一縷の望みをかけるように、「先生、なんとかしてください。なんとか、してみてくださいよっ。せめて1時間だけは蘇生術をしてくださいっ」と叫んだ。

父親は、ロダンの彫刻のようなたくましい男だったが、上半身にジャンパーを着ているものの、下半身はパンツの上にパスタオルを巻いただけで、それも土だらけで、はだしの足はあちこち血が流れていた。こどもを掘り出す時に怪我をしたのだろう。

私は黙って心臓マッサージを始めた。私が「イチ、二、サン」と胸骨を圧迫し、Nさんが「ハイッ」とアンビューをしぼった。

震災後のテレビでは、さかんに“トリアージということが言われている。大きな病院で救急部部长という医師が、てきぱきとトリアージを行っている映像も放映された。

これはまことに理にかなったことであり、私もそうすべきであると思っている。しかし他方私には、理よりも情に流されるという、医者にあるまじき悪癖があって、この時も、必死の父親に「この子はもう死んでいます」と言い切って、なにもしないで突き放すには忍びなかった。この子に私がかかわったがために、助かるかも知れない人が助からなかったとしても、それは宿命だ。人の世の出会いである。私はそのような発想をする。

だからあくまでもジェスチャーにすぎないのだけれど、父親の気が済むように、1時間だけは蘇生術をしてあげようと決心したのであった。

「イチ、二、サン」「ハイッ」

「イチ、二、サン」「ハイッ」

と声を出し、リズムを合わせて蘇生術を続けた。父親もすぐに要領を会得し、三人で交替しながら続けたけれども、もちろん蘇生はしなかったし、体はしだいに冷えていった。

そのようにして、そろそろ1時間が経過しようという頃、私は、頭をガーンと殴られたようなショックをおぼえた。それは、父親が恐る恐る、「なにか注射でも…」と言いかけたからであった。なんということだ。普段はなにかと言えはすぐに注射したがる医者が、父親からみればこの重大な時に、注射一本もしてくれない。私からみれば、始めからだめとわかっているのに、演技にぬかりがあったと言える。ジェスチャーであることが丸見えだったのだ。

あわてて言いつくろいの言葉を口走りながら、むかし医者になりたての頃よくやったように、カテラン針で心臓内に強心剤を注射したけれど、おそらくこの演技は後の祭だっただろう。“トリアージよりも父親の気持ちを大切に”などと粋がった私のジェスチャーは、それがジェスチャー丸見えであったがゆえに、却って父親のこころを傷つけたかもしれない。

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化 : 神戸大学附属図書館)

## 震災後関連疾患について

長田区 上田 耕 蔵

震災当初1週間は外傷主体であったが、2週目より肺炎が急増する。震災2日目より避難所へ医療班を展開したが、厳しい生活環境から脱水に陥る高齢者などを多く見ていたため、肺炎多発は避難所の環境に原因があると分かる。気管支喘息患者も全壊→避難所へ行った人は砂ほこりを大量に吸って発作は悪化した。しかしベッドがなく外来で吸入点滴する。可能な方は他院へ紹介する。2月になり紹介先病院主治医から「死亡」の報告書が届く。さらに家族から死亡したとの連絡がはいる。1名の死亡を聞いた時はこの地震だから仕方がないかと思っただが、2名、3名と死亡者が続くのを知って「これは大変だ。単なる偶然を超えている」。2月9日、取材に来たNHK記者から「地震後の環境悪化で老人がたくさん亡くなっている。協同病院ではどうですか?」病歴担当者に死亡者カルテを出してもらい検討する。肺炎以外の疾患でも避難所からの入院患者さんが亡くなっている!

入院患者の分析を行うが「震災後関連疾患」と呼ぶべき疾患群があるのに気付く。定義として、  
 1.地震後のストレス・生活環境の悪化が原因・誘因となりえる。典型的には避難所生活の経験。  
 2.死亡につながる疾患群。(表1)

(表1)震災後関連疾患の概略(地震後4週までの入院例)

	件数	平均年齢	65才↑件数	65才↑%	死亡者	死亡率	避難所	判明件数	避難所%
肺炎+気管支炎	45	72.3	36	80.0%	2	4.4%	31	45	68.9%
気管支喘息	12	65	6	50.0%	1	8.3%	8	10	80.0%
肺気腫	4	79.3	4	100.0%	2	50.0%	3	4	75.0%
胃潰瘍	10	71.2	9	90.0%	1	10.0%	5	10	50.0%
急性心筋梗塞	4	71	3	75.0%	1	25.0%	2	4	50.0%
心不全	8	74.5	6	75.0%	0	0.0%	4	8	50.0%
脳血管障害	4	73.2	4	100.0%	2	50.0%	2	4	50.0%
全入院	195	68.3	135	69.2%	7	3.6	89	154	57.8%

各疾患とも喘息を除いて全入院患者の平均年齢より高い。避難所との関連が強い疾患は呼吸器疾患である。寒冷、過密な集団生活、砂ほこり、栄養不良など厳しい生活環境がその背景としてある。

当院の患者さんで震災後関連疾患による死亡者は3月末までで17名であった。うち当院への入院は10名、他院入院は4名、在宅は3名である。入院した14名のうち全壊全焼が9名(64パーセント)、避難所からは10名(71パーセント)であった。平均年は79.5才であり、全患者の平均年齢68.3才と比べ明らかに高い。また在宅患者さんの占める割合は、入院中であった3名と在宅で死亡された3名の計6名で、 $6/17=35.3$ パーセントと高率である。地震による2次災害は明らかに高齢者と病弱に集中している。

神戸市の今年1～3月合計死亡数7,691人と前年の3,027人の差4,664名から外因死3,896人を引くと768名となる。90～94年過去5年間、1～3月3カ月間の死亡率の統計解析から震災後関連死亡数は1,048名から539名、平均794名の範囲に分布する。これらの方は地震後の生活居環境の悪化さえなければ死ななくてすんだたちである。あるいは死期を早められた方たちである。(表2)

(表2)神戸市の死亡数(92～95年、12～3月)

	92年	93年	94年	95年	差 (95-94)	増加率 (95/94)	県警発表 外因死
12月	779	839	835	900	65	1.08	
1月	1,059	1,088	1,017	4,924	3,907	4.84	3,896
2月	890	1,011	940	1,580	640	1.68	
3月	995	1,087	1,070	1,187	117	1.11	
1~3月	2,944	3,186	7,691	4,664			

表の12月は前年の値となる。

なぜ救えなかったのか?寝たきり患者さんを入所させようにも数少ない市街地の特養(長田区は1カ所のみ)はすぐ満杯。郊外の特養もあふれてしまった。病弱者専用の避難所も「さるびあ」1カ所を除いて作れなかった。また一部避難所を除いて暖房を入れることが出来なかった。神戸市は在宅福祉が弱い都市であるので、大災害に対して高齢者への対応が非常に遅れる結果となった。大災害時には最初の数日で寝たきり者を、1~2週以内に病弱者を安全な場所へ避難させる事が必要である。また災害時対策としても在宅福祉施設を捉える事が必要である。地域にたくさん作るだけでなく、病弱避難者の収容とボランティアの基地として転用できるスペースが設計されるべきである。

現在も神戸市では3万人以上の方が避難所暮らしを未だに余儀なくされている。一方、多くの老人・病弱者は仮設生活にシフトしつつある。親類宅の老人も多い。「厳しい」夏に対して冷房を含む住居、生活介護環境のバックアップが必要だ。

(神戸協同病院)

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)



## 被災と心の動揺

長田区 山本 喜三郎

平成7年1月17日午前5時46分、突然恐怖に落とし入れたあの震災は、神戸市民誰もが忘れがたいであろう。それまで神戸で地震の予想を聞いたこともなければ、神戸は安全な所、地震はよそごとといった見方がたしかにあったから、なおさらである。

辞典(岩波)によると、地震は地面が振動する現象、とあります。しかし被災してみると、地震は地殻の変動というよりは、地域社会の大変動である、といった方がぴったりします。地震後地域社会が変貌し、物の考え方も変化しているように見えるからである。地震直後、隣近所お互い無事を確認しあい、無言の中に暖かいコミュニケーションを感じ、それがその後の避難生活をも支えていたように思う。しかし復興のかけ声が聞こえてくる頃から、自分の被災の大きさに気付き、気が滅入っているのが、多くの被災者の実情ではないだろうか。ここではPTSDなど患者心理ではなく、筆者自身の心の動揺を述べたい。

震災1ヶ月後の紙上で、米山俊直氏は地震直後一時的に利益社会(gesellschaft)から共同社会(gemeinschaft)への変化を述べ、それが海外のマスコミで取り上げられた“秩序ある行動”を取らしめたという。この体験を元に、従来の神戸イメージに固執せず、神戸の伝統文化を大事にした神戸作りを提案しているが、全く同感である。野田武彦氏は、地震は一億総中流意識を剥ぎ取り階級格差を顕にしたと述べているが、確かに自分の事を棚上げにして、盲目的に社会の中流意識の中に流されていた姿を白日のもとにさらし、直視させている天啓のようにさえ思える。

地震当日、重苦しい気持ちのなか、器具や書類の散乱した診療室を漫然と片付けていると、一人のお年寄りが薬を下さいと入ってきた。先生も大変ですね、と慰められ、一言二言会話を交わしているうちに、次第に心が和み、医師としてのアイデンティティを感じ、医師のアイデンティティは患者さんによって支えられていることに気付くものでした。

次に自分の変化に気付いたのは電話の対応でした。日頃は煩雑な時間外の電話はできるだけ家族に依頼していたが、地震後は何故か自分が真っ先に電話に出るようになった。これも患者さんを身近に感じたからだと思う。小比木啓吾氏は現代の人間関係の特性を「やまあらしジレンマ」に例えています。他人との距離が近すぎるとお互いの針で傷付け合うので、適度な距離を持ちつつ生活しているのだというのである。地震後世相が一変し、刺のない共同社会の人間関係を感じたからであろう。

第3に痛感したことは、古い友人知人の訪問援助への感謝である。人からの訪問援助は当然有り難いことであるが、地震後はそれ以上のことを感じるから不思議である。震災直後ときたまかかったくる電話は遠隔地からの安否を気遣う友人や親戚の声でした。地震直後西宮北口から何十キロも歩いてお握りとミネラルウォーターを届けてくれたのは、かつて進学を指導した高校生で、20年ぶりの再会でした。避難先から帰ってみると、見慣れない2人の紳士がうろうろしている。誰かと思っていたら、25年ぶりに再会した遠い親戚と友人でした。2週間程して郵便事情が回復すると、北は北海道から南は鹿児島までいろいろな方々、中には恩師や今や各界で活躍している方々から見舞状や援助物資などが届けられるようになりました。ときにはボランティアから聞いたとあって、30年ぶりに訪ねてくれた旧友もいました。劇的な再会は感激にたえないものでした。

復興は行政の役割が中核となるが、過度期待は禁物で自助努力が前提であることは万人承知であろう。この自助努力の成否には、M.バリントの理論も参考になるように思う。バリントは、精神分析療法中の退行に良性と悪性を区別している。退行とは精神的な赤ん坊帰りのことである。良性退行では精神療法中の人間関係を足掛かりに新しい“出発〔new beginning〕”をかちとるが、悪性退行では際限無き依存欲求願望が顕在化して治療が泥沼化するという。

被災後の旧友の訪問は人間の善意がかみしめられ、ときにはそれは揺籃期に父母から受けた愛情の眼差しや幼児期の団欒の間を感じさせるなど、心に深く働きかけるものを覚える。そして自分はこのままでよいだろうかという良心が揺さぶられ、それに答えようというナイーブな感情とそれに応え得るかという自分の能力への自問が生まれる。そこにnew beginningのきっかけがあるように思われて仕方がない。復興のvitalityの根源は、このような善意の人間関係のやりとりから生まれるように思われる。所詮医院・住宅の再建は、いつに自分の能力にかかっており、その責務を痛感する昨今である。

(山本医院)

## 震災後に想うこと

中央区 松川善弥



震災後4ヵ月を経た今日、漸く筆をとろうという気持ちになってきた。想いつくままに、また、記憶の薄くならないうちに記録に留めたいと思う。

### 1)自然の力の驚異を改めて体験

神戸は地震に強いという神話が一瞬にして崩壊した。異様な轟音とともに、上下、前後、左右に揺れ動き、周囲の家具が置かれている方向によって、或るものは内容物が壊れ、或るものはガラス扉にヒビが入るとともに、内容物が弾丸の如く壁面に飛び込み、しかもこれらのことが瞬時に起こって、あとで現場をみるまで信じ込むことができなかつた。上下水道の給排水管もビルもろともに捻り潰された感じで、その破壊力やエネルギーの大きさに驚異の眼を見張るばかりであった。5000人余の死者のうち、検死の結果約60パーセントが圧死であるときき、今後は少なくとも寝室には寝具のみで、他の家具を置かないことを先ず第一にすべきことであろう。「備えあれば憂いなし」の諺が、関東方面の人達には徹底しており、常に携帯ラジオ、懐中電灯、非常食などをリュックサックにつめて枕元に置いているそうであるが、私達はこれを怠り、停電になるとラジオやテレビによる情報をうることができず、手元が暗いため、手を無造作につくとガラス破片で手を傷つける始末であった。周囲が明るくなってきて屋外に出たが、ガスの臭さに危険を感じ、近所の人々と安否を尋ねながら、避難所に指定されていた校区の小学校に向かったが、先ず食糧と水を確保しなければならぬとコンビニエンスストアに向かったが、もう既に長蛇の列ができており、1～2品を手にいれただけで品物がなくなったということである。非常食や水を用意していなかったことを悔いる。浴槽に水を張っていても、浴槽が破壊され、溜水はなくなっていたとのことである。折角美しく舗装された道路も下から盛り上げられた状態で寸断されており、特に盲人の人達は、平素歩いていた道路や建物の状態が変化し、一人では白杖をついて歩くことができないとのことである。私達以上に日常生活の不便さを感じておられ、街で盲人や身体障害者の方達を見かけたら、気軽に声をかけて、手助けしてほしいと思う。

### 2)ライフラインの破壊に戸惑う

電気・水・ガスの順に復旧してきたが、給水のなかったことは、多くの人達の水運びの労働と、特に高層の建物に住んでいる人達は、エレベーターやエスカレーターの運転できない状態で腰痛や疲労感を増したことと思う。一週間も経つと、女性は入浴できないことに苦痛さえ訴えて

いた。水洗便所であることが、排水できないため便所が不潔になったり、私の所では県庁に手洗いを借りに行くなど、日常生活に不便さを感じた。ガスが漏れていることをチェックするため、遅れて復旧したことは、料理や入浴できないことで、インスタントの食事や、身体を拭くだけで最低生活をせざるを得なかった。恵まれた文化生活からどん底の生活に陥ったので、いろんなストレスがたまって、情緒不安定や不眠の患者がふえてきた。

### 3)情報の不足が不安状態をかきたてる

患者が来院した場合、医療機関も被災状態にあり医療機能を十分に発揮できないので、後送病院或いは他の専門医療機関の診療状況が解らないので、どのように対応してよいか不安になる。地震による患者の被災状況、或いは肉親や知人の安否など、電話をかけようとしても線がふさがっていて連絡がとれない。必要なホットラインの設置を急がなければならない。

### 4)区医師会震災対策委員会に出務して、情緒不安定

区医師会震災対策委員会が、当初は週2回開催され、中央保健所、中央福祉事務所、市・県医師会を介しての情報が伝えられ、避難所の状況や区内医療機関の診療機能などが伝えられ、現実的な対応策が検討され、自分が今何をすべきか、何ができるかを把握でき、私自身の情緒や不安感が和らいだと思う。

### 5)避難所を訪問、或いは診察することで診療意欲を回復

医師会ですすめてきた災害医療は、あくまでも診療する医療機能がフルに活動できる前提のもとに体制がたてられており、今回のように医療機関自体が被災した想定はされていなかった。震災直後は外科的対応が主であり、患者さんの状態による選別、応急処置、搬送を的確に判断して対処しなければならなかった。多くの医師は、平常の医療機能を駆使できればもっと救命できたのにと後悔している。このことをいつまでもこだわることなく、あの異常状態の中では最善を尽くしたと認め、今後の災害医療への要望を残すことが大切であろう。搬送についても、海上とかヘリコプターを考えることができず、乗用車にのみ頼り、交通渋滞で成果をあげえなかったことも多かった。避難所への巡回、診察は心の傷を癒すために有効であった。避難民の中には、かかりつけ医師に会って安心する人達もいた。慢性疾患の人達で、かかりつけ医が被災して休診していることで、服薬もできず悩んでいる人達もいた。県外から来て下さった救急医療団の対応に感謝しなければならないが、震災当初は被災を受けていない医療機関から医薬品、医療材料及び医師、看護婦の派遣が、被災者にとってどれだけ安心できたことかと思う。或る時期になると撤退しなければならないので、その引き継ぎを地元医師会でしなければならないが、震災対策委員会から復興委員会に交代してうまくやられている。

以上、思うままにいろいろ書いてみたが、現場の医師の考えたことが集約されて、災害医療を検討する一助にともなればと思う。

(松川神経科診療所)

## 罹災後10週間余

灘 区 伊 藤 貞 之

わずか十数秒の悪夢であった。

信じられないほど短い、この世の終わりかも思える激震によって、無残にも五千五百人人命が失われた。

非業の死を遂げた人々はいうにおよぼず、三数万人の被災者はそれぞれの人生に決定的、かつ冷酷無残な傷痕をうけた。その後の悲惨な避難生活により、心に、体に想像を絶する試練を受けることになった。



**受付にはカルテ、書類、書籍が散乱しカルテ戸棚(スチール製)が落下、電話機、FAXとも破損し使用不能となる(後日買いかえた)左端に見える薬戸棚からは薬品が散乱し足のふみ場もない(平成7年1月17日撮影)**

営々として築き上げた住宅、財産、家庭、幸福などすべてが、根底から瞬時に瓦解する不条理、理不尽さに、流す涙もなく視点のさだまらぬ目をただ呆然と廃墟にむけるだけであった。

活断層の真上に生きているとも知らず、天災のない土地という甘い幻想を根底から揺さぶる地獄の責め苦であった。

内閣総理大臣、防衛庁長官を含む各閣僚、県知事、市長、自衛隊総監部など行政各部の無為、無能、無策、無責任による人災(二次災害)によるとしか考えられない多数の犠牲者については、あまりにも痛ましく哀れで涙なくしては語れない。

どうして、だれ一人として、命を賭してまでも超法規的な判断を下せなかったのか。公用車の到着を待っている間に自宅から走ってでも、登庁しなかったのかなどの素朴な疑問が、いつまでも頭を離れず残念でならない。

危機管理の甘さから初動の遅れた行政の声が、いささかの慰めにもならず、どれほど虚しくうつろであったかは罹災した人にしか判るまい。

人の幸せとはなんとはいかに脆いものかを、このたび痛いほどに思い知らされたことはない。また、隣り合わせの死と生とが、全くの偶然と運、不運とに左右されることに、やりきれない無情を感じ、背筋の寒くなる思いがする。

私自身が書齋で瞬時の圧死を免れ、3歳の孫が無残にタンスの下敷きにならずにすんだのは「たまたま運が良かった」としか言いようがない。まさに紙一重で生きのびられたのである。

動物的と言われるが、その10日ほど前からかすかな予感があった。各自の部屋にラジオと懐中電灯を用意し、重たいものを下におろし、倒れやすいものを壁に固定し、防煙マスクを用意したりしていた。が、そんな準備など根こそぎ吹っ飛ばすすさまじさであった。予感があったから、「来たー！！」と叫ぶだけでベッドの上に座ることもできない突き上げと揺れであった。隣のベッドで妻の声を聞いた直後、中二階の娘と孫2人、二階の孫とを見てまわり家族6人の安全を確認。途中で何を蹴飛ばし何を踏みつけたかの記憶は全くない。「よかったー、みんな助かったー！！」抱き合う家族のひきつった顔にむきだしのおののきだけがあった。

本棚やタンスは倒れ、上に置かれていた物はすべて無残に落ちて壊れ、割れたガラスや陶器の破片で足の踏み場もない。ピアノが足受けからはずれて移動したり、100キログラムを超す金庫がじゅうたんのうえを1メートルも動いたあげく倒れていた。信じられない。

書斎ではまだ揺れているペンダントライトを粉碎し、300キログラムを超すスチール戸棚の三段かさねが後ろから倒れ、書架に支えられ、デスクとの間がわずかに15センチメートル。

もし連休の間に、広島アジア大会でのドーピングに関する最終データの翻訳、それをもとにした医師会報への原稿の作成などが未完成なら、あの日あの瞬間、間違いもなく圧死していた。ことのほか興味をもって読んだデータが死の淵から救ってくれたといえる。



**自宅書斎の惨状。手前のカメラ戸棚が倒れ8ミリメートルプロジェクターは落ちる寸前。パソコンはストッパーをしてなかったので助かった。むこうのスチール戸棚3段重ねが倒れ前の書棚に支えられてとまった。この椅子に座っていれば瞬間に圧死していたと思われる。床には時計などが散乱。（平成7年1月17日撮影）**

光も音も消えた異様な街並みがやがてあがる火の手と煙に覆われることとなった。パンをひと切れかじりリュックサックを背に、歩いて余震のなかを診療所に向かった。まだその日も診療するつもりだった。

南に約2キロメートルだからふつうなら25分くらいの距離であるが、道路をふさぐ瓦礫、倒壊家屋と火炎、逃げまどい、救助に走る人々を避けて随分時間がかかった。南へ行くほど被害がひどくなり、救急車も消防車も来ず延焼中の街並みを何度も迂回してたどり着いた診療所は、周囲の残骸のなかで建っていた。ガレージはぶっ飛び、シャッターと塀は潰れ駐車スペースはむちゃくちゃにひび割れていたが建っていた。が、ドアを開けてみてあまりの酷さに声も出なかった。カルテ、書類、薬品類が、転落し押しつぶされた机、椅子などの上にぶちまけられ足の踏み場もないありさま。

水道管を引きちぎって手洗い台は床に落ち、滅菌器は中身をぶちまけ、ガラス類はくだけ散り、シャウカステンは床にたたきつけられていた。スチール戸棚の上段はとばされて書籍はガ

ラスとともに散乱。その床面には大きな亀裂が数本は入り牽引器、極超短波、ホットパック、レーザー、SSPなど無残にも折り重なるように倒れていた。自動現像機も潰れ、あふれた液体のなかにカセットやフィルムが浸かっていた。

西側からは木造二階建ての建物2棟が全壊し塀を潰してもたれかかり、給湯配管を裁断している。東隣の鉄筋3階建てのビルはこちらに向かって傾斜し多数のクラックが見えて余震のたびに割落していた。

家の中をどうやって片付けるのか、診療所をどう再建するのか、頭を抱えてしまった。男手は僕一人なのだ。この時はじめて一瞬弱気になった。

ガスの元栓を切り、配電盤のブレーカーをおとし二次災害に備えた。

直ちに外に出て近所に住む従業員たちの家を見てまわった。ぺちゃんこになった家から無傷で這い出た老いた事務員とは思わず抱き合っただけ涙を流し、「生きててよかったなー」としか言えない感激に胸がふるえた。2人の看護助手の家は向かい同志でどちらも半壊状態、とてもなかに住める状態ではないが、二家族ともかく全員無事。看護婦長のマンションへ行くと健気にも内部の片付けにとりかかっていたが、地震は勿論、まわりの家が倒壊する大きな音がとても怖かったという彼女の目からは涙があふれつづけ、声のふるえも止まらなかった。

再び診療所にもどり「潰滅的被害で当分再開のめどは立たない」と張り紙をした頃、爆発音とともに市場の向こうに黒煙があがった。ひょっとしてと駆けつけてみると案の定もとの従業員が住む5階建てのビルが傾いたまま火柱となり、消火の手だてもなく、おろおろする近所の人にそのビルの住人の無事を聞くのがやっとであった。

高架の落ちた阪神電車にゆくてを遮られ、暗然たる思いで足取りも重く燃えさかる街並みを歩いて帰った。

どうにも連絡がとれず随分気をもんだが、4日目に東灘に住む事務員（全壊）、芦屋に住む看護助手（半壊、立入禁止）の2人もなんとか連絡がついてやっと安心できた。まことに幸運にも全員怪我もなく元気であった。それにひきかえ、前日まで通院されていた多数の患者が亡くなったことは、かえすがえすも残念であり、心からご冥福を祈り御霊安かれと合掌する毎日である。

私をのぞく家族全員が流感にかかり、食料、飲料水、トイレの水の調達に奔走した。毎日診療所まで歩き、すでに土足でよごれたカルテをひろいあつめ、散乱したアンプル、薬、ことに外用薬を、患者が殺到している金沢病院へ持参、進呈した。

せめてボランティアでどこかで働こうと考えたが、嘔吐、高熱のうえに、地鳴りと余震におびえる孫たちがいては動きがとれなかった。糸の切れた風船のような自分の姿に、こんなことで良いのかとの自責の念に日増しにさいなまれるようになった。

避難所から通ってくれる従業員2人にささえられて、水もガスも出ぬまま2月3日からやっと再開にこぎつけた。玄関のガラスは割れたまま、土足のままでの出入り、壊れた機械類を一部屋につめこみ、軽便型の自動現像機を借りて野戦病院なみであった。



**壁にくっつけてあった本箱がずれ、上段は右端にとんで落ちている。診察机もずれてシャウカステン、滅菌器も倒れ墜落している。(平成7年1月18日撮影)**

二十数名だった患者がやっと50名になろうとしているが従来の1/4、9週目にやっと仮設の蛇口から一カ所だけ水を出せたが、11週になってもガスのめどは立たない。なによりも周辺の倒壊家屋から人がいなくなり最寄りの阪神電車の復旧は9月になると言われる。

10週目まで頑固に徒歩か自転車にしていた通勤だが(地震災害時は決して私用で車をだしてはいけないとかねがね思っていた)、危険を感じさせる無謀な車の増加に耐えかねて車に切り替えた。

患者自身の苦勞話、身のまわりのさまざまな悲しい出来事、犠牲者の話を聞くにつけ、涙を流さぬ日はなく手をとりあって顔をぐしゃぐしゃにすることもしばしばある。それぞれに幸せだった暮らしが突然の災害で瞬時に悲嘆のどん底に突き落とされる、一人ひとりの不幸な物語に、私の涙腺はもう全くコントロールを失ってしまった。

灘区内で50年前の戦災と今回と、二度までも焦土と地獄を見た。

空気汚染、すさまじい騒音以外にもいろいろな不協和音を耳にするが、間違いもなく素晴らしい都市に復興することだろう。

行政の猛反省にもとづく、庶民に目を向け足が地に着いた努力と、ボランティアのあの逞しく立派な若者たちに、この街の未来と夢とを託したい。

(伊藤整形外科)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)



## 阪神・淡路大震災記録

東灘区 岡村 八郎

こわい。こわい。ゴー。ゆれる。ゆれる！  
右から、左から。かべから、砂から。がらがら、がら…ころ、ころーころがる。  
私は、寝台から、おちた！塀が倒れた。ドン！妻が私の上で、重なる。  
時計を見る。6時に見る。いたい足を見る。毛布をかぶる。  
さむい！さむい！家が全部、診療も、駄目だ。しかし、猫がたすかった。2匹もたすかった！  
去年、標本箱は蝶だけ全部、三田市の「人と自然の博物館」へ寄付にしました。  
やれ、やれ！

左脳梗塞の人

岡村 八郎  
(1.17記)  
(岡村医院)

## 私の阪神大震災体験

東灘区 深山 鉄 平

平成7年1月17日午前5時46分、西宮のマンションの5階で1人で寝ていた私は、激しい何かに揺さぶられ目が覚めた。何が起きているのかわけがわからず、ただ怖いだけだった。部屋中がガサガサと音をたて、縦に横にビクリハウスのように揺れた。そばにある重い桐筆笥が倒れてくる気配を感じ、そのまま死んでしまったとさえ思った。ところが、筆笥は壁によりかかって私の頭上約30センチメートルのところまで止まり、わずかなすき間に生きのびることができた。自分が生きていることを確認し、たまたま北九州の実家に返していた家内と娘のところへ電話をかけ、今地震があったこと、自分は無事であることを伝えた。この電話が、北九州の家族にどれだけ安心を与えることになるか、外の様子を知らないその時には分からなかった。ウイスキーのボトルが割れ酒臭くなり、足の踏み場もなくなった部屋の中で、やっとペンライトを見つけ出した。さてラジオつきのライトがあったはずだがと台所のほうを振り返ると、なんと冷蔵庫が横倒しになり台所から飛び出しているのである。結局台所にあるそのライトは冷蔵庫が邪魔になり取り出すことはできなかった。こうなってみて初めて気が付いたが、懐中電灯というものは、常備していても何の役にも立たず、就寝時にこそすぐ手に届くところに置いておくべきであった。

とりあえずペンライトを持って外に出ると、すでに近くで火の手が2カ所上がっていた。幸い自分の車が動いたので、すぐに診療所兼実家のある深江に向かった。まだ渋滞する前の国道2号線を走ったが、見る家見る家は軒並み倒壊しており、今回の地震のすさまじさを思い知ると共にその被害の大きさを目の当たりにした。深江でも、古い木造家屋はかなり倒壊していた。幸い診療所兼実家の建物は無事で、家族にケガもなかった。ただ中はぐちゃぐちゃで、至る所で筆笥や棚が倒れ、食器は散乱していた。診療所の中も、機械棚が倒れ、カルテや薬は散乱し、レントゲンは仰向きになっていた。家の中のことは把握できたので、電気、ガスの元栓をチェックして、縫合セットもガーゼもなく(内科、小児科なので)、いわゆるライフラインも途絶えた診療所を飛び出し、倒壊家屋の下敷きになった人たちの救出に出かけた。

至る所で呻き声が聞こえた。近くにいた人達3、4人で1人ずつ埋まった人を助け出し始めた。あちらこちらで声は聞こえていたが、1人1人の救出を確実にに行い次の人の救出に向かうという作業が繰り返された。

翌18日は、避難所に往診に出かけつつ、診療所内部の復旧を行っていた。

従って医師として本格的に地域医療の手伝いできたのは、恥ずかしながら震災後3日目の1月19日からであった。この日は東灘小学校へ行き、石川赤十字病院の医師、看護婦の方々と救護所を手伝う一方、次々と運ばれてくる遺体の検案を行った。救護所では震災当初のケガなどの外科系患者に変わり、疲労と寒さのためか、風邪症状や高熱のような内科系患者が目立ち始めていた。遺体の安置所にはすでに何体もの遺体が並べられており、検案が終わっていた。しかし、さらに遺体は運び込まれ、その担当をしておられた同校の教頭先生は安置場所に苦慮されている様子だった。そのような理由もあって、御家族によって運び込まれた遺体を、そのトラックの荷台の上で検案を行い、御家族がそのままお寺に連れていかれるケースもあった。

私の震災体験は、このようである。その当時は、最善だと信じて行動していたつもりだったが、後になり振り返ってみると色々反省点の多いことに気付く。昨年8月に父の後を継承したばかりで、この地深江にもしばらくぶりに帰ってきたのだが、この生まれ育った街並みがわずか数秒

でここまでひどい状態になるとは、今更ながら自然の力のすさまじさに驚く。すでに震災から3カ月が過ぎ、復興への作業が進んでいる。被災の程度の重い軽いにかかわらず、市民一人一人ががんばって立ち上がろうとしている。今後も、地域医療に携わる一開業医としてできる限り復興の手伝いをしていきたい。それが30センチメートルのすき間に助かった私のなすべきことだと思う。

(深山医院)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)

## 大震災の回想

### －感謝の日々－

東灘区 谷本恒幸

狐につままれたような、我が目を疑うような、古い病室の倒壊。「助けてください」という女性の声はまだ耳に残っている。着の身着のまま、倒れた屋根を鋸で切り開き、神戸商船大生3名と一緒に厳冬とはいえ、汗を流しながら入院患者6名を救出した。一人は無念にもクーラーと丸太が胸に直撃して圧死されていた。

旧館から救出した患者を鉄筋の病室に移す。水・電気・ガスは止まり、電話も不通、看護婦は来ない。入院患者を診るにも限度があった。

震災翌日、鎖骨骨折の学生は、京都から親が迎えに来た。胃潰瘍の吐血、下血の老婆、ヘルニアの手術をした老婆の家は倒壊し、迎えが来ない。被災し、家と息子夫婦を失った老婆が、更に一人入院して来た。

有床診療所の悲しさ、水はなく、トイレはつまる。食糧は避難所（学校か区役所）からもらってきて分け合った。水は甲陽園にいる知人が、背中の背負子で食糧と一緒に、何回も持って来て下さった。同じく神戸商船大の大学院生が池田市から電車と自転車に乗り、日に2回も往復して、水、食糧、燃料などの生活必需品を運んでくれた。

「有り難い」の一言につきる。

光と熱、通信のない原始生活が4日ほど続き、近くの公衆電話に何回も通い、区内の病院に転院を頼んだが無駄であった。しかたなく、区外の親しい友人に受け入れを依頼せざるを得なかった。軽症の脳梗塞患者1名とホームレスの肋骨骨折患者1名を垂水に、踵骨骨折の手術を予定していた女性を加古川の“はりま病院”に転医させた。もう1人の脳梗塞の患者は家族ともども近くの小学校に避難させた。意志疎通のない鼻腔栄養で命をつなぎ、不思議にも救出された植物状態の老婆は付き添いもいなくなり、送院するあてもなく、私も看護に精魂つけて小学校のボランティアの計らいで、駐屯していた東京の自衛隊の救護車に乗せて1月24日、つまり震災1週間後に鳴尾の友人の外科病院に渋滞の中、2時間かかって転送した。2時間後、私の診療所に戻ったのは4時過ぎ、すでに陽は暮れかけていたが、玄関先の電灯がともっているのを見て、ほっとした。徐々に光を見て、心にも灯がともり明日の希望が湧くのを覚えた。



## 倒壊した旧館病室の前で

(平成7年2月1日撮影)

入院患者に対する私の使命も終わったと一息つき、陽の暮れぬうちに大阪の娘のマンションに向かった。芦屋の臨港線を走り、武庫川を越えて尼崎に入ると全く無傷。活断層から外れるとこんなに違うものかと驚きつつ、大阪にたどり着いた。娘の家族や震災の次の日からすでに避難していた次女の友人の家族が迎えてくれた。まず、室内の暖かさに救われたような気がした。1週間、暖房はなく、20日は大寒、21、22、23日は雨が降り続いた。汚れ、疲れて湯船に入った時は、悲惨な震災生活から脱出の思いがあった。翌日から、息つく間もなく自動車で、又は青木まで開通した阪神電車に乗り、ジャージ姿でリュックを背負い、約1ヶ月間、朝早く、又人気のない暗い廃墟の夜道を歩いた。

診療所に着くと患者さんが3人、4人と待っていた。

毎日、隣人が食糧と水を届けて下さった。助け合う人の情けを、身に染みて感じ感謝の念に満たされ、1日、1日を復旧に向けて、復興、新生へと心を弾ませたのでした。

あれから、1、2、3、4ヶ月と日は過ぎて行き、数多くの患者さんが亡くなられたのを知った。又、県外へと去って行き、避難所生活を余儀なくされた人々も、遠くの、又、近くの仮設住宅に移って行く、その人々の住まれていた家々の解体がすすみ、広々した空地が拡がり、ところどころに死者を弔う花が置かれている。この空地に家が建つのは何時のことであろうか。

1日も早からんことを祈るのみである。

(谷本外科)

【東灘区田中町のマンションに住んでいた孫2人が大阪に避難し、転校先の小学校で1月下旬に作文を書きました。子供の眼から見た震災の様です】

---

## 阪神大震災

小学6年生 田 中 蒔

17日の5時49分頃に、ジェットコースターに乗っているような大地震がおそった。私が目を覚ました頃は、家の中に台風が来たように、ひどく荒らされていた。一回目の地震がおさまり、父が、懐中電灯を取りに行こうとした。とっさに「お父さんやめて」と声をあげた瞬間に二回目の大地震が来た。ふせようと思う瞬間に、私の左目の上に大きく重たい物が落ちてきた。もう心の中では、『目の上が痛いよー。もう止まって、やめて』の繰り返しだった。しばらく続き、気付いたら、父がかぶさってくれていた。安心すると、アツという間に父の次の行動が始まった。てきぱきとコートと靴をわたしてくれた。

外に出た瞬間、空襲の後のように、壁がはがれ、水道管から水が出ていた事が目に飛び込んできた。耳からは、アッチコッチから、戸を叩いていたりする音が入ってきた。その時、足は震え、涙があふれでた。頭がキーンと鳴りだし、どうしたらいいか分からなく、恐ろしさでいっぱいになった。体中が肌寒く、鳥肌が立った。寒いのか、恐ろしいのか、どうして震えているのか分からなかった。

いつもは嬉しさいっぱい飛び出していた家が、今日は恐怖感の心で飛び出た。非常階段を一生懸命降りた。7階から下を見おろすのもつらく、足元だけを見ていた。

1階からマンションを見上げると、壁はかけていて、今にも倒壊しそうに傾いていた。幼い頃か

ら遊んでいた、思い出の自転車置き場もひどくなっていた。あふれ出す涙を見て、父はそっと私を抱きしめてくれた。駐車場では柱が折れていて、車が建物の下敷きになり、口の字型の北側は、傾いていた。幼い頃から遊んでくれた優しいお兄さんがりっぱに指示していた。

暗い中で、懐中電灯が小さくともっていた。私の心は、どこかに行ったように、ただ泣くばかりだった。その中でも、知恵がつく頃から、10年近く育ってきて思い出がいっぱいだったからだ。友達と7階から石を落とした事、友達と一生懸命自転車を練習した事を思い出したのだった。とにかく、すぐ前の灘中・高に避難するときに友達と合った。その家族では怪我がなかったそうだ。

行く途中の信号は止まっていた。道路も地割れがあった。段差があり、踏み外す事も数回あった。7時頃になれば、近くのローソン・コンビニ・電話ボックスは大勢の人だった。あっという間に、灘中は百人近くの人だった。足にしもやけもでき始めた。

住宅の窓を割り、閉じこめられた人を助けようとする行動。又、近くの家から、煙が上がるといふのも見られた。母達はこれからどうしようかという、絶望を見せる表情もあった。9時頃には、父達が車で森北町へと動いていった。5時から、どんどんと時間は過ぎ、私はボーッとするばかりだった。

頭の中に残っていたのは、1月16日までの思い出だった。思い出のフィルムの周りは心の暗闇だった。

あっという間に過ぎた5～6時間。11時頃に近くにある父の学校へいった。足取りは重くまるで疎開のようだった。学校へつくと、私と弟は遊んで気を紛らわした。母はその横で力無く座り込んだ。私は心配でたまらなく、声をかけると“大丈夫。心配しなくても…”という笑顔を見せてくれた。

母はそれから、そういう悲しみの表情を見せなかった。夜は夜で父が見回り45分中15分くらい私の隣で寝てくれた。そして余震が来ると必ず私の横へ来てくれたので安心して寝れた。

二日目は9時頃にガス爆発の危険のためにJRの北側の甲南小学校へ移った。父の学校とは違い、旅行のように騒がしかった。両親は、来てすぐ用事に出かけた。

留守中に隣のお姉さんと知り合った。とても優しくかった。沈んでいた心は、弟と三人でしゃべるにつれて、戻ってきた。お姉さんも地震の時はつらかったらしい。こういう事から、つらい試練のご褒美に色々な人の優しさを与えてくれる事に気付きました。

三日目にはお姉さんにお礼の手紙を書き、従兄弟のいる大阪市西淀川区に来ました。道は渋滞していて、着いたのは深夜12時30分頃でした。母は友人と、姉の顔を見ると涙を流した。それを見て、母は今まで耐えていたという事に気付きました。人の優しさの次に、本当の涙の意味を覚えました。

今まで私が流した涙の数は少なかったが、怒られたりにつまらない涙が多かったが、これからは涙を大切にしていきたいと思いました。

しばらくはつらい事が家族それぞれにあると思うが、それを助け合ってがんばりたいです。つらい事も、嬉しい事も、一つの思い出になりました。



田中 薪（後方） 田中 涼（前方）

住むことの出来ないマンションの一角で。自動車が埋まっています。（平成7年7月2日撮影）

## 恐怖の地震

小学4年生 田 中 涼

5時半、神戸で震度6の大地震がありました。直下型です。みんな飛び起きて、布団を被りました。お母さん達がそれぞれ僕たちの布団にはいりました。その時ぼくの心臓は、ドキドキして恐かったです。

少しおさまると、急いでマンションから出ました。途中で友達とかといました。みんなで、灘のグランドに行きました。おじいちゃんとかに電話をかけてもかからないし、どうしようもないから、友達の車でおじいちゃんのところへ、お父さんが行きました。おじいちゃんの所は、外科で旧館は全壊で、新館は大丈夫でした。友生養護学校にいて、一日だけ泊まりました。その時も、余震がきていました。

次の日、家に戻って自転車の鍵をもって出て、自転車を出して甲南小学校に行きました。おやつとかを食べながら、お姉ちゃんと「こわかったね」と言っていました。配給はパンだけだったけど、とても嬉しかったです。食べ終わってから花札をしました。お母さん達と寝ました。とっても暖かかったです。夜も、余震がきたりして朝を迎えました。

朝10時に谷本外科に向かいました。入ってみると中はごちゃごちゃで、自動販売機は50センチメートル以上動いていました。ぼくはゾーッとしました。

3時半に谷本外科を出て、車で大阪に向かいました。車の中で寝ていて、12時に起きると車が動いていなくて、ハッとしました。バッテリーが上がっていて、トラックの運転手さんに頼んでバッテリーを充電してもらい、また大阪へ向かいました。

大阪に着いてとても安心しました。でも、これほど恐かったのははじめてです。

## 阪神大震災の直後

灘 区 船 曳 和 雄

1月17日あのかたき私は京都にいた。激しい揺れで目が覚めた。今まで大した地震を経験していなかったたので、震度5の京都でも非常に驚いた。すぐにテレビをつけた。近畿地方に大きな地震があったことをNHKはすでに告げていた。そのとき神戸の情報はなく、実家のことが気になったたのですぐに電話をかけた。奇跡的に電話がつながった。「だいじょうぶ?」「なにもかもむちゃくちゃよ」と母。「家中がひっくり返っていて壁がヒビだらけよ」いつも気が強く張りのある母の音が、今まで聞いたことがないほど弱々しく聞こえた。気が動転したが声が聞けたたので一応安心した。母は入院患者さんを見に行くからと電話を切った。その後テレビで神戸が震度6以上で、大きな本棚が激しくしかも軽々と4~5メートルも右に左に動くNHK神戸放送局の様子や、無数の火の手が神戸市内に見えるとのヘリコプターの中継映像が放映された。すぐにまた家に電話をかけた。しかし電話の故障か今度は誰もでない。それどころか、混線のためか非常ベルの音が電話趣しに聞こえた。ああ火事になったと覚悟した。



**コープ六甲店はアーケードを10メートル壊した。わが家は外形を保っているが雨もりはひどい。大部分のガレキを除いたコープ(平成7年3月20日頃撮影)**

阪神高速が落ちていたることだったので、すぐさま行き付けの喫茶店のマスターのオートバイを借りて神戸に向かった。京都市内、高槻あたりまではさほど混んではいなかったが、茨城あたりから全く渋滞で動かなくなった。とにかく一刻も早く家にたどり着きたかったたので歩道を走り続けた。豊中あたりから瓦がくずれコンビニエンスストアに行列ができはじめていた。西宮からは全く様相がちがう。171号線の道路の橋が数カ所で落ちており、完全に交通は麻痺状態だった。何度もオートバイでさえ通れないほどいたんだ道路を、オートバイを持ち上げて段差を乗り越え何とか神戸市内に入った。途中たのまれていた上司の実家の医院を見つけようとしたが、そのあたりの木造は完全に倒壊しており、大声で捜したが手がかりもなく(残念乍ら御両親は圧死されていたと後で知った)、しかも公衆電話には40人以上の待ちがあり心にかかる実家に急いだ。胸が張り裂けそうだった。倒れた電信柱を避け、崩れ落ちたJRの架線を何とかくぐり抜け、ようやく実家のある灘区森後町3丁目に近づいて行く。見慣れたJR六甲道駅周辺がまるで怪物が通った後のように変わり果てていた。さらに山手幹線沿いのco-op六甲店の1、2階が完全につぶれているのが遠くから見えた。正直言って泣き出しそうになった。近づくとco-opに隣接の実家は何とか



建っている。軒並み崩れた商店街の中でとにかく立っていた。よかった。本当によかった。誰にというわけでもなく心の中で「ありがとうございました」と叫んでいた。京都を出発して4時間あまり、キレツやガレキのうずもる家の中にはいる。2階で放心状態の看護婦さん達と突然帰った息子を見て驚く母親がいた。とにかく家族の無事を確認できたのでやっと安心した。



**室内でもオーバーをはなせず外気温と変わらぬ月夜にベランダで炭をおこして餅をやく。**

それから電気のつくまでの5日間はまるで難民キャンプの生活だった。短い冬の日に水くみ、食料の調達、家の応急修理など、貴重な明るい太陽のある時間を惜しんで働いた。被災は場所によって信じられない程の差があり、地震直後でさえガラス一枚割れず電気のついていた鶴甲co-opに買い出しに行き、夜でも明るい普段の生活を見て、やりきれないむなしさを感じた。山の手から見た町はまるでブラックホールのように暗く、その中で所々に赤い火の手が上がっていた。ガスのおいがする道路を通りながらゴーストタウンと化した森後町に戻った。

その後の3週間は京都の仕事を教授にわがままを言って免除してもらい、神戸で久しぶりに生活した。また近年あまり父親とじっくり話をしたことがなかったが、毎日同じ部屋でビールを飲みながら話をして寝た。今まで長男だからいずれ家のことを考えなければならないときが来るとは思っていたが、それはあくまでいずれのことと思っていた。しかしすでに当事者になっていた。突然の出来事だったが、いずれいずれと曖昧にしてきたことを真正面から見つめて、なにごとにもpositiveに考え、これからのふるさとの発展を期待したい。

(船曳医院)

## その時

灘 区 船 曳 美也子

17日未明、自宅2階にて就寝中。ドーンと地底で爆発したような音と同時に身体が宙に浮くのがわかった。気付いた時はベッドの横にころんでいた。「まさか…地震?」すぐ近くから悲鳴が聞こえる。電気は?つかない。電話は?不通。再び悲鳴。その方向を見ると、視力 0.2の暗闇にも、すぐ近所で火がでたのがわかる。火はその家の屋根から吹いている。「火事/」心拍数も120にup。冷静に、と呟きつつ、パジャマの上にコートとマフラーを着て重要な書類や通帳だけ紙袋に詰める。幸い1階の懐中電灯が弱くだが点いた。だが1階はガス臭い。洗面所へコンタクトレンズを探す。暗闇でゴチャゴチャで見つからない。あきらめて逃げよう。静寂。近所の人はどうしているのかしら。外へでると、向かいの家が半分崩れている。そこから家族7人が脱出していた。皆裸足。「ガス臭い。早く逃げたほうがいい。六甲小へ!」と御主人。子供が足が痛いようと泣く、まって、と家に戻り2足だけつかみとる。途中の道、瓦礫をこえて広い道路にでる。近所にある実家が心配で戻る。途中、屋根瓦しか見えない家がある。うす暗闇の中、横に若夫婦がうずくまっている。奥さんは泣いている。「教科書にのっていた関東大震災の写真)みたい…」おもわず呟く。



**ゴッタガエシの室内。ランプで灯りを取りながら足元のガレキを片寄せて椅子の上のガラス片をさけ、一つの鍋を家族でつつく。**

空が明るくなり、外へ出てみる。実家も中は瓦礫の山だが、隣も向かいもビルの1階がなくなっていた。少し歩く。JR六甲道は倒れている。道路はすでに避難を始めた車で一杯。電話は不通のまま。夕方。あの一带はまだ燃え続けている。ホースはきているが水がでないそう。私達の前で商店街のうどん屋が燃えている。店の主人が、「なんとかしてくださいよ」と消防の人にすがっている。眼鏡もないためボーッとみえる視野の中で家やビルから火、煙がでるのがわかる。夜何回も余震が来る。外をみるとまだ燃え続けている。TV電気電話なし。ラジオで被害を知る。翌日ようやく公衆電話で病院に連絡がつく。

他の場所もこういう感じなのだろう、と勝手に思っていたが、実はこの一带は最も被害が大きかった地区の一つであることを知ったのは数日後のことでした。

(船曳医院)

(c)1995社団法人神戸市医師会（デジタル化：神戸大学附属図書館）

## 阪神大震災を体験して

灘 区 羽 湊 滝 子

海や山の美しい神戸にあこがれて、但馬から看護婦を目指して神戸市灘区船曳医院へ就職しました。看護学校と仕事にと無我夢中で頑張ってきた20年余り。

1月17日、連休明けの日でもあり、朝6時には起きて早めに勤務先に行こうと思っていました。グラグラ ドーン。まだ寝入っていたので何が何だかわからないまま、半分身体を起こしねじっていました。真っ暗の中、本棚が斜めに倒れその隙間にいたのが幸いしたのは後からわかりましたが、古い木造の2階建の文化住宅の為、ドスンという大音響と共に2階が落ちてしまったのです。私のいた1階はすっかりぺちゃんこになっていました。大きな本棚の重みが下半身にかかっていたので身動きできず、右手人さし指の爪がはがれて血が流れているのがわかりました。背中が痛くて動けず息もしにくく、声が出にくいけど大声で「助けて、助けて」と何度も叫びました。このまま死ぬのかなあ…誰も気がついてくれなくて…気が遠くなりそうでしたが、2階の学生さんの声が聞こえてきたので又、「助けて」と叫びました。2階建の文化住宅は、神戸大学の男子学生が12室位を占めておられました。「下にいるぞ！早く懐中電灯」と言う声や、灯りが見えたので「ここにいる、助けてエ」と叫びました。「場所がわかった。すぐ助けるから安心して頑張れよ」と励まされました。壁土や柱の梁やら本棚まで、3人の学生さんが1時間もかかって隙間を開けて「すぐ助けるから」と幾度も声をかけて励ましてくれました。上半身をかかえるように3人で引き出してもらった時は、嬉しくて「ありがとう、ありがとう」と唯くり返していました。この時、腰や背中の中あざだらけの全身打撲の痛みを感じるゆとりはありませんでした。パジャマのままだったので、近所の方が毛布でくるめて下さり、指にもガーゼを巻いて下さいました。真っ暗で外の状況が全くわかりませんでした。火が目の前までできていましたので「早く逃げて！」の声で、徒歩で5分位の勤務先に走りました。後からわかりましたが1階の6人の内、生きているのは自力で逃げた2人と助けられた私の3人のみで、残りの3人は圧死、焼死。火の勢いは強く、眼前にせまる火を見て手だけしかひき出すことができず、「僕はもう駄目だから皆逃げてくれ」と言う学生さんを見殺しにしかできなかったという話を聞きましたが、もう少しで私も同じ目にあうところだったのです。本当に生地獄を経験しました。



アーケード街で医院に対面するビルは1階がない



**船曳家の北面に隣接のコープ六甲店の壊れた1、2階の傾きで当方のあらゆるメインパイプを切断。間の通路がなくなり一階の厨房はトンネルの様な暗さだった。**

勤務先も雨漏りやがれきの山でしたが、傷の痛みが後から強くなって気ばかりあせる毎日でした。助けられた私は着の身着のまま、不自由な日々でしたが、船曳先生宅にお世話になりながら私の選んだ大好きな神戸で、看護婦として一步一步、前進するよう頑張る決意です。

(船曳医院勤務)

---

(c)1995社団法人神戸市医師会 (デジタル化：神戸大学附属図書館)